

NO. 38
SUMMER
1972

英語展望

ELEC BULLETIN

国際展望

- 佐伯彰一・桜庭信之・本間長世・加瀬英明・鈴木 進
「私の英語歴」 成田成寿
鼎談「国際化時代の語学教育」
小川芳男・前田陽一・金山宣夫
「英語教師としての教養」

- 「中東とインドネシアの英語教育見聞」
新英文法講座「BE動詞について」
「日・英慣用表現の比較(1)」
「現代英語の慣用と辞書」
「Wh-疑問文のイントネーション」
翻訳「方丈記」

英語展望

NO. 38
SUMMER
1972

ELEC BULLETIN

Edited by Fumio Nakajima

The English Language Education Council, Inc., Tokyo



【国際展望】

英語を話すこと	佐伯彰一	2
ある国際人の誕生	桜庭信之	4
国際的相互理解について	本間長世	6
英語で話すということ	加瀬英明	8
Living Context の中と外	鈴木進	10
私の英語歴	成田成寿	12

【鼎談】 国際化時代の語学教育

小川芳男・前田陽一・金山宣夫	16	
英語教師としての教養	齋藤勇	24
中東とインドネシアの英語教育見聞	今村茂男	30

【新英文法講座】 BE 動詞について

中島文雄	31	
日・英慣用表現の比較 (1)	長谷川潔	36
現代英語の慣用と辞書	外山敏雄	41

Wh-疑問文のイントネーション

渡辺和幸	44
------	----

【翻訳】 方丈記

草島時介	55	
【新刊書評】 『文法論 I』	山口秀夫	59
<i>From Deep to Surface Structure</i>	九鬼博	63

【新刊紹介】 『The Development of Modern Language Skills』

Y. S. Jolly	66	
『ことばの世界』	黒沢博	67
『ラダー英和基本語辞典』	國弘正雄	68
展望通信	下村勇三郎	70
	71	

英語を話すこと

SAEKI

SHOICHI

佐伯彰一

英語で話すというのと、英語を話すというのは、大分違うのではないだろうか。

日本語のテニオハの微妙な違いに頼りすぎた言い方になるかも知れないが、この2つはどうやら全くの別物といいたいくらい違っているような気がする。しかもぼくの考えるところ、この違い自体が、二重に入り込んでいるようだ。

まず素朴なレベルでは、英語を話すというのは、ともあれ英語の単語か文章を発音する初步的な段階を意味し、英語で話すのは、自分の考えたこと、言いたいことを英語で言いあらわすという事を意味する。この段階では、いうまでもなく、英語で話す事の方が上で、望ましい。会話の教科書にのっているような、型通りの文章やフレーズを、棒をのんだみたいに、しゃちこばって発音しているのは、窮屈でやり切れない。一つ覚えの何とか親善でもないかぎり、そんなことは願い下げにしたい。幼稚だろうと、突飛だろうと、英語でしゃべる方がずっと人間的で、ましな作業であろう。

しかし、問題はその一步先のところにあるのではないか。英語でしゃべるという所へは、ある期間の努力と勉強で、わりと簡単に到達できる。自分の頭の中ですでにはっきりしていること、ほぼ論理的に明瞭な形をとっているものに、英語という表現の衣を着せるだけの作業は、さほど難しいことではない。しかし、これは要するにすでに日本語で考えたことを、そのまま英語に言い変えているだけのことではないのか、そういう疑いを抑えがたいのである。

自分の経験をふりかえってみると、英語でしゃべるという所へは、わりに楽に行けた。ところが、それから先が、さっぱり進めない。どうもとまりっ放し、足ぶみのし通しという気がしてならない。

ここ10年ほどの間にアメリカのミシガン大学、カナダのトロント大学で、日本文学の講義を受けもったことがあって、とくに文学史のコースとなると、こちらは知らぬことだらけだから、にわか仕込みの泥縄の勉強で苦しもあり、楽しくもあったが、とにかくこちらの知識と

考えを一応英語で言い現わすという作業に、それほど苦労はなかった。頭の中で、一応整理がついてしまえば、前日に大体の骨子、要点をノートしてみる。始めは、そのまま読み上げることの出来るような、きっちりした文章を書いてみたが、これでは息苦しすぎるし、あまり固苦しくもなるので、話の筋道だけを、題目風に書きとめてゆく。すると、もちろん、時には大分つかえもあるものの、何とか1時間は持たせることが出来た。

一つは馴れであり、さらには度胸、いや図々しさかも知れない。こと日本文学に関するかぎり、知識も感受性もはるかにこちらが上わ手である。言い廻しはまずくとも、こちらのしゃべっていることに、うそまやかしはない。そんな自信が内にあるものだから、学生の質問にまごつかされた時でも、何とか切り抜けることが出来た。少なくとも、そんなにどぎまぎしないですんだ。

ただそのうちに、疑いがわいてくる。自分のやっていることは、つまり既にはっきりしたことを、英語でしゃべっているというだけの話ではないか。言いかえ、おきかえというにすぎぬのではないか、と。

大体が、おしゃべりなたちであり、おしゃべり自体が楽しいという人間なのだが、その楽しさというのは、相手とのやりとりのうちで、また自分でしゃべっている間に、ふと思いつがけぬ転回が生じ、不意打ちのアイディアが浮んでくる所にある。思いがけぬもの、意識しないものが、おのずと浮び上ってくる所に、おしゃべりの醍醐味があるだろう。

ところが、英語では中々そうはゆかない。言いたいことさえも、言い現わしきれないという不満ばかりにつきまとわれがちである。つまり、どうも意識が先に立って、無意識をのびやかに動かすという所へゆけないのである。しかし、一般的にいって、表現という作業では、無意識の部分こそが、じつは影の主役ではないのだろうか。もちろん、超現実主義者のように、automatic writingとやらを信じこんでいる訳ではない。しかし、こと文学、芸術に関するかぎり、意識と醒めた理性だけでは、片足の歩行にすぎない。無意識がおのずとふみ出しを助

け、導いてくれる所に、年きた表現が成り立つのではないだろうか。

これは、いい気ないものねだりかも知れない。文学についてしゃべることを、文学そのものと取り違えてはならぬ。そんなことは僭越な限りで、もっと身の程を心得て、文学について知的、理性的にしゃべるように心がけた方がよろしいとたしなめられるかも知れない。もちろん、こちらの他愛ないおしゃべりを、そのまま文学的、芸術的なレベルに引き上げたいなどと考えているわけではない。ただ、表現という一点においては、おしゃべりも文学作品も同じ根を共有しているはずで、その根っこ部分にひそんでいるのが、無意識の働きだと言いたいのである。

その点で、場所や相手という心理的な要素がかなり関係するような気がする。教室といった固苦しい場所では、どうしても意識的、あまりに意識的になりがちだが、一緒にビールでも飲みながら、気の合った相手とのん気にしゃべっていると、たとえ外国語で話していようとふと無意識が動き出してくれるような気がする時がある。意識によるこわばりが、少なくともゆるんで、おのずと何かが湧いてくるように思える。そうだ、この意識のこわばりというのが問題で、これが支配権をふるい、目ざわりな身振りをちらつかせている限りは、英語で、話すという段階から脱け出せない。英語をしゃべっているとは、とてもいえない。そして、ぼく自身の場合、残念ながら、こういう無意識の至福状態は、ごくまれにしか訪れてくれぬのである。

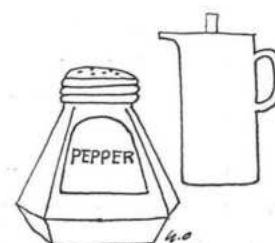
ここで、逆のケースを思い合わせざるを得ない。つまり、外国人にとっての日本語である。この頃、日本語のうまい外国人がずい分とふえた。たとえば身近なところですぐ思い浮ぶのは、日本文学研究家の Edward Seidensticker, Donald Keene 氏らであるが、見事な日本語で講演もするし、また長い時間一緒にいて、日本語でしゃべり合っていても、ちっともくたびれないらしい。えらいものだと感心する。こちらはとても、ああはゆかない。もっともこの両氏とも語学の天才ともいすべき例外で、わが身を引きくらべてみるだけ、おこがましすぎる話かも知れない。しかし、当方としては、全くの同年配で、しかも戦争中から、太平洋を隔てて、互いに敵国の言葉と文学を勉強していたという因縁を忘れない。お互い、対象こそ逆だが、ほぼ同じようなことをやっていて、その後もともかくその一筋につながって生きしのいで来たのである。そこで才分の違いは心得ながらも、何かと引きくらべざるを得ない次第だが、この両氏の場合をもってしても、やはり英語でしゃべる時の方が

格段と沂れる。内容も話しぶりも、段違いに鮮やかである。両氏の日本語は、まことに自然で無理がなく、言い廻しもきれいで、適当にヒューモアまでおりこまれている。満点といいたい所だが、それでもやはり、身についた母国語とは違うのである。

やはり外国語というものはと、ほっと安心もしながら、嘆息が出る。外国語で話すことはそんなに難しくないが、真に深いレベルで外国語を話すことは、至難な業である。ぼくら才薄い凡人が努力してもその境地に至り得ないのも仕方がないとあきらめの気持ちもわいてくる。

怠け者の自己弁護といわれるかも知れないし、こんな違いにこだわらずに、どしどし英語でしゃべる日本人が出てくることが望ましいとも思う。しかし、英語を話すことは、まことに難しい。いや、あきらめや嘆きぶしにふけるために、こうした話を持ち出したわけではないのだ。むしろ逆である。おしゃべりの極致は、やはり意識の消える境地、鞍上人なく、鞍下馬なしの人馬一体の境地にあるだろう。ひたすら型通りに、おっかなびっくりで懸命に意識しながら馬の首にしがみついているのではじつは馬に乗っているともいえない。時には、自分の意志よりは、馬の動きにひきずられてしまうことさえ起るだろう。ぼくら凡人をしても、何とかそういう所から脱け出したい。人馬一体とはとても望めなくとも、せめて大らかにのびのびと馬を操ってみたい。そのためには、意識を離れる工夫が必要ではないだろうか。少なくとも過度の自意識は手かせ、足かせとなりがちである。英語を話す上で、何とかこの意識離れ、無意識を積極的に生かす方法を見つけたい。いや、いい智恵をお持ち合せの方々には、ぜひ教えて頂きたい。英語を身につける上で、無意識の役割こそ大事と言いたい気がしているのだが、いかがなものだろうか。

(東京大学教授)



ある国際人の誕生

SAKURABA NOBUYUKI
櫻庭信之

最近各方面で国際的視野をもった人間像ということが論ぜられている。その理由は日本の経済がある意味で成長し、世界における日本人の活動範囲が急激に拡大しつつあるためであろう。だがしかし、ここでもっとも注意すべきことは、ただ国家の経済が発展し、生産が向上しただけでは国際人は誕生しないということである。国家の中核をなす中産階級が経済的に安定し、その上に健全な常識と道徳意識をもったとき、その時初めてその国家は国際人の養成に乗り出す足場を得たことになる。真の国際人は国家のそのような安定した地盤から生まれる。日本は既にそのような時機に達しているであろうか。私は甚だ不安に思う。

もちろん、いつの時代にも少数の優れた国際人は誕生する。しかしその国際人が眞の意味において活躍できるのは、健全な国家的立場においてである。国民の中核をなす中産階級、経済的にも道徳的にも強力健全な中産階級を背景にして初めてその国際人は眞の力を發揮できるのである。そして中産階級がそのように発展するならば、国際人はその中から無数に誕生することであろう。その時国家は初めて健全な発展の軌道に乗ったといえるのである。私は少数の優れた国際人の代表を送り出すことよりも、このように国家的な力となるべき広い意味での多くの国際人が誕生してくれることを望んでいる。われわれは太平洋戦争という苦い経験を味わったが、少数の指導者の独走を許さぬ広い国際的視野と批判精神をもった多くの勇敢な国民を養成することこそ、この小さな島国が二度とあの苦い経験をくり返さぬためにも必要なことではないだろうか。ここでわれわれは外国語教育の意義を再確認すべき時期に直面していると思うのである。

40台以上の人ならばよく記憶しておられることうが、あの太平洋戦争の末期において、英語教育はどのように圧迫され、終戦と同時にまたどのように復活したか。われわれはこのような急激な変化をもたらした原因を反省すべきである。今こそ反省すべき時だと声を大にしているべき理由がある。一方において国際人の養成を

主張しながら、他方において外国語教育の縮少を計り、実技面のみに重点を置くかの如き主張がなされて来たのはどういうことなのか。われわれはただ産業に奉仕する人間だけを養成すればいいというのか。それでは Mandeville が *The Fable of the Bees*. (『蜂の寓話』, 1705) の中で諷刺しているような慾望を助長させて経済の原動力となし、社会進歩の源泉となるような「産業の奉仕者」を育成し、「私悪は即ち公益」というあの蜂の巣の原理と同じではないのか。250 年も前のイギリスの富国強兵政策や重商主義を批判したマンドヴィルを今ごろ持ち出すのは時代錯誤の面もあるが、その批判精神には今日の日本といえども大いに学ぶべき点がある。かつて私が日本の英学史を研究していたころ、気がついたことは、日本人の英語熱は 30 年を周期としていることである。終戦以来そろそろ 30 年になろうとしている今日、われわれは現在の英語教育の位置をよく考えるべきである。と同時に今こそ英語教育に携わる者はもとより、政治家も役人も終戦のころを思い出して反省し自重すべき時なのではあるまいか。

私は先に国家の中核をなすものは中産階級であるといった。イギリスでいう bourgeois よりも広い意味における中流階級のつもりなのであるが、当然私の頭の中には 18 世紀の初頭に抬頭したイギリスの中産階級の歴史が潜在していた。経済的安定と健全な道徳意識とは、とりもなおさず彼らの誕生と性格を意味している。本当の国際人はそのような社会の主流をなす階級を基盤として誕生することが望ましいと思ったからである。私がいうところの「ある国際人」とは、そのような社会の主流の中から生まれた anonymous ではあるが gifted citizen of the world という意味なのである。国家が未開発の段階にあれば国際人といえば、ある特定の著名な権威ある人物を意味するかもしれないが、18 世紀のイギリスにおけるように、中産階級がその階級意識に覚めて著しい発展をなし、社会の主流としての力を獲得し、世界にその力が認められ始めたころにおいては、その中から名もなき国際人、教養と才能に恵まれた国際人がぼこぼこと誕生

し得る可能性を孕んでいたのである。文学もその中から発展した。特に近代小説はその社会を背景として誕生したのである。では、どのようにして、この中産階級は自らを教育し社会の主流となるべき力を養成したのであろうか。

イギリスにおけるこの中産階級は、17世紀の清教徒の流れを汲む者であった。仕事に励み、商売が繁昌し、金をもうける、これすべて神の恩寵なりと考える彼らは、いったいいかなる生活理念を持っていたのであろうか。彼らの中でもその主力を成すものは、製造業者と貿易業者であるが、そのほかにも技師・弁護士・医者・学者・作家など、雑多な自由職業の階層がその上層部にいた。彼らには特權はなかったが、既に十分に富み、非生産的で浪費的な旧特權階級には強い反感を抱き、新しい社会的地位に対する強い要望を持っていた。彼らは未だ粗野で、社交上の礼儀もわきまえず、ために上流社会に嫌われたけれども、その生活力と新しい社会秩序を創り出そうとする気迫においては、旧特權階級を圧倒するものがあった。彼らは当時ロンドン市内に勃興したコーヒー店 (coffee-house) に集まって、コーヒーを飲みながら議論をし、知見を広め、そして取り引きをした。コーヒー店の存在はイギリスの新興中産階級にとって重要な役割を演すことになった。「コーヒー店の繁昌とミドル・クラスの勃興とは切り離して考えられない」と故上田辰之助教授も述べておられる。このコーヒー店の模様を *Cambridge History of English Literature* は次のように描写している。

「18世紀の初葉においては、コーヒー店はロンドン生活のもっとも注目すべき特長となった。毎日この社交場に集まつてくる人々は、仲間の考え方や振舞いに興味をひかれたばかりでなく、些細な行動や発言に対する議見、すなわち他人の偏見や趣味を洞察する才能を涵養し、その心情をさぐる楽しみを悟った。かくして彼らは同胞に対する新しい態度を修得したのである。以前には嘲笑され軽蔑された人物でも今日では理知の謎として珍重され奇行は同情をもって注目され、寛容は知識人の特色となつた。…かようにして中流の諸階級は自らの教育を成しとげたのである。彼らは会談から生まれたのである。

コーヒー店は単にコーヒーを飲むだけの場所でなく、これら新興階級の社交場であり、同時にまた商取り引きの場所でもあった。コーヒー店で商人は取り引きについて客と商談し、工場主は製品の売り込みや景気について談合し、弁護士は訴訟の成り行きを依頼人と打ち合わせ、詩人はいつものテーブルで作詩に余念がないといった調子」。

かくして自らの教育を成しとげたイギリスの中産階級においては、Adam Smith が『道徳情操論』で述べているように、「利己心」の活動、即ち「富裕への道」はそのまま無意識に「道性への道」につながったのである。正直で公正で中庸を得た行為が隣人や同業者の信用と愛顧をかち得た。Respectability という庶民の美德はその中から生まれて来た。ここにおいてイギリスは18世紀の半ばにして経済の安定と道徳の確立をみる。これが世界へ発展する国家的基盤であって、イギリスはこの生活力旺盛にしてしかも常識に富んだ中産階級を足場として発展した。

世界的国際人の条件は先ず第1に健全な社会をその背景に持つことである。その点18世紀のイギリスは、国際人を世界に進出させる条件を備えていたと思う。

国際人とは相手を理解し得る人でなければならない。相手を理解するには、先ず自己を知らねばならない。他国を知る前に自国を知る心要がある。私が先に注意したのは、日本人は今や十分に日本を知り得たかということである。30年を周期としてよりが戻るようでは十分に自己を知るとはいえないのではないか。寛容の精神が国際人に要求されるように、自己に対しては厳しい自己吟味の精神が望ましいのである。イギリスの清教徒にはそれがあった。彼らには経済的個人主義に根ざすロマンチックな精神と、宗教的個人主義に由来する自己分析、自己吟味の精神が幸いにも共存していたのである。バランスの感覚はそこから生まれてくる。イギリスの public school がこの 'sense of balance' を教育の目標にしていることも注目してよいであろう。

さて、ひるがえって日本の現状を考えてみると、私がかねがね恐れていた30年前の日本に逆戻りしそうな傾向がいたるところに見られる。喉元過ぎれば熱さを忘れるでは、今までわれわれは何のために30年間苦労して來たのかといいたくなる。国際人の養成の必要を説くところ、いかにも日本は進歩したかにみえるけれども、よくよく考えてみればまだその地盤が固っていない気がするのである。中学校・高等学校における英語教育でも、また大学における一般教育の分野にても、健全な中産階級を確立するのに果して役立っているであろうか。私は教育者によりも、むしろ為政者に、役人の方々にこの点をもっと謙虚になって反省してもらいたいのである。選ばれたる少数の国際人を生み出すよりは、名もなき多数の国際人を生み出すことが、島国日本にとっての急務ではないかと。その条件として、経済的にも道徳的にも常識的にも健全な社会を確立せねばならないのである。

(東京教育大学教授)

国際的相互理解について

HOMMA

NAGAYO

本間長世

織維問題をめぐって日米間の相互理解が十分でないことが論じられるようになり、文化交流の重要性が認識されるに至ったのは、大変歓迎すべきことであるが、事の性質に関して誤解をしながら、文化交流さえ活潑になれば問題は解決されるというような議論を述べる人もいるようなので、新しい不安が湧いてくるのである。

日米間の「パートナーシップ」に摩擦が生じた時、日本とアメリカとは文化の伝統が根本的に異なっているのだから、本来摩擦や対立は避けられないのあって、これまで両国間の関係がなめらかだったためにこれからもうまくいくのだと思い込んでいたのは、まことに浅はかだったという反省が生まれたりした。しかし、文化の伝統が同じでも対立が戦争にまで発展し得ることは、キリスト教文化の下にあるヨーロッパ諸国の関係史を振り返れば明らかであるし、アメリカ合衆国の歴史においては、同じ言葉を話し、同じ神に祈る北部人と南部人が、4年間にわたって南北戦争を戦ったのである。今日の世界において相互理解が最も十分に行なわれるはずのアメリカとイギリスの間でも、1962年にスカイボルト・ミサイルの開発中止をめぐって感情的対立が深刻になったといわれ、日米間の相互理解のための教訓としてこのエピソードが引き合いに出されることがあるが、英語国民の間でも誤解が生ずるとすれば、問題は単に言葉だけのことではなく、また文化の伝統のことでもないはずなのである。

織維交渉が失敗したことに関連して、1924年にアメリカの連邦議会が移民割当制限法を審議していた時、日本の駐米大使が、日本移民をアメリカから閉め出すような立法がなされれば、日米間に重要な結果を及ぼすことになるという趣旨の手紙を國務長官に送り、これがかえって議会を刺激して、結果的には移民法の成立を促進したという歴史のエピソードを持ち出す人もあった。この場合にも、これから何を教訓として引き出すかが問題となる。駐米大使が手紙を書くにあたっては、國務長官が相談にあづかったといわれるのであるから、“grave consequences”という語を用いたのが判断を誤ったとい

うよりは、アメリカ政治における行政と議会との関係についての理解の仕方が足りなかつたために手紙が逆効果を生んだということの方が、歴史の教訓としては重要であると思われる。

したがって、国際的理解决定を深めるためには、文化の伝統が異なるから相互理解は到底無理だと諦めてしまうのではなく、言葉の相違があまりに甚だしいので真のコミュニケーションは成り立たないと敗北主義的になるのでもなく、逆に日本の伝統文化の紹介にもっと力を入れればそれで済むと簡単に片づけるのでもなしに、状況や目的に応じた多面的な対応の仕方を考えることが必要になってくる。

相互理解という以上は、まず相手の国をよく知ることが重要であり、日本との関係が深い国や地域についての研究は、ますます盛んにならなくてはならない。しかし、「ニクソン・ショック」で日米関係が悪化したと騒がれた時にはっきりしたことは、アメリカの日本研究の熱心さに比べると、日本のアメリカ研究は質的にも量的にも立ち遅れているのではないかということだった。アメリカ国民全体を取ってみると日本に対する関心はあまり大きくはないし、日本についての知識も乏しいのであるが、少数の専門家はすぐれた研究成果を挙げている。これに対して日本では、国民全般のアメリカへの関心の度合いはかなり大きく、アメリカについての知識も必ずしも乏しいとはいえないが、組織的な地域研究としてのアメリカ研究は、日米関係の密接さに比例しているほど十分に行なわれているとはいえない。

このような現状は、それぞれの国の事情をある程度反映したものなのであろう。アメリカに対して日本文化の紹介をどれほど精力的に行ってみても、アメリカ国民全体が日本に対して絶えず関心を持ち続けるような日が来るとは思われない。アメリカにとっては、少数の日本専門家がつねに存在することの方が大事であろうし、また自然もあるのであろう。逆に日本においては、地域研究のプログラムは大学の中でなかなか発展しにくく、また学者たちもアメリカ研究を表看板にするよりは、特

定のディシプリンをマスターして、具体的研究対象としてアメリカの社会や文化を取り上げるという人の方が多いだろうと予測される。したがって、このような方向を無理に変えようとするのではなく、この方向にそって研究や教育を充実させることを考えるべきである。

地域研究を厳密に考えると、研究すべき国の言語に習熟し、研究の武器となるべきディシプリンを修め、その上研究対象を全体としてとらえる広い視野が備わっていないことはならないのであるから、地域研究は大学院レベルで行なうべきであるという議論も十分成立する。しかし他方においては、アメリカのように日本との政治的・経済的・文化的関係が密接な国の場合には、大学の教育課程で一応の入門的知識を修めることが望ましいという議論も説得力がないとはいえない。

アメリカに関する書物は、今日おびただしく出版され、アメリカを論じた雑誌論文も毎月多数書かれているが、アメリカについてのバランスのとれた知識を持ち合わせた人は意外に少ない。たとえば、あるヨーロッパ史の専門家は、日米関係を論じた文章の中で、「1930年をすこしすぎたころ、それは2度の世界恐慌を離脱し得たアメリカが第一次大戦で確立した途方もなく巨大な生産力によって世界の覇者となるべく急上昇を試みたときである」と述べているが、ここに引用した箇所からだけでも、この文章の筆者が持っているアメリカ史の知識は非常に不正確なものであろうということが推定できるのである。啓蒙としてのアメリカ研究が広まることが必要であることは、あらためて説き立てるまでもないほどであるが、現在大学でその役割をわずかに担っているのは、英語の講読の時間にアメリカを論じた文章がテキストに用いられた時であるといつても、それほど言い過ぎではないであろう。アメリカ研究のプログラムを備えた極めて少教の大学を除けば、アメリカに関しては独学であるという学生が圧倒的に多いということになるのである。

今日の日本においては、どのような職業に従事しても、何時アメリカと関わり合いを持つようになるかわからない。アメリカとはおよそ縁がないように思われた仕事に励む中に、急にアメリカの事情を調べねばならなくなったりすることは、しばしば耳にすることである。すでに職業人となった人びとにアメリカについての一通りの知識を与える機関としては、貿易研修センターの地域研究プログラムや、アメリカ研究振興会のセミナーなどがあるが、何れも極めて限られた人びとを対象としたものに過ぎない。

アメリカに関心を抱く専門家および一般の人びとに共

通する問題は英語である。現在の日本においては、国際政治の専門家でも、外国の学者を迎えた会議で自分の意見を十分に英語で表現できない人がいるのであるから、アメリカ研究者の中に英語を十分に使いこなせない人がいても不思議はないといえるかも知れない。むしろ重要なことは、戦時中のように英語の学習やアメリカ研究が極めて困難であった時代とは異なってアメリカ留学の機会が非常に増え、日本国内においても英語および英語文化に接することが多くなった今日においても、新しい世代の研究者たちが、専門家としてのアメリカ理解に必要なだけの英語の力を身につけている者ばかりとは限らないことである。

アメリカ研究者の集まりであるアメリカ学会は、毎年1回年次大会を開き、研究発表やシンポジウムを行なっているが、大会における使用言語は、アメリカの学者の特別講演以外は、これまでのところすべて日本語である。将来は、アメリカ、ヨーロッパ、アジアの専門家を加えて、国際的なアメリカ研究の場となることが望ましいが英語を用いて年次大会を開くとすれば、やはり極めて少数の人に大きな負担がかかるというのが現状であろう。すぐれた研究業績と英語能力とが必ずしも相伴わないとすればどうしても優秀な通訳が必要となってくる。

この点は学会に限らないのであって、日本人が参加する国際会議の場合には、熟練した通訳が活躍することを求められるのであるが、優秀な通訳は数が少ないので、通訳に頼るにせよ会議参加者が英語の素養をある程度まで身につけているか否かで、通訳の活躍の仕方も変わってくるように思えるのである。

長谷川如是閑の『ある心の自叙伝』を読むと、明治初期の男女の会話にしきりと英語が使われたことが述べられ、当時の小説の中の女学生が「だってサブスタンスを見ないでは、斎藤さんはライヤアだから」と語っていることが引用されている。今日の日本人の会話の中でも英語が使われる度合いは非常に大きなものであろうが、そのほとんどは単語を用いているだけで、英語を身につけて使いこなすこととはあまり関わり合いがない。他方では、東京の高校で、「I my me」の変化もできない生徒が入ってきたという例もあるということも聞く。こうした点は、日本人の英語学習能力について悲観的な考えを抱かせる材料であるが、日本が国際社会でますます活躍しなくてはならない以上、正しい意味での相互理解を深めることは絶対的要請であり、日米関係はいうまでもなく、他の国々との交流のためにも、英語を使いこなす人を増やすことが刻下の急務なのである。

(東京大学助教授)

英語で話すということ

KASE

HIDEAKI

加瀬英明

シンガポールで、リ・クワン・ユー首相が主催した晩餐会に招かれたアメリカ人が、日本に戻ってきて、私にこのような話をした。

テーブルのはすまえには、日本人の客がすわっていた。すると、友人の隣に座ったシンガポール政府の高官が、声をひそめて、こういった。

「みてごらんなさい。日本人は傲慢なので、アジア人とはあまり話そうとしないでしょう。」

友人は、日本人をよく知っているので、日本人のほとんどが外国語が下手なために、くちかずが少ないので、と説明した。

すると、シンガポール人は「ありえない」といった。

「日本は世界で GNP が大きな 3 ツの国のひとつだ。それほどの大国の指導的な地位にいる人が、英語ができないなんて、ありえない。」

日本がこれだけ世界と深いかかわりをもっているのに、英語を話せる者が少ないということは他の国々と較べれば、あるいは他の国々からみれば異常なことである。これは、私たちが永年、島国に外界から隔離されて住んできたからであるとか、2,000 年近くも鎖国に生活してきた国民の性格が 100 年ちょっとで変わるものではない、といったように、多くの説明が行なわれる。また、江戸時代から今日まで、中国語や、オランダ語であれ、英語であれ、読むことができる者が多くても、話せる者が珍らしいということは、私たちが外国から知識を奪うことには熱心でも、外国人と親しくすることには興味がなかった現われである、ともいわれる。

数年前に、私は地方から東京の大学にきた若者と会った。

「今、語学に力をいれています。これから世界はますます国際化してゆくでしょうから」と、この私の友人の弟はいった。

「語学ですか？」

「ええ。学校のほかに、週に 2 回、グループでアメリカ人からレッスンをうけています。高校では、ESS にいました。」

「ESS って何ですか？」

「英語研究会ですよ。」

どうやら、語学というと、英語を勉強することらしい。彼の場合は、まだ、ディッケンズか、ジャパン・タイムズでも読んでいるのだろうから、学者のような空気が漂っていてもよいだろうが、ドレメに通っている 18, 9 才の娘が、「語学をやっています。将来、洋装店か、そうね、スナックでもよいわ。お店をやった時に、外国人のお客さんと話ができないと困るから」といって、持っている本をみると、This is a dog. と書いてあるとすれば、語学という言葉からくる想像がいくらか裏切られたような戸惑いを感じるだろう。

ここでは、英語を使うためにおぼえようとするのか、英語をマスターするために学ぶのか、2 つの目的を混同している。洋装店か、スナックの主人なら 500 ぐらいの words を知っていれば十分だろうし、さきの学生が卒業して商社に勤めたとしても、5, 6 倍を使うことができれば申し分ない、といつてもよい。外国語の第 1 の目的是、意志を通じることだ。正確な英語を話したり、書いたりすることは、2 番目に必要であるか、あるいはほとんどの人にとっては、まったく不必要なことである。

もちろん、正確な英語を学んでおけば、不正確な、それでも十分に通じる英語を話す時に、それだけ正確な英語に近くなるという利点があるから、一生懸命に勉強したほうがよい。しかし、あまり正確で、完全な英語にとらわれると、純正食品狂が昂じて結局は何一つ食べられなくなるように、外国人が目の前に現われても、一言の英語も発せられなくなってしまう。

英語をマスターするというあまりにも野心的な goal を掲げてしまうので、英語を使って意志を通じさせるという role を演じることができなくなってしまう。これは、出世や、成功を goal にしている者が、おうおうにして日常生活で身の廻りの人々に対して親しい role が演じられなくなるのに似ているかもしれない。

国際会議の席などにでてみると、もっとも発言しないのは、日本人である。それに、ごく最近までは、日本人

として英語が上手に話せるということは、日本人のなかでは、猫が猫であることを忘れて、犬を真似てほえているようにみられてきた。だから、英語を勉強する時にも、語学である、といって、goal にすりかえてしまつたほうが、安全だったのだろう。英語を、茶道や、剣道、書道のような道に変えることによって、日本化することができたのである。

Goal は聖なるものであって、role は卑俗なものなのである。

私はある時に、高名な考古学者と酒を飲む席で、最近の若い者は漢字がよく書けない、と嘆いたことがある。ひとつの例として、ある会社に就職を世話をした大学新卒生から礼状を貰ったところ、「筋張して仕事をします」と書いてあった話をした。すると、老教授は、「漢字が誤字だとか、角が1つ、棒が1つ、2つ足りないなど気にすることはないですよ。漢字にきまりができたのは、ごく最近のこと、××の時代ですからね、ハハハ」といった。その××の時代は、数千年前だったのである。

といって、私はけっして下手な英語を奨励しているのではない。ただ、語学とか、家政学、経済学といったように、何にでも学をつけることによって、ごく僅かな一部の専門家だけの占有物にするのを見ていると、私が専門家でないだけに、いくらか不服になってくるのだ。もともと、home-economics とか、economics とか、もちろん英語も、すべて how-to ものであるはずなのである。

私はどうやら日本の水準よりは、英語がよくできるらしいので、よく、いろいろな人から「いったい、どうやったら英語がうまくなれるでしょうか？」と聞かれる。

すると、私は、今日、日本の学校で用いている英語の教授法からみれば、異端を説くので、相手は何か新しい知識をえたような顔をする。

学校の英語教育は、暗号手の養成に近いのかもしれない。学生のリーダーをみると “Mr. Brown decapitated many officeholders whose...” の decapitated の下には「斬首した」、many の下に「多くの」、officeholder の下に「役職者」、whose には「のところの」と書き込まれている。そして、熱心な学生なら decapitate とか、many といった単語をみなカードにとって、何が何でも記憶しようとする。

私がすすめるのは、1冊の本を暗号文のように完全に解読するかわりに、意味がよく判らなくても、いちいち辞書をひかずに、できるだけ多くの本を読むことだ。それも、自分が好きな分野の本であれば、案外、読めるも

のである。探偵小説、戦記物、脱走物、細菌学と何でもよい。はじめのうちは、おぼろげに大意がわかれればよい。そして、6回か、7回でてくる単語だけをひいてみる。多くでてくる単語は、よく使われる言葉だと思ってまちがいない。

単語というのは、人間のようなものだ。初対面では、何をやっている人か、何ができる人か、どのような癖をもっているか、性格はどうか、酒癖が悪いのかわからぬが、何回も会っているうちには、周囲との関係からも、よくわかるようになってくる。私にとって、take とか、on, bring といった単語は、もう親友のようなものだ。

それに、一生で2度と会わないような人のことを気にしすぎては、取り越し苦労となる。Decapitate といった単語は、あまりつきあう機会がないだろう。たまにしかでてこない単語は、街路ですれちがう人のようなものだ。

文法も、あまり気にしないほうがよい。私のアパートの近くの和食スナックの女将さんは、魚の解剖学的な構造を知らなくても、結構、上手に魚をひらいて料理する。私も道路交通法をよく知らないが、よく道を歩くので、道の歩きかたは、いちおう心得ている。とにかく、はじめはわからなくてもよいから、できるだけ読むことだ。

英語は、いろいろな言葉の寄せ集めである。だから日本語に外来語が増えたことを羞しがるなら、英語などは顔が蒼らんで、とても話せないはずだ。

そこで、単語を憶えるのに、語源をあたってみるのも気分転換になる。School はギリシャ語で「暇」であり、ovation はラテン語でメエメエなく、おとなしい羊、prestidge はやはりラテン語で「騙す」である。Religion はラテン語で手足を縛るの religio, slogan はゲール語で戦場であげるヤーッとか、ワーッとかいう叫び声である。Etiquette は、はじめフランスの宮廷で、田舎者がきた時に宮中の道順を示す札を渡したことから、その札を意味した。

英語を話せるというのは、便利なことだ。もちろん、できるだけ完全な英語が話せ、書けたほうが望ましい。私は日本人のためだけでなく、多くのイギリスや、アメリカの友人たちのためにも、そう願うのである。

(評論家)



Living Context の中と外

SUZUKI SUSUMU

鈴木進

I am in trouble. ということを男性が言った時と女性が言った時では、意味合いが異なる。つまり、女性の場合には、pregnant になった、という connotation があるからで、I を he にしたり she に置換えて pattern practice をしても、意味するところは微妙である。言葉が、何かある心象の代弁者だとすると、同じ国語を話す人達の間でも、個人の経験が異なっている以上、それぞれの心象は異なっている。まして我々が、外国語をきいたり、読んだりして理解したり、書いたり話したりして、自分の意志を相手に communicate するには、そこに大きな壁がある事は否めない。

ある心理学者の説によると、我々の brain は左と右との hemisphere に分かれている、言語をつかさどっているのは、左の hemisphere だそうだ。そして、交通事故か何かで、その left hemisphere を damage した場合、普通3ヶ月から、1年位で右の方が左の function をするようになるという。しかし、それは14才位までの事で、それ以後は uni-lateral function は行なわれないという。そして、この14才までなら言語を自然に覚えられるが、この年令をすぎると言葉を自然におぼえる事は、biologically に不可能になって行くのだそうだ。

我々の大多数は、12才位の時、中学校ではじめて英語に接して、メチャクチャに暗記などして、biological なハンディキャップをもって英語をおぼえ、更に、何年かして外国に行って勉強をする。そしてそのようにして生きた context の中でおぼえた英語も、時がたつにつれてだんだん古くなってしまう。私も、外国には、留学其の他の事で何度か行くチャンスにめぐまれたが、一番長かった1960年代の中頃、米國の中西部にいた頃の事を、言葉の Living Context ということを中心にして2, 3のべてみたい。

私が下宿をしていた chamber of commerce に勤めていた businessman の家で、ある日曜にその主人が教会から帰って来て、教会での事を色々と話している時、教会の片隅にお金を donate する所があり You can't take it. と書いてあったという話をきいた。この You

can't take it. という事と donation の結びつきが私にはすぐにビンとこなかったのが、これが30年代にかかれた play で You can't take it with you. (どんなに地上に富を築いても、天国には持って行けないから生きているうちに有効に使え) といった事で「寄付をして下さい」といった事になる idiom 化した play の title である事にはじめて気がついた。

同じ頃、私のいた研究室に、F という若い instructor がいて、授業に行くと自分の知っている事を全部しゃべらないと気がすまぬといった type の人間で、授業が終わると、得意になって帰ってくる。そんな時に私の研究室に、彼よりも1回り年上の助教授で、自分の知っている事を如何に digest して学生にわかるかという事で常になやみながら勉強している R という学究の徒が来て、いろいろと雑談をしている事がよくあった。F は自分がふり返ってみて満足のいく授業なんて、10年に2~3回位しかなかったという R とは全く対照的な人物で、F と R とが一緒になるとよく口論が始まった。そしてその口論も R が F にむかって、You're in Pepsi generation. というペプシコーラの宣伝文句を吐きするよう言う事でけりがつくのが常であった。He's a real Pepsi. と言えば、若さとエネルギーに満ちあふれた人間を連想させるが、R のような Lost Generation の人間がいうと、如何にも「おまえみたいな、此の間迄 Pepsi などの人で酒ものめなかつた(私のいたこの州は酒をのめるのは21才以上)若造が、ドアの節穴から世の中の事を一寸見た位で何をぬかすか」といった undertone が感じられた。

1965年の夏、私は英國に留学していたが、私の同僚の Q 氏がイギリスにやって来た。

彼は新聞をよく買って来てよく読んでいたが、或る時、新聞の漫画に、蒸気機関車が坂道を登れなくて、乗客が降りて後押しをしている絵が出ていて、その下の Needs a tiger in the engine (機関車の馬力不足) という文句がよくわからぬから説明してくれと言って来た。これなども ESSO のガソリンの宣伝文の Put a tiger

in your tank. というのを、無意識のうちに見たり、きいたりしていれば、想像がつくわけだが、いわゆる Living Context の中で自然におぼえた場合は、すぐに何とか意味なり感じがわかる。しかしこの宣伝文が、東京の目黒の近くで、「あなたのタンクに虎を」と和訳されて出ているのを学校に行く途中のガソリン・スタンドで見て、これではこの虎から、馬力のあるガソリンなどはとても想像がつかないと思った事がある。

英語の idiom 中には、元来の Living Context をはなれて、ある言いまわしに意味だけがついて、英語の中に固定してしまったものが、数限りなくある。Between the devil and the deep blue sea. の devil が悪魔でなくて、船体 (hulk) をさすもので、船にペンキを塗る時に船の甲板から、板をつるして、ペンキ入れを片手に、ブラシでペンキを塗っているとこから出た言葉だなどという事は、もう context がわすれられてしまっている。Grass widow の grass も、子供を生む時のベッドだなどおよそ想像出来ない。そして我々が、idiom だと思って使っている語句には、何時の間にやら、もう古くさくてカビが生えたような trite な言いまわし、つまり cliché になってしまったものが、かなり多くあることも否定出来ない。

私達が、外国で生活をしている時に、テレビを見たり、ラジオをきいたり等して自然におぼえたものでも、その時は、別に何ということではなく見たり、きいたりしていた事でも、外国から帰って来て、タイムや、ニューズウイークのような雑誌をよんみて、辞書をひいてみても、文法の知識を動員してみてもわからないような事で、我々の頭のすみや、耳の奥底にのこっているお陰で、意味がわかるというものも、後になって、特に日本に帰ってから気がつくような事が多くあるものである。

例えば I'd rather switch than fight. (今迄の主義主張を通して、闘って行くよりも、むしろ、この際、馬をのりかえて行く) といった語句でも Viceroy か何かのたばこの宣伝で、I'd rather fight than switch. (他のタバコにかえないで、今迄のんできた煙草をのみつづけて行く) という文句をもじったもので political party の事を話している時や、それに関する記事などをよんでいて、思い出すことがある。そして、横顔を映した写真があって、写真にうつってない面は、きづついているか何かで、顔のむいている方向をかえて、みにくく面をみせたくないといったことまで頭に浮んでくる。

TV Show の人気のある program で Laugh-in というのがあって、今も盛んにみられているらしいが、Sock it to me. というのがあって Tell me. とか Give me the

news. という意味で使われている言いまわしであるが、I have some news for you. といって Sock it to me. といわれても Laugh-in というプログラムを見た事がなければピンとこない言いまわしで、今日かなり広く使われているがこのような言葉をもじってタイム等のシャレがかいてあったりしてもわかりにくいものの一つになってしまう。

同じく TV のコメディアンが、はやらせて、idiom 化したものに cotton-pickin' という形容詞がある。何か田舎くさい、あかぬけしないといった意味で、My cotton-pickin' friend とか This cotton-pickin' car doesn't start. といった文になって出てくるが、この cotton-pickin' の cotton-pickin' は人間にあてはめれば country hick, from out in the sticks といった意味になっているわけである。

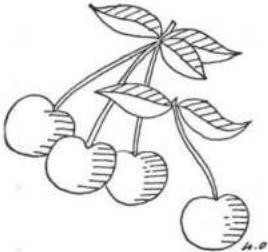
同じように古くさいといった意味で、none of that greasy kid stuff for me, please. といういいまわしがあり、これは今でもよくきくことがあるが、Vitalis の宣伝で用いられたもので、that greasy kid stuff という言いまわしが、「もう古くなってしまった、流行おくれのもの」という意味でいろいろのものに使われている。

同じ hair cream の ad. で、a Brylcreem の ad. の一部で A little dab'll do you というのがある。一寸つけるだけでよいという事で、食事の時に肉にソースをかける時等に用いられる idiom になっている。

チューインガムの宣伝だったか、I'm not talking while the flavor lasts. というのがあったが、音楽会か、観劇に行って、いつまでも、その雰囲気にひたってみたいというような時に用いる事があるが、これは、よく注意して使わないと、相手の人に「だまっていろ」ということを暗にはのめかすことになって、失礼な言い方になりかねない。このへんの判断が相手が外国語であるだけに非常にむずかしくなる。

以上、いろいろの例をあげたのは、自分が Living Context の中で生活している時には、あまり抵抗もなく、むしろあまり意識もしないで、みたりきいたりしていた事が、たとえ、古くなったり、使われなくなったりしても、外国の雑誌などをよんでいる時に、又、記憶に register する事があるという例の一部で、特に commercial のものをあげたのは、あまり注意しなかった事でも、後になって、何度もくりかえし、きいたり、みたりしていた事が14才をすぎた我々もある程度無意識にきいたことや見たことでも、ある程度は、おもい出す事があるという例にすぎない。

(p. 15 へつづく)



私の英語歴

NARITA SHIGEHISA
成田 成寿

私は新潟県の新潟市から小1時間のいなかにある山ふところの小学校、中学校を出たので、そこは英語には全然関係のないところです。外人の顔を見たこともほとんどなかった。そんなところで英語をやり出したというのは、自分でも妙な気がするんです。中学の間に1ペんだけイギリス人かの宣教師がまわってきて英語の演説を本人自身の通訳つきで全校生徒にやったのを聴いたのが外人を見た初めてだったのです。

そのころはラジオもなく、テープレコーダーもなく、英語のレコードもなかったでしょう。英語は、中学の1年のときからありますから、普通に数学、国語と同じように勉強したということになると思います。ただ入学のとき本屋が割引するというので、斎藤秀三郎中辞典1冊だけ入学と同時に買いました。コンサイスは、まだ出していなかったころです。

英語をどうして勉強するようになったかというのは、別に特に意味はないのですけれども、ただ英語にわりあい興味は持っていたでしょう。しかし興味を持っていたのはたくさんほかにもありますて、たとえば国語は好きだったし、漢文は先生がよかったためか漢文も非常に好きで、いまでも好きです。数学もありあい得意だった。初めのころの英語の先生はそんなにいい先生だったとは私は今も思っていないのです。というのは、正規の英語教師の教育を受けていらっしゃる方は少なかったんじゃないかなと思っております。たとえば1年のときは、旧制の高等学校を終えられただけの先生に英語の手ほどきを受けております。その先生はずいぶん発音がよかったです。それからあとは、高等工業を出た先生に英語を習ったり、高等師範の国語を出た人に英語を習ったりもしました。そのころ英語教師が不足していたという話もありますけれども、正規の英語教師の教育をお受けになった方たちに習ったのは中学の2、3年くらいからなので、特に英語が好きになる要因もないでした。ただいなかはいなかなりに英語の雑誌なんかがきていました。それで中学の2年のときに研究社から出ている『初等英語』といって、ちょうど中学2年生程度の雑誌がありました。それを見て私は自分で勉強

しました。それは1年間ずっと読みました。それに投書したりもしたことがありまして、そんなことで少し英語に対する比重が大きくなつたかなと思ってますけれども、それも2年だけのことでした。あと4、5年になりますと、私なりに、南日とか小野というような受験参考書を読み書きしたが、それは誰もそうでしたでしょう。そのころ『英学生の友』という雑誌がありまして、それも表紙がきれいでしたし、それをとって自分で勉強し、投書をしました。だから自分で雑誌を読み、投書をしたことが英語の勉強に役立ったのではないか。ただし発音もでたらめだったようだし、そういう指導はあまり受けた覚えがないのです。結局読本や英作文は学校で習っただろうけれども、先生の家へ習いにいったこともありますし、雑誌で勉強して自分なりのある程度力をつけていたんじゃなかったかと思っております。読本の神田『クラウン』は3年あたりからで、1年、2年は武信由太郎先生のリーダーでした。英作文の教科書は3年くらいから村井・メドレーのです。むずかしくてぼくらには手がつかなかったように思います。文法の本もありましたが、著者も内容も忘れてしました。でも、ほんとうにいなかで、何にも外界と接触がないわけですから、そういう英語雑誌があって、ちょっと外界を見る目が1つあったのでしょう。それから中学校の図書室に、そのころ訳注書が少しきておりまして、中学3年のときに岡倉先生のお訳しになった、Conrad の『アハハのアンナ』(研究社)という訳注書を読みました。どうも訳ばかり見て英語をあまり読んだ覚えはないわけです。また学校の購売部にあったエヴリマン双書の Gulliver's Travels, Robinson Crusoe を買って、すこしのぞきました。だから少し英語を勉強しようという気はあったのですね。しかし特に英語がほかの学科よりもばかに得意であったという気はしないのです。高等師範の受験に来て、帰りに、三省堂で原書の Dr. Jekyll and Mr. Hyde, Anna Karenina というのを、どちらも表紙がきれいでしたので買って帰りました。入学の通知が来て4月上京するまで、こたつでそれを読んでいました。

大正14年に私は東京高等師範に入ったのですが、篠田

錦策先生が私ども新入生の担任におなりになり、私は教わることになったのです。先生は英作文と文法を教えてくださいました。あと、私どもの1年に入ったときは岡倉先生がちょうどおやめになつたときで、岡倉先生はそれから1年間講師で来てらっしゃるだけなので、私どもお習いしなかつたわけです。ただ廊下を先生がお歩きになつてゐる姿を見た程度であります。しかし、石川林四郎先生、福原麟太郎先生、神保格先生、こういう方々が新入生の日本人の先生で、外人はバードという人とブレディという人と2人で、全体で1週に15, 6時間か17, 8時間英語があつたと思います。外人教師なんかは、そのころまだのんきな時代ですから、あまり出席しませんでした。私もなまけるわけではなかつたけれども、めんどくさいし、よくわからなかつたから出なかつたんだだと思います。わりあいにみんながサボつてばかりいたようです。だから、外人の教師からはあまり効果が上がらなかつたような気がしております。会話もろくに私はできませんでした。会話というよりも、それらの外人の先生は本を読むことで、何か教科書をお使いになつたようですが、教科書もよく覚えてない。外人の先生は2年くらいからプランチという、非常に厳しく教える先生が来て、それからくらか訓練を受けたようです。1年のときはだからのんきに過ごしてしまつたという感じです。ただ同級の諸君は英会話もよくでき、発音もよく、びっくりしました。私は先生たちに英語の発音を直されたり、叱られたりばかりしていました。今のようにラジオやテレビでいなかでも英語に接しているという時代ではなかつたのです。神保格先生から音声学を習いましたが先生は発音訓練はほとんどしてくださいませんでした。

そのころは時代的に申しますと、東大に Blunden が来ております。この Blunden は、高等師範2年か3年のころに講演に来て話を聞きました。これはちっともわからなかつた。それから Palmer がやはりちょうど来ていました。Palmer は高等師範学校の嘱託ということになつていて、文部省と高等師範学校の兼任といつたか。ときどき講演に来て、何か “anomalous finites” とかいう講演を聞いたりしましたが、どうも私には何を言ったかよくわからない。やはりちょっと外人に接することが遅かったからわからなかつたように思います。そのころのバードなんかは会話の練習をするわけではなし、本をみんなに読ませるだけで、questions and answers なんてものはだれもやってくれなかつた。日本人も外国人も、もっぱら解釈です。石川林四郎先生が主任ですけれども、これは、England as It Is という東京外



国語学校の Medley 先生の一種の風物誌的な本をお使いになつた。これも解釈でした。福原先生は高等師範では非常に珍しい先生で、文学的でもあり、たいへん学生にも人気があつたし、一番そのころお若い方で、唯一の助教授でいらしたのですが、『英語研究』とか『英語青年』とか、あるいは研究社の英文学叢書が出始めておりますから、そういうところにたくさんお書きになっていました。みんなが非常に崇拜した先生でしたが、この福原先生は初めはギリシャ神話的なものをおやりになるというので、Kingsley の『ヒヤローズ』というのをお読みになりました。しかし計画的にそういうふうにギリシャ神話を教えようというお考えのようでした。2年になると、Keats の詩をおやりになりましたし、またラフカディオ・ハーンの Wordsworth や Keats 論とか、そういうものもおやりになりました。非常に文学的でいらっしゃいましたけれども、いま申しましたように解釈だけで、会話とか、questions and answers なんかはどなたもおやりにならなかつた。それから篠田先生はもっぱら文法、作文をおやりになつたので、文法の方の Onions の An Advanced English Syntax というのを初めお使いになつたわけです。これまたなかなか英語がむずかしくて工合いが悪いので、2学期だか1年の終わりくらいに、今度は青木先生の1冊になつた文法書をひとまずやってしまつてということになりました。Onions で始まったけれども、これは中途までで、今度は日本の簡単な文法書をおやりになつたと思います。英作文は1週1回黒板に出題なさって、それをその時間に書いて出し、次の時間に返えしてくださいり、模範答案を板書なさいました。私

はいつも、BかCばかりでAはもらったおぼえがありませんでした。そんなことで全体としては、実際の生きた英語なんて話はそのころはあまりない時代です。東京にもいろんな外人もいたと思うと思いますけれども、高等師範時代にはあまりそういう気もなくて、ただのんきに、やらされることをやってたみたいじゃないかと思っております。ただ私のように、何も知らないで東京に勉強に来たという人もすくなかったようです。

私が英語で話すことに関心をもつようになったのは戦後のことです。ほんとうは、戦前には英語の会話なんてやれたものではないです。それから英語でしゃべることは、あまり、はやりませんでした。高等師範学校では英語劇を2年くらいからクラス単位でやって、それはいま共立とかどっかでやるように公開したのです。それで英語のできる同期生、篠崎光太郎とか大内脩二郎とかは劇をやるし、中山常雄なんていうのはどこかのスピーチ・コンテストに出かけました。井上正平なんかも英語もいいし、劇でもなんでもできる男でした。私は一度も、そういうところへ出ろと言われないです。そのころNHKができたばかりでラジオ放送の英語講座には高等師範の先生はよくやっておりました。英語劇にも私の同級生たちは放送に出ましたが、私はそういうところへちゃんと出られませんでした。いつも芝居といえば道具方をやらされていたし、裏方ばかりやるわけです。それから、「ちょっと時間が遅れるから」というようなことを英語で幕間に放送するのは私ではなくて篠崎がやってくれたりして、どうも私は発音が悪いことで有名だったわけです。しかし、その発音が悪いと気がついても直しかたがわかりませんでした。というのは、先生方はわりあいに音読をよくして下さったし、私の読みをお直しになるだけれども、こっちはそれほどの意識がないものだから、どうも直らない。それになまりがあるものだからうまくない。当ったとき、福原先生からも石川先生からも何度も何度も同じところを読み直せと言われたことがありますけれども、読み直してもちっともよくならない。どこが悪いかよくわからないのです。先生方がもっと教えてくれればよいのにと、うらめしくすら思いました。自分のどこが悪いかということをよく思い知られたのは卒業まじかの教育実習のときです。教育実習は必ずやらされましたので、4年の3学期で、付属中学校にいわゆる教生に行きました。これはこてんぱんにやらされました。発音が悪い、教授法以前に発音がなってないというので、最もぼくを強烈にやっつけたのが、黒田巍先生でした。黒田先生は、そのとき中学の先生だったのです。われわれの指導教官あとで文理科大学で同級に

なりました。その教生では非常にやられて、「どれといって1つもよくない」といわれました。亡くなられた寺西武夫先生はやさしくて何もおしゃらなかったのですが、黒田先生は痛烈がありました。そこで私は岡倉由三郎先生の『英語小発音学』というの自分で買い込んで、とにかく教生だけでも通らなきゃだめだと思って、その本を読んで発音練習をしたのですが、しかし1人ですし、テープがあるわけなし、また、あとでは黒田先生のように注意してくださるかたもいませんから、けっきょくうまくならずじまいのようあります。ちょうど文理科大学ができましたので、大学へ行って少し勉強しようかと思って入ったのです。今度は大学ではなお発音練習なんかありません。ただ『英語小発音学』で、それまで/l/と/r/の区別なんか知らなかつたのが、どうも違うらしいと知りました。学校では中学以来先生はだれも区別を教えてくれませんでした。悪い悪いとはおしゃるけれども、どう悪いとか、どうしろなんてことは教わった覚えはないのです。

文理科大学に入って読書会なんかあったりするときに、みんなの前だから/l/の発音を意識して発音したりすることを覚えてます。そうすると文理科大学の同級生で後に昭和女子大の先生の筒井東衛氏という人が「成田君は/l/のとき特別な発音をするようだが」なんて言って私をからかってました。どうもうまくいかなかつたらしいのです。とにかくそのころから発音を少し意識したのですが、別にどうということではなくおかげさまで卒業できました。だから会話というようなものは、学校ではほとんどやってないです。ただ文理科大学で初めLyellという人で、2年目にPeter Quennell、3年目にW. Empsonが来まして、それらの人たちが英文学史などの講義をするのをわれわれ書き取ったのです。それからテキストを読んだりする。しかし私の発音もどうやら彼らはわかってくれたし特に会話を勉強するなどという意識はありませんでした。卒業して助手にしていただきましたが、学校の教師でEmpsonがいたり、Hornby、A.F. Thomasなんかも高等師範で教えているし、英語の教官室でそういう人がいたものだから、いろいろの話をする機会があって、次第にすこしそそちはなれていったんだろうと思います。しかし自分の発音なり会話なりをどうしてよくしようかということは意識もせず考えてみなかったのです。戦争の始まるまで、英人教師にはしゃっちゅうだれかがいたのですけれどもそれ以上特に外人と接触する機会はありませんでした。そのころ英語の教師が一般に外人教師や外人と交際するということはなかったように思います。戦争が始まるちょっと前に

Pikering という人が教えていて、その Pickering がイギリス大使のお嬢さんを私のうちへつれてきて、うちでごちそうさせられたりしてこれが外人と接触した唯一の機会でありました。戦争中は英語を使う機会は全然ありませんでした。英語の会話をしなきゃならないし、努めて自分でも練習しようと思うようになったのは戦後になってからです。

戦後になると急に進駐軍の将校が学校へ来たりしました。私はあまり応待できないので、ほかの人にしてもらったりしているのですけれども、何か工合いが悪くなってきてどうしても練習をしなくてはならないようになります。外人教師と交渉しなければならないようなこともあります。少し自分でも努めてそういう人と話をするようになりました。それよりも一番練習ができましたのは、イギリスへいって帰ってからです。昭和30年前後に私はイギリスにやってもらいました。それまで全然会話に自信がないのです。ところが船で行って、船にイギリス人もいましたし、途中の寄港地でちょっと話をしてみると、どこでもよく通ずるものだから、じょうずへたは別としてもよく通ずるわいと思って、イギリスへ行きました。ロンドン大学の講義もときどき聞きに行きましたし、George Fraser のところで詩人の会があった。その2週間に1回くらいの会に行って詩人の仲間に入りました。Fraser の紹介で Herbert Read の現代文芸研究所の会員になって、月に2度くらいいろいろの講演を聴きました。F.R. Leavis だの Herbert Read や John Wain などが講義をするのを聞いて自然になれていました。Empson のうちはなんにも出入りしました。特に英語の練習をしたわけではありませんが、わりあいに練習になったのは、下宿で、私が唯一の日本人で、あとイギリス人ばかりだったものだから、そこに1年いて、その連中と非常に親しくなりました。その親類の子どもが遊びにきたり、バースデイ・パーティーなんかがあるとそこによばれる。一緒に遊戯をしたりゲームをしたりするくらいに親しくなって、その普通の家庭的な生活で英語を習った。それからテニス・クラブに入っていて、そこで外人とテニスをして、テニスの英語とか、テニス・クラブのパーティーとか、そこでもって向こうの連中に融け合い、これで普通の英語をおぼえました。英語は一応こわくなってしまったのですが、それを仕上げたというのは帰国してからです。英語の勉強をやりなおしたことになりますが、ブリティッシュ・カウンシルにマッカルパインという人がいました。その人はちょうど私の出かけるころに来た人なのですが、帰ってきて、その人の家で2週間に1ペんずつ文学のディスカッション

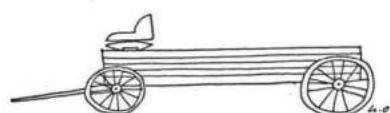
の会を開くようになったのです。そこでビールをごちそうになりながら、文学ばかりでなくて、よもやまの話をしました。そこに数人の人が集まってきた、私なんか始めた方だから休めないし、2週間に1ペんのほかに、今度は Tokyo Amateur Dramatic Club とか、いろんなところに彼が引っぱり出してくれたり、ブリティッシュ・カウンシルのパーティーなどにしおっちゅう出るようになりました。そのころからもと海軍の友人であった白石孝繁氏に日英協会に入れてもらったりもしました。そういうところで英語を余儀なく話さなくてはならないようになります。何でも言うことをこわくなかったのはマッカルパインのうちのディスカッション・クラブのおかげだったと思うのです。これがたいへん役に立った。イギリスで、人のあまり接しないような詩人の会、文学研究クラブ、テニスクラブ、家庭で子どもとか老人とか、そういった連中とも親しくなった。そういうところを経てマッカルパインのところが仕上げになったのではないかと思っています。もっともそれは一つには自分の不十分さがわかるようになりました。それで、アメリカへいったりしても、帰ってから、これではいけない、もっとやらなければと、外国へ出るたびに帰ってから一生懸命になるのです。

(共立女子大学教授)

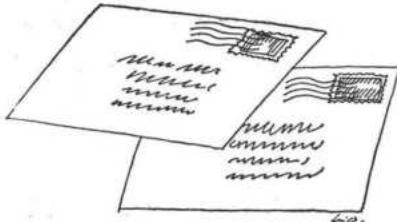
(p. 11 よりつづき)

要するに、語学は、ある程度、くりかえし、くりかえし、よんだり、使ったりして biological なハンディキャップと闘って行くことの連続で、Living Context との直接の接触をなるべく多くもつことの重要さと、そのような接触をはなれても、何年かに1度位は、自分の目で物をみたり、自分の耳できいたりすることが、いかに大切であるかという事を示す一例にすぎない。特に我々14才を二度とみない外国語の教師には、このような機会が、なるべく多くあることを切に希望するものである。我々の使っている言葉が彼らには、もう unfamiliar な cliché であるとかいう問題は別である。

(慶應義塾大学教授)



国際化時代の語学教育



小川 芳男 東京外国语大学名誉教授

前田 陽一 国際文化会館専務理事

(司会) 金山 宣夫 日本総合研究所国際部長

外国語教育の特質

金山 国際化時代と一口に申しますが、いろいろな考え方があると思うのです。一つの考え方というのは、国際化時代というのは、いわゆる国と国との間の関係ということだけではなくて、国を隔てて行なわれる個人と個人との関係、たとえば昨年度の日本人の外国旅行者の数は、すでに120万に達しているわけですし、企業活動も国境を越えて多岐にわたっております。そのような状況においては民際、すなわち個人が直接的に国際関係に身をゆだねるというふうな場面が非常に多く出てくるのではないかと思います。そして国際感覚などということが言われますが、そういったようなものも、一人の個人として問われるということを意味しているのではないかと思うわけです。このようなことを考えますと、従来議論されてきた、いわゆる教養英語か、受験英語か、といったような命題であるとか、あるいは知的訓練のための語学か、実用のための語学かといったようなこともあまり意味がなくなる。あるいは意味がなくならずとも、もう少し大きな、ワクの広い問題が考えられるのではないかと思うわけで、そんなようなことについてお話しをしていただきたいと思います。

小川 私はいま日本国際教育協会というところに引っぱり出されているのですが、言うことはひとつなんです。外語時代もそうなんですが、個人が非常に大事だということなんです。だから外国人に接する人は、自分が国を代表していると思って接しなければ困ります。例えば外国人が日本に来た場合に、そんなにたくさんの人々に会うわけではなくても、1億の民の中の1人か2人に親切にされたりすると、日本人というのは親切だというのです。非常に苦い経験すると、「日本人というのはい

やらしい」ということを言うだろうと思います。だから外国人に接する場合は日本を代表するような態度で接しなければいけないということをいいます。

金山 前田先生いかがですか。語学教育における個人の扱い方、あるいはいま申し上げたように国際化時代が進行しているということなんですが、そういう個人の位置づけというのは西欧と日本では違うということもあるかと思いますけれども。

前田 私もついこの間まで20何年語学教師をしてきたのですけれども、その間通じて感じたのは、語学教育というのは、たとえば経済界とか技術界なんかに比べて非常に鈍重なんです。ことばを覚えるのは時間がかかるでしょう。それから、一ぺん覚えたことばは忘れられないし、年をとってから別のことばはなかなか覚えにくいというようなこと、それから語学教育には先生が必要だとか、いろいろなことからテンポがほかのものに比べておそいのです。要するに世代ごとでなければ変わらない。

戦後20数年に経済界、技術界は非常に進んで、日本が戦後のああいう荒廃状態から見違えるようになったわけですが、語学のほうは非常におそい。そのため大きなずれがいま起こっているわけです。明治以来の日本の語学教育というのは先進国に追いつくためのもので、向こうの文献を読む教育を中心だったわけです。戦争が終わるまで、それからその後も惰性で外国語を読んでそれを和訳していくという作業が中心で、大勢の翻訳者ができて外国のことを国民に知らせていくということがあったわけです。

ところが日本がだんだん貿易によって生きるようになっていないということで国際貿易がどんどん盛んになって人の行き来が多くなり、急に今度は個人の接触が始まったわけです。ですから今度は接触のための語学教育も必要になったのにかかわらず、切りかえがほかの分野に比

べきわめておそい。それから、かりにいいアイデアがあつて切りかえたほうがいいと思ってそれを教える先生がいないとか、教材がないとかいうことでどんどんおくれている。それが現在の状態だと思います。しかしそのおそいのにも語学教育というものの特質があるわけですから、一概に語学教育者を責めるのはあたらないと思いますが、これにはもっと社会がそのことを考えて、語学教育界というものを切りかえさせるためにもっともっと多くの財力もエネルギーもはらわなければいけないということを認めていただきたい。経済界や何かと同じだと思って、ただ語学の先生がボヤボヤしているのだというだけではいけないと思います。

金山 そうですね。たしかに語学の先生だけがボヤボヤしているのではなくて、日本の国際的な位置づけそのものの反映であるというふうにも考えられると思いますね。しかしながら、学校教育の中、つまり教室の中でも問題がなきにしもあらずということはいえるのではないか。たとえば、何か日本の教育というと、とかく上から知識を詰め込んでいくというような体制がとられる。それからまた、大学へ入ると、Shakespeareとか何とかむずかしいことを、たとえば工学部の学生を相手にしてやるというような語学教育が行なわれているわけです。こんなようなことは、前田先生のおっしゃったことばでいうと、「ずれ」のあらわれかもしれません、これは小川先生、教室の中である程度解決するということはできませんか。

小川 語学というと学問という印象を与えて非常に抽象的なことをやるような感じがするから語術なんだよ。語術というのはことばの skill ですね。大学の教養過程までは語術じゃないかと思うのです。そしてその語術を中心としていろいろ自分の専門のことを身につけていけばいいのではないかと思うのです。

金山 そうすると、語術としてことばを communication の手段として考えるわけですね。

小川 まず修得する。それが everything ではありません。それを基礎として、英文学をやる人、工学をやる人、医学をやる人などいろいろな方面に伸びていくのではないかと思います。

金山 これは主観的な言い方であって、必ずしも科学的な調査をした結果ではありませんが、近ごろの学生というのは受験英語をやって大学に入ってきたころが一番語学力が高くて、大学を卒業するときが一番低い、そういうふうな現象がみられるのではないかと思うのです。そんなことでは、いま小川先生おっしゃられたように、語学を語術として、手段として考える。そして専門教育

への準備を語学を通して行なうとか、あるいは外国文化の理解を語学を通じて行なうのだと、国際交流の手段として自分の身につけるのだと、というようなことは、いわゆるお題目にしかすぎないような気もするのです。

その点は高校時代より大学卒業するとき

小川芳男

の語学力を高からしめるために何かもう少し必要なのではないかという問題があると思うのですが、いかがですか。

小川 語学教育というのは、簡単にはいかないけれども、受験英語とか教養英語とか実用英語というものは私はおかしいと思います。英語そのものがあって、それを受験のために役立てるか、あるいは自分の事業のために役立てるか、あるいは外国の書物、学者の場合には文献を読むことが中心になるということであって、英語そのものに変わりがあるわけではない。英語の基礎をしっかりと教えれば、その者がどの方面に進もうとも役立つのではないかと私は思いますけれどもね。

金山 いま基礎が大事だとおっしゃいましたけれども、前田先生が先ほどおっしゃったように、日本の語学教育というのはどうしても読み中心であるということです。読み以外のものの基礎というものはどのような対処のしかたが考えられますか。先ほどのお話ではあまり年とってからはだめだということでしたが、それ以外にどういうことに気をつけなければならないでしょうか。

前田 もしみんなが英語をしゃべれるようにならなければいけないとしたら、なるべく早くから、フィリピンとか東南アジアのいろいろな国のように子供のときから教えればいい。ところが問題は、日本人が全部英語をしゃべる必要があるかということなんですが、特殊な職業以外のものは日本語だけで新知識も吸収できるわけで、たとえばインドのようにあれだけりっぱな国でも新知識は英語を通じてでなければ吸収できない。一握りの英語ができる人だけしか社会進歩の原動力になれないわけです。だから日本語で何でもやっていることが強味なので、多くの日本人が非常な努力をしてこれくらいにしかならないのだったら、それをみんなに要求するのはエネルギーのたいへんなロスだ。そこに問題があると思ひ





前田陽一

ます。

金山 たしかにありますね。それに前田先生の場合は努力されただけではなくて、中学1年のときにはすでにジュネーブへいらっしゃるとか、そういう非常に恵まれた環境におありになったわけで、日本人全部がそういう

前田陽一 うような環境に必ずしもないわけです。ところがヨーロッパ人なんかは multilingual というような状況に小さいころから置かれている。ただいま前田先生のお話をうかがっていて1つ気がついたことがあります。これは私アメリカの大学にいるとき実際目撃したことでもあるのですが、生徒に discussion をやらせて、とにかく質問を出したらエンマ帳に書くわけです。しゃべることによって自己表現を行なうということが点数になるわけです。

ところが日本の文化的風土というものはむしろ逆ですね。しゃべっちゃだめなんです。ほんとうにいいことなんていうのはしゃべらないでわかるようなものだというふうな、そういうことが実は教育にもあるわけとして、たとえばアメリカの小学校の curriculum には public speaking なんていうのがあるのです。ところが日本の小学校では作文程度のものはありますが、話すという訓練を系統的にするようなものは寡聞にして知りません。せいぜいホームルームみたいなものがあるというふうのことなんですね。そうすると、早い話が、英語でできないということではなくて、日本語でできないのではないかということがあるのですね。この点についてはいかがですか。

前田 これは問題がもう少し複雑で日本語でできないのは西洋人のような discussion のしかたができないということなんです。ところが日本人の社会は discussion のしかたが初めから西洋人と違うのです。日本では相手によって言い方に制約がある。日本人同士はお互いにそれを小さいときから知っていますからそれを勘定に入れる。たとえば地位の高い人は地位の下の者が no と言わなくても yes ということの言い方によって no だということはちゃんとわかるようにお互いに訓練できているわけです。それから日本語の構造ですが、日本語の論理というのは二分法みたいなもので関係代名詞がなくて、

補足文がない。だから何か言い出したらすぐそれを yes か no にしてしまわなければならないという簡単な論理的関係のことしか言えない。ところがいま一番世界で流通している西欧語はギリシャ語と似ている。非常に複雑な論理、1つのことを言ってもそれにいろいろ修正を加えて精密に直しておいてから、それに対して最後に断定するとかしないとか。

実はいままでそういうのが絶対で、日本語は劣っているということが言られてきました。少なくともいままでのところは西欧式のああいう複雑な組み立てられる構造的なことばでない。したがって西欧人の場合には、それをフルに利用して、できるだけ物事を精密に、それから何でもはっきり伝えることができます。

私もさっきの話にありましたように、中学のときにイギリス人やフランス人の学校に行ってそういう訓練受けた、ははあと悟ったのですが、日本の場合はいまも言ったように、日本の従来の社会組織、言語構造、それからもう一つは、同質民族、同一言語で、大部分は日本人だけで、日本中どこへいってもあまり変わった人はいない。そういう国民なので日本人同士が話すときにはお互いに察することを前提として終わりまで全部言うということははしたない。あるところまで言って向こうに察しさせる。それが日本人の discussion のしかたなんです。ですから学校で教えてないというのは西欧の話しかたを教えてないのですね。ですから日本人の場合はけっこうそれで社会は成り立っている。

ソニーの盛田さんが新聞に書いていました。あの人がアメリカに行って向こうのソニーの傍系会社つくって驚いた。向こうでは何でも社長が訓示して、規則こしらえてこれをやれといってやらなければやってくれない。あとになっておこっても、「言わなかったじゃないか」と言われる。そういうふうに西洋人の discussion のやり方とわれわれの社会のやり方が違うので、それが外国語教育に出てくるわけなんで、そこもまた語学の教師だけを責められても困まるところです。

金山 社会の違いというものをいまいみじくも Sony Corporation of America の例を引かれておっしゃったように、国際化時代というのは、ただ旅行がふえるとか何とかということだけではなくて、たとえば企業活動という場において異文化、異社会というものの突き合わせが出てくると思うのです。そこで小川先生、そんなような突き合わせに対する準備といつてもいいと思いますが、語学教育の中で特にどのように対処されるべきか、大げな言い方になりましたけれども。

小川 いま前田先生がおっしゃったけれども、私は

2000年といわないので徳川300年の功罪の罪のほうだと思いますが、外人に接するしかたを知らない。「目は口ほどにものを言い」というのは言わなくてもいいわけです。ですから日本のことばは continuity はあるのですが logical development というのではない。Logically に development したものの話し方はできない。そういうものを教師が一応心得ているということが非常に大事ではないか。英語を教える中に自然にそういうものがしみ込むような教え方が非常に必要ではないかと思うのです。

金山 たしかに2000年にしろ300年にしろ、日本の文化の伝統というものが培われてきて、われわれは好むと好まざるとその文化の中にあるわけです。先ほどおっしゃったように、それを功罪の罪とみるという見方は私も賛成ですが又、功のほうもあったわけですね。いまや国際化時代というものはそういった功罪、つまり自分の持てるものと持たないものというふうに言いかえてもいいと思いますが、それが比較的はっきり出てくる時代ではないかと考えるわけです。

そういうものが出てくる前というのは日本は非常にうまくきたのではないか。それこそ言語戦争もないし、こういう高度経済成長国家を築き上げてきたのも、企業の中をとってみても、企業の外をとってみても非常に communication がうまくいったからだと思います。目だけで communication が行なわれる。ところがいまやそうじゃない。そうすると、こういうことがはっきりしてきた時代に対して、われわれの持てるものと持てないものをいかに配分し、あるいはいかに調整してあたるべきであるか。学校教育というのはおそらくそういうことをやるためにあるのではないかと思うのですが、一体どういうふうなものをどのような方向でやればいいのでしょうか。

小川 それは非常にむずかしい。いまの話のように、持てるものと持たないものということを対比して考えれば、持てるものはあまり充実する必要がない。自分の欠点があるとすれば、それを少しでも直していくとか、あるいはそういうものを補っていこうということのほうがわれわれの使命だと思うのです。そこでちょっと飛躍するかもしれないけれども、英語というのは世界語のようになってしまったんだ。そこで問題は、日本における英語というのは英語の日本的な方言だと思うのです。つまり英語というものがあって、その土地、土地によってどうしても方言はありますね。そういうことを恥ずかしがる必要はないのです。なにも perfect な、英米人と同じように英語を話さなければ恥ずかしいという時代は過

ぎ去っていると思うのです。しかし、この時代において、実際に外国人と接する場合には彼らの思考の形式に従ってものを言わなければならない。/I/ だとか /x/ といって舌をかんでも意味がない、非常に trivial な問題だと思うのです。



金山 宣夫

文化の相違と言語

金山 前田先生、いま文化的な違いみたいなものが問題になってきているのですけれどもさっき小川先生がいみじくも提起されたように、たとえば論理性が日本人には欠けるみたいな言い方はできると思うのですが、これはまた社会の成り立ちの問題みたいなものまで考えなければならない。何かというと、たとえば論理で通ずる社会と、権威というか、論理でないものによって通ずる社会の違いの一つは、個人主義か、個人主義でないかみたいなものがあるのではないかと思います。たとえば日本は1民族、1国家、1言語という非常に特異な、均質的な風土的な条件であるというご指摘があるわけですから、そういう社会には、たとえば社会契約説なんていふものがなかったのではないか。それから個人主義というようなものの伝統がなく、それが本の上だけで入ってくるときには利己主義みたいなもので入ってくる。そういう社会では論理というものの果たす役割が非常に少ない、2次的なものではないか、そういう問題意識が一つはあると思いますが、その点はいかがでしょう。

前田 論理ということは computer のようにプラス・マイナスでも論理、むしろそれだけ精密な論理ができるわけですから論理というのがあるないという言い方は不適当で、論理が違うんだと、あるいは逆に、論理と直感との組み合わせ方が違うんだということだと思います。ただ個人主義の問題については、私は自分の専門が宗教とか哲学なのでそちらのほうに引っ張ってものを言いますと、いま世界で一番通用している国際語というのはみんなインド・ヨーロピアン語ですね。英、仏、スペイン、ロシア語とか、これはみんなユダヤ教、キリスト教の系統なんです。これの根本の思想というのは、われわれ人間に非常に似た性質を持つ人格神が宇宙の根源にあ

ってその人格神が無から有をつくり、光ができて宇宙が飛び出してきて、最後に人間が一番近いものとして出てきた。人間は地上を支配しろと神から命を受けたというような、宇宙の根源が人間と同質的なものであるというわけです。ところがわれわれの場合は神も仏も宇宙の中にあるわけですね。そういう人格的な根源というようなものはない。西洋人の場合には、自分の心の奥底と、自分の一一番高いところが一致すると考える。したがって個人主義というのもそういう自分の奥へ入っていく。自分の中に入つていけば一番宇宙の根源につながるのだと。それが人間のあるべき姿。したがって、事が起これば、一応誠実な人はその関係をまず先にして、自分の根源が何を考えているかということを考えて、それをもとにして対応する。ところがわれわれのほうはそういうのではないですから、宇宙全体がぼうぼくとしていて、全体がありがたいものなんです。わからないものだ。ですから何か起こったら自分の中に入るなんてとんでもないことで、その点では謙遜している。自分の中にいいものがあるんじゃない。外を見るわけです。情勢が変わったら外を一生懸命見て、まわりの人みんながやることを見て、じゃあ自分もあの全体の中の一員としてこうしましようということになる。だからものの考え方、判断のしかた、全部違うのです。ですから簡単にどっちがいいか言えない。ヨーロッパだってキリスト教の前のヘレニズム時代には、全体の中の一つというような思想があったのです。トインピーなんかは将来そういう両方のものが歩み寄らなければいけないということを言っている。だから簡単に日本には個人主義はないとか、論理はないといって、国際社会に生きるために向こうのことを学ばなければならぬというのは、もちろん学ぶことは絶対に必要ですけれども、しかし大事なことは、こっちがだめだから向こうを学ぶというのではなくて、違いを理解して、そしてなぜこう違うかといって両方理解して、違ったものとわかり合う努力、それが外国語教育の中になければならない。

金山 小川先生はよく、語学教育というのは発想の方法の違いを考えなければ意味がないのだということをおっしゃっているわけですが、いま前田先生がおっしゃったように、発想というのは人間の一番根源的なものとももちろん関係があるわけでたいへんだなと思うのですが。

小川 同じようなことなんです。前田先生はそういうことをおっしゃったと思いますけれども、日本人というのはことばでいえば違ったことを非常に単純に上に「間」をつけて、「間違い」だと思うんですね。そういうことは少なくとも外国語をやりたり外国文化に接して

いる人の考え方ではないと思うのです。違いは違い、どちらがいい悪いということは別問題です。

ただ、われわれ外国语教育に携わっているものとして、外国人に接するときは、外国人はこういうものの考え方をするのだと、だから彼らを理解するためにはそういうことでアプローチしなければ、けしからん、あいつらはおれの気持ちわからないというのでは外国语やっているものとしては態度がよくないと思います。

金山 それは非常によくわかりますが、とかく日本の学校では詰め込み教育が行なわれます。そういう形の教育を受けたものが、いまおっしゃった違いというものに果たしてうまく対処できるかどうか非常に疑問に思うのです。

小川 だから対処するようにしなければいけないと思うのです。教育者というのは本質的に非常に保守的で、極端に言えば退廻的なのです。

前田 特に語学は性質上時間がかかるのです。

小川 だけどそれを赤軍派みたいにあまり性急にしないで、忍耐強く一步でもそういうふうにする。教育者というのは忍耐力がなければダメです。

前田 それは施設と金と、いろいろなものさえくれればいくらでもできるんですよ。戦後の学制改革を利用して駒場の一高の残党が企画して教養学科をつくった。あのときぼくは外国から帰ってきて、日本人が外国人との違いを自覚したうえで向こうの人とやりとりできる人を養成しなければならない。それには大学時代からぜいたくな教育をしなければいけないというので、始めたときには54人、いまでも70人しかとらないのです。それを9つに分けて、ひとクラス10人以下で、先生の数がずっと多い。1週間に外国人の授業だけでも8コマぐらいある。それだけぜいたくにすると、半分ぐらいは大学出たときには外国へ行っていくらでも向こうの学校でやりとりできるし、勉強もできる。金と手間をかけねばできるのです。だからだんだんそういうことをふやしていくはもっと合理的に、比較的少ない手間とお金ができるので、決して悲観的ではない。

金山 そうすると方法論はあるということですね。

前田 そうです。実績もあると思うのです。

金山 日本における語学教育というのはさっき申しました詰め込みというか、Shakespeare をやると申しましたが、あの必然性があるようになります。というのは語学教師というのは、ここにいらっしゃるおふた方は別ですがあまり語学ができないんですね。そういうふうなことがありとすれば、ますます先生が先生たる権威を發揮するためには、Shakespeare の shall と will の数を

数えたりする以外になくなっちゃうのですね。そういう点で非常に問題がありますね。

小川 ただ私は、文学に偏するということに対しては同情するのです。ことばを教えるには文学的なものが一番いいのです。けれどもそれのみ、ことに Milton とか Chaucer とか Shakespeare は英文科の人はけっこうだけれども、それ以外はいらない。ただ、文学というのはことばの華なんだな。つい文学的な材料がことばを教える教材として多く選ばれるということは私は理解しているのですがね。

前田 いま私、2つのことについて申し上げたいのですが、ひとつは、外国語の先生がむずかしいことばかりやって話せないというのは私が外国語の教師になった20年前には大体ほんとうでしたね。しかしこの20年間にはたいへんな違いがあった。いかに語学教育といえども20年もたてば変わるので、いまの若い先生はたいへんにできる。ただしゃべるばかりではなくて、内容のあることをしゃべれる人がいくらも出てきつつあります。それがひとつ。それからもうひとつ、Shakespeare を高等学校で教えるのはもちろん反対で、Shakespeare を教えたかったら Lamb の Shakespeare を教えればいいので、300年前のことばを教えることはない。ただ、小川先生のおっしゃった文学が重要だということは賛成です。ただしこれは文学に限らないので、哲学でも宗教でもいいのです。あるいは経済学でも思想的なものならいい。要するに非常に高度の思想的内容を持ち、日本語と発想法とか人生観とか宇宙観とか論理とか違うことがよく出てくる。そういう文章を使って教えなければ、さっきから問題になっている大事な違いがわからない。

これは語学の教師をやって初めて気がつくことなんですが大学出てから12年間語学教師でなく語学をもっぱら研究のためか、外交官として仕事のために使う立場でした。そのときの私の感想というのは、大学や高等学校の語学教育は文学偏重でおかしいということでした。初めて一高の教師になったときにも、自分がなったのだから、社会学とか外交問題とか国際関係の本をやってやろうといってそのころあった本で教えたのです。それでも最初の1年でいまのことに気がつきました。そういうずれの少ないものは、文法の違いとか何とかということの説明にはなっても内容的なものの考え方の違いとかずれというのは説明できないのです。だから、やはり私は20年間語学教師をしたものとして、内容のずれがあるものを読ませなければならないと思うのです。

金山 その点は私もよくわかりました。それと同時に、こういうふうな事実もあるということでご指摘申し

上げなければならない。それは、日本人というのは3Sである。Silence smile, sleep, なるほどそのとおりなんで私の限られた経験ではありますが、いろいろな国際会議などの場にはべった経験から言いますと、日本人代表席というのはまさに3Sなんです。それから、中にはしゃべれる人もいることはいる。けれども、しゃべればしゃべるほど誤解を大きくしているような人もいるわけで、どうも日本人は英語でしゃべろうと日本語でしゃべろうと、通訳を通して通すまいと、communicationというものが効果的に行なわれていないのではないかということがあるのですね。そういう点、やはり何かしなければならないのではないかということなんですね。

小川 言語というのは communication の means だということを世界のあらゆる学者で否定する人はいないのだから、ことばを習って communication の means にならないということは意味がないわけだ。書こうと話そうと、同時にしゃべったって内容がなければしょうがない。そういうところ日本人は非常に変だと思う。英語を話すということは一種の特技だから人に見せびらかして、人前で必要でないことをしゃべるんだな、本能的に。

金山 ぼくも変だと思うことがあります。日本人というのは英語がへただといふけれども、外国人見たらすぐ英語で話すでしょう。あれわからぬですね。外国人は皆さん英語をお話しになるので、スタンダードプレイかどうかしらないけれども英語でしゃべらなければならないみたいなことを日本の国の中でもやるのですから、外国に行くとたいへん緊張すると思うのですね。そんな緊張した状態では、小川先生がおっしゃったように内容のあるようなことはなかなか言えないと思います。ましてや内容がないのに、ことばの上だけでやろうというのはたいへん無理だと思います。だからそんなような態度というものが問題にされなければならないみたいなことがひとつ。それからことばをそういうふうに手段として考えるという考え方が日本人にはないのではないかということがひとつ。で、たとえば発音なんかへたなくせにくるんですね。それも、外国人との相対的関係というのもあると思うのです。だから英語というものをまずアメリカとかイギリスでしゃべる英語というものと切り離して考えることも必要であって、それがまた語学教育の中に実際に、そういう抽象論だけではなくて教育の現実の場面に反映されなければならないのではないか。そんなようなことがなければ精神的に日本人は相変わらず緊張しているし、緊張している一方、なんてことはない、いざとなると尻をまくって、大和民族だの、大和魂だのといふよ

うな文化的な nationalism で外国人に対処するみたいな偏狭性を發揮する。そんなようなことにもつながってくるのではないかということですがね。

小川 なかなかむずかしい問題ですね、簡単にいうと誤解受けることがいっぱいあるのですけれどもね。一般にも言われていますが、あまり perfect にするのではなくて、とにかく通ずるということを中心として内容を考えて話すということが非常に必要だと思うのです。専門の人は語学の勉強を目的としていいでしょう。それを科学的目的とすると同じようにね。だけどその手前ではやはり手段だと思うんだな。

今後の語学教育

金山 先ほどのお話でもお金があり余まるほどあったとしたら、どのような対処のしかたが考えられるでしょうか。

前田 一番大きい問題は、残念ながらいまの国際語がみんなヨーロッパ語なんで、日本人がそれを話すには言語構造とか、話し方の違いとか、論理とか、国民性とか、いろいろたいへんな違いがあって、しかも世界の国際会議でのさばっているのは大部分西欧語を母国語としているので、デンマークなんかも似ていますし、それからアジアやアフリカの大部分の国は高等教育は西欧語で受けています。そういう意味で日本は非常に特殊なんです。だから日本人は国際社会で話をするにはおそらく世界で一番ハンディキャップを背負っている。それでもわれわれのものを捨てて向こうに順応することは間違いだということなんです。

さっき金山さんがおっしゃったように、国際会議で発言する、それは私も毎年国際会議に出ているのでその問題よく心得ていますけれども、国際会議で発言し取引きし、陰でいろいろなことをやるというための語学力はたいへん日本人にとってむずかしいことなんです。ですからこれをすべての人に教えたらたいへんなロスです。各企業、官庁、いろいろな日本の代表的な外国と触れ合いの多いところはたとえば 5%とか何かの人員は若いときから外国人とやり合うための訓練をお金をかけてやらなければいけない。そのためには若いうちから外国で長く住まわせたり、どんどん会議に出すとか意識的に養成しなければならない。それが私の考え方です。

金山 私、前々から考えていたこともあるし、いま前田先生のお話をうかがってますます痛感させられたことなんですが、私どもの語学教育で一番不備なのは英語教育でもない、フランス語教育でもない、実は日本語教

育ではないかという気がしてならないわけです。それはわれわれ自身に対する日本語教育ということもありますし、外国人に対する日本語教育というものがどうも不備であった。日本政府はそれについて何もやっていない。

ご存じのようにアメリカの場合はアメリカ文化センターとか、フランスの場合はアテネフランセとか、イギリスの場合は British Council とか、そういったものにたいへんな金をかけている。その裏づけがあつて初めて世界語の地位を英語だとフランス語だと与えるということになっているのではないか。それを日本語はむずかしいとか何とかいって手つかずの状態でほつといて、日本語は話してもらえないし、英語も話せないというのでは、天につばをはいて自分のところに返ってくるのと同じじゃないかという気がするわけです。このようなことはどうして出てくるかというと、一番先に話の出た、いわゆる日本の吸收一方の精神構造というか、あるいはそれがその教育に対する反映というようなものも、あるいはそこに西欧追従の姿勢というものの反映があるのではないかというふうに考えるのですが、この点はどのように今後考え、かつ行動すべきでしょうか、

前田 まさにおっしゃったように、向こうに追いつくということを 100 年やってきたわけです。それが大体いろいろなところで追いついて、そしてこちらのくぎが頭を出してきたために、くぎが打たれそうになってきたわけです。ですからこれから心構えを変えて、單に向こうのを取るだけではなくて、こちらのことを向こうに伝えることができるよう日本国民もしなければならない。一時みたいに少数の外交官だけにまかせておいたのではとてもダメで、どうしても日本の社会の代表的な各部門、あらゆる部門がその中のことに通じている人で外国語、英語のできる人を 5% なら 5% 必ず持っているというふうにしなければならないし、教育もそういうふうに切りかえていかなければならないと思います。

金山 いまわれわれが議論してきたようなことはなるほどあるべきであるということではそのとおりであるけれども、現状というのはなかなかたいへんだということは言えるのではないかと思いますが、小川先生、この点について、いま実際に国際教育協会でそういうお仕事をされていていかがですか。

小川 私日本語教育というのが非常に大事だと思うのです。外国人に教える日本語という問題ばかりではなくて、日本語というのはもっと科学的に反省してみると、日本に生まれたから誰でも日本語を話せるわけです。そうでなくてやはり母国語をよくしなければいけない。日本語というのは一番大事なんだから、いまの若い人は日

本語を知らない、そういうよですがにもなると思うのです。國語國文學者がおこるかもしれないけれども、19世紀の國語國文学をやってたのではだめです。もっと近代の living Japanese というものを研究することが大事だと思います。

金山 みんな留学生になって外国へは行きたがるけれども、留学生の受け入れというのはなかなかたいへんでしょう。

小川 たいへんです。ですから日本の政府とわれわれのようなところでやっているものが心を合わせなければ個人的な friendship にとどまるわけです。戦前の留学生問題だって、留学生迎えて反日抗日の徒をつくったということを私ども10何年言い続けてきました。事実なんですよ。

金山 そういうことでおくればせながら日本政府も、外務省は72年度に Japan Fund (日本基金) というものを発足させて、今年度は一応 50 億の予算を組んだわけです。来年度にはまた50億足して総額 100 億にしようということで積極的に文化外交を70年代の日本外交の推進のことをするということで研究者を交換することになっているわけです。これはいま小川先生おっしゃったように、個人の努力と国家的な努力を一致させるという意味では方向はずれのことではないというふうにみてよろしいかと思います。前田先生はこれに直接関係されているわけで、これに対する、諸学教育を中心とした期待といいますか、そういうものについて。

前田 直接関係しているわけではありませんが、去年の夏も外務省に頼まれて東南アジアの文化使節団というで行きました。それからいろいろな官庁がこのごろ急に国際ずいていろいろな委員会をつくって、どんなわもいいところなんです。エコノミック・アニマルと言われたのであわてて国際理解のために何かしなければならないというわけなんです。

金山 そうすると文化アニマルになったら困りますね。

前田 さっき言ったように経済のリズムは早いですから、お金さえ出せば、2, 3 年位でできるわけです。ところが外国理解というような、ことに語学というような非常に年数のかかるものが間に入っているものはどんなにお金かけても 5 年や 6 年じゃならない。少なくとも 10 年ですね。実際に働けるのには 20 年はかかる。ですからいまは新しい国難時代だと思いますけれども、日本の孤立化でボヤボヤしているみたいへんなことになる。ところがこの世界には即効薬がないので、どろなわでも次の困難に備えるためになるぐらいのつもりで、気がついたの

はけっこうだから、できるだけ基本的なことから始めなさいというのが私の意見です。ということは、日本語の教授法の研究開発、それから日本で学ばれていない近隣諸国の言語をもっと研究することです。それをせずに急に留学生の数だけふやすとか、予算を何億にするといつても始まらない。やはりできるだけ基礎的な地味なことからやってもらわなければいたずらにお金ばかりいっひんに注いだら逆効果になる。

金山 かつて日本は太平洋戦争で占領地域に対して日本語を押しつけたわけですが、まさに辞書をつくるというような地道な努力を必要とするようなものは全くなおりにしてきていたということで、それがいまだに尾を引いていて、日本がせっかく経済的大国になりながら、いまだにどうも評価が芳しくないということもあるのではないかと思います。いわゆる教育は 100 年の計などと申しますけれども先ほど前田先生がおっしゃったように、100 年まではいかなくても 20 年は準備期間がいるということであるわけとして、たとえば本席においてもいろいろな問題点というものは出たわけですが、これをたとえますぐ対処するとしてもその効果は 20 年後にならないと出ないということですから、あとは 20 年後をおそるおそる、かつ楽しみにして待とうということになりますね。

前田 20 年後はもちろんですが、それは主としてアジアの関係とか、それから日本語を教えるということについて申し上げたのですが、英語に関する限り必ずしもそう悲観的になる必要はないので、戦後何といっても日本の教育で、この日本の大学が変わったわけではありませんが、外国へ若いうちから行く機会がふえて、そのため今日、42, 3 歳ぐらいから始まってそれから下の若い世代にはその前の世代よりもはるかに有能に外国人と議論できる人材がいるのです。ですからいまの日本もそう悲観的になる必要はないので、若い人に目をつけて、その中の有能な人材を発掘して、それに国内でも責任ある地位に早くつかせて、涉外用にいろいろなことをわからせて、それを代表に送るということはすぐできます。これなら 2, 3 年でできます。

小川 確かにいまの 40 代前の人々は外交官でもたいへんなものです。ぼくら英語少し話すけれども、英語話そうとかまえます。ところが彼らはかまえない。自然ですよ。日本人と話すときは日本語、外国人と話すときは外国语、それは大したものです。そういうものを重用しないということが問題なんです。

前田 ということは日本の社会が戦後変わったでしょう
(p. 29 へつづく)



英語教師としての教養

SAITO

TAKESHI

齋 藤 勇

ちょうど1900年になる前の年に、私は福島県北端に近い梁川という町の小学校上級生であった時、その町では英語のわかるただひとりであった慶應義塾卒業の方のお宅に行って、英語を習い始めました。教科書はその頃ひろく用いられた Swinton の読本でした。その教え方は ELEC の oral approach とは相去る万里、隔世の感なきを得ないものでした。たとえば How do you do? をイントゥネイションなしに、片カナと同じ発音で、ハウズー ニー ズー と読み、それを「如何ニ汝ハ為シ為スカ」と訳すのでした。今から70年も前には、東京でも大体同様の教え方であったそうです。

中学校では3年生のころから、非常にすぐれた先生がたに英語を習いました。その先生がたは、今なお私の記憶に鮮明です。そのうちのひとり吉井正一先生は東大の哲学科出身で、破天荒の教え方をなさいました。前任者が使うことにきめてあった 'Peter Parley' か誰かの世界史から古代史、とくにギリシア史を抜萃した本が教科書でした。歴史の本だから年数がさかんに出て来るのをうるさがって、先生は、たとえば 'The first Olympiad began in the summer of 776 B.C.' とあれば、その数字を日本語で「これこれ B.C.」と読むのでした。たまには seven hundred and seventy six B.C. と立派な発音で朗読されるのでした。これはめちゃな教え方でしょう。けれども私はこの先生の英語の時間を大いに enjoy しました。もうひとりの角田柳作先生は、早稲田出身で、のちコロンビア大学附属東洋文化研究所の基礎をつくり、そこから Donald Keene その他すぐれた日本研究者を送り出した学者です。先生の訳は実に正確で、Wundt の倫理学史の翻訳者であるためか、ことに哲学方面的訳語はすばらしいものでした。

とにかく私の英語学習初期の教え方は、幸い今日は遠い昔の笑話となりました。それで、高木八尺、松本重治両氏が ELEC 創立の計画を立てられた時には、孫たちの年恰好の少年少女が本格的英語学習ができることによって、将来多くの方面に活動することができるよう願いながら、両氏などの驥尾に附いた次第です。そして幹部の方々の奉仕と皆様の御協力とによって ELEC の

方針が実現されて、ここに創立第15年の記念行事を見るようになりましたことは、御同慶に堪えません。ただし私のような老いぼれをここに立たせたことだけは、人選よろしきを得ないことです。しかし身のほどをわきまえることができない老人を嘲笑う前に、この弱々しい老朽者をひきずり出した責任者であるところの堂堂たる偉丈夫、高橋所長を相手になさる方が叱りがいのあること存じます。私の話のシラバスを御覧になれば、内容が大体おわかりになるように、私の話は甚だ雑然たるものですから、これはつまらないとお考えの方は、今すぐ御退席になれば、時間の浪費をなさらずに済みます。

言語学の驚くべき発達とともに、英語学についてもいろいろむずかしい、精密な研究がなされていることはご同慶にたえません。しかしこれは専門の学者は別として、たいがいの英語学習者のみならず、あまりむずかしくない英語の教育にたずさわる方々にも、あまり専門的な学問でありますまいか？ それは私がもう老いぼれて、現代の言語学のすさまじい進歩に追いついていくことができないせいもありましょうが、あるひとつの方面だけを最善であるとして、そのほかのことは捨ててもいいという考え方は正しくないのであるまいかと考えているもののひとりであります。ですから philology の研究もないがしろにすべきではないと思います。そして、いまは synchronic とか diachronic ということばも盛んに使われて、特にいわゆる「共時的」な、同じ時代に通用する言語の研究が盛んに行なわれておるようですが、それと同時にいわゆる「通時的」な歴史的変遷の研究をも大いに勉強しなければ片手落ちになるのではないでしょうか。Synchronic とか diachronic といつてもちょっとわかりにくいですが、同様に共時的、通時的という訳語もむずかしいですね。

とにかく、英語を教えるには、いろいろな方面的研究を続けなければなりませんが、そのさまざまな方面の一面对してこれから申し上げたいと思うのであります。

シラバスに3冊の本をあげておきました。それは英語学の部門に属する本であります。そしてたぶんすでにお

読みになっておられるでしょう。この3冊について私は何年か前に書いたことがありますので、今はただ著者と題だけをあげるにとどめてもいいと存じます。

それは、第一にイギリス人 Henry Bradley の名著 *The Making of English* (1904, Definitive edition, 1927), またその翌年に出了デンマーク人 Otto Jespersen の *Growth and Structure of the English Language* (Ninth edition, 1948), それからアメリカ人 Logan Pearsall Smith の *The English Language* (Home University Library, 1912; New edition, with an Epilogue by R. W. Chapman, 1952) であります。この3冊は内容の範囲がほぼ大同小異で、英語の歴史的展開を英国の文化史と結びつけながら、語源その他を説明したもので、読者は興味深く感じ、かつ啓発されることが多いと思います。そしていざれも割合に小さな本ですから、通読にもそう長い時をさかなくても済みましょう。

3人の著者のうち Henry Bradley は *Oxford English Dictionary* 第3巻のEから編集責任者となった語学者であり、初めからの Sir James Murray をしのぐ学力があったと言われた人であります。（念のために申しあげますが、この英語学者は偉大な英文学者 A. C. Bradley とは全く別人です。）イエスペルセンはその龐大な *Modern English Grammar* などによって日本でもよく知られていることはここに改めて申しあげるまでもありません。しかし3番目にあげた Pearsall Smith は日本ではあまり知られていないかも知れません。ハーバード大学を出てから長くイギリスに住んでいた英語学者であり、ほかに *Words and Idioms* (1925) などの著もありますが、隨筆集やミルトン論などを公にしました。また *English Language* の新版を増補した Chapman は Jane Austen 研究家としても Johnson や Boswell の編者としても有名な学者です。

つぎに、broad culture を身につけるには英語に関してどういう本を読んだらいいだろうかということについて今はまだ Shakespeare と Bible だけをあげておきます。どちらも何といっても、英語や英文学の研究者にとっては決して、いくら勉強してもこれで十分だということのできない無比の大古典であります。しかし両方ともなかなか大きな本であり、ことにシェイクスピア全集はたいへんな分量です。だからせめて、そのうちの何冊かを読むにはこんな作品がいいだろうかと思いまして、ご参考までにシラバスにあげておきました。*Merchant of Venice* と *As You Like It* とは日本でも非常にポピュラーですからお読みになった方が多いと思います。けれど

もシェイクスピアの傑作としては、もし5, 6篇を選ぶとするならば、『ヴェニスの商人』はその中にはいるかどうか疑問でしょう。しかし、たぶん学生は翻訳でそれを読んでいるでしょうから、教科書にその劇に言及があるばあい十分説明するようにしておかなければなりません。それから *Henry IV* 上下2部に活躍する中心人物 Falstaff がすばらしいのです。彼はおそらく世界中のあらゆる喜劇のうちで最も愉快な人物であります。そのフォールスタッフとハムレットとは性格が正反対ですから、ハムレットを知っていてフォールスタッフを知らないければシェイクスピアの全貌を見たとは言えません。*Julius Caesar* はシェイクスピアの劇作のうち最もよくまとまって無駄のない簡潔な描写に富み、また教科書としてシェイクスピアの作中で最も適当なのはこの1篇でしょう。*Hamlet* はいうまでもなく *Othello*, *King Lear* および *Macbeth* とともにシェイクスピアの四大悲劇をなすものであり、世界のあらゆる文学中の最大傑作のひとつに必らず数えられています。トルストイのように誤解している人もありますが、しかしこの大劇作家は、彼が完成した最後の作 *Tempest* においても非凡な天才を發揮しました。また円熟した思想が現われています。そしてそこには悲劇の要素と喜劇の要素とが巧みに統合されております。今一言した10篇ほどの傑作だけを読むにも、ただ一応通読するだけにも、我々日本人は多大の時日を要します。毎日多忙な我々にはそんな時間がないとおっしゃるならば、せめて Charles and Mary Lamb が編纂した *Tales from Shakespeare* を読むのもいいでしょう。ただし「でも」です。しかしこの本は確かにできない本です。普通の梗概とはちがいます。すぐれた趣味をもっている文筆家がシェイクスピアを十分に理解しました鑑賞して、原作中の表現を所々に挿入しながら話を進めている本ですから、シェイクスピア原作への入門書としては立派なものです。

つぎに、1611年の *Authorized Version of the Bible* が英語に対していかに大きな影響を与えたかは皆様よくご承知のことです。この本も、シェイクスピアと同様、なかなかむずかしいところがあります。第一ことばが古く、文法も今日のとは違う所があります。しかしその困難は、1961年に *New Testament* だけ、そして1970年にその改訂版に *Old Testament* および *Apocrypha* を加えた *The New English Bible* によって除かれました。このN.E.B. は我々外国人にとっては最も適当な英訳聖書であろうと思います。これは英國の聖書学者たちがおおぜい協力して訳して、文筆家が文体を練ったものであります。その英語は現代語ですが colloquial ではありません。

ん、現代の教養ある英国人が書くような英文で書いた訳だといつてもいいようです。近年非常に進歩した原典の研究を取り入れながら、教養ある英国人ならば誰でもわかるような英文です。だから私は、英語学や英文学の専攻家は別ですが、普通の日本人、あるいは英語が母語でない人、つまり英米人以外の人はこの新しい現代英語訳聖書、*The New English Bible* を読むのが最も得策であろうと思います。

その旧約、新訳および経外典を合わせたものは膨大なものとなります、それを全部読むということはたいへんです。そして旧約聖書の歴史部門の中にはおもしろくない個所がだいぶあります。人の名前ばかりで index のような部分もあります。それで英語を教える面から見れば旧約聖書中の有名な部分だけでも読むことが得策でありましょう。必読の個所だけでも、選び方によってはかなりの分量になります。

その個所の選定については幸い Sir James George Frazer という考古学の大家の抜粋集 *Passages of the Bible* (Second edition, enlarged, 1909) があります。その text は *Authorized Version* であり、そして本文が 445 pp. 註が 56 pp. あります。ただ困ったことに、今はたぶん絶版でしょう。(しかしこれよりも簡単な抜粋集 *Readings from the Bible* (舟橋雄(むらかし)編) が東京で出版されています)。また四福音書をひとまとめにした英訳福音書抄 *From Bethlehem to Calvary* (1949) もあります。その編注者は ELEC 創立前から関係の深い清水護氏です。聖書は最少限度、旧約では *Genesis, Job, Psalms* の前半 (あるいは「讃美歌」巻末の交説文に選ばれている 33 篇), *Isaiah* (せめて x1—lxi), そして新約では四福音書中の 1 篇 (例えば *Mark*), *Prodigal Son* の parable (*Luke*, xv), *Romans*, viii—ix, *I Corinthians*, xiii などが必読の個所でありましょう。

聖書のほか、多少はキリスト教の歴史をも知っていないならば、すぐれた英語の教師ではないと断言しては少し言い過ぎでしょうか。たとえば ‘Puritan’ は誰でも知っている言葉ですが、なぜ Puritan と呼ばれるようになったか、また Mayflower という船はどんなことをしたのか、などについて知らなければ、‘Pilgrim Fathers’ というアメリカがつくった phrase の意味がはっきりしないことになります。また英文学史のごくあらましだけでも心得ておくべきことが、英語の教師としては必要であることは改めて申すまでもありません。英米文学抜粋集は日本にもありますが、数多くアメリカで出版されています。英米文学に関する多少の知識をもたずに英語を教えている人はあるまいと思いますので、この点はこ

れ以上何も申しません。

なおそのほか、英語の etymology にも注意していかなければなりません。それにはギリシア語やラテン語をすこしは知っていなければならないでしょう。エリザベス朝としては古典に明るいほうであった劇作家 Ben Jonson は、シェイクスピアを追悼する名高い詩の中に ‘Thou hadst small Latin and less Greek’ と、ほめたのかひやかしたのかわからないようなことを書いていますが、ジョンソンは classicist でしたから、彼に比べるとシェイクスピアは古典文学に明るい人ではなかったのです。シェイクスピアはたとえ大学卒業生であったとしてもそれを鼻にかけるような男ではありません。そして小学校しか学校教育を受けなかったけれども、実に驚くべき広範な知識を持っていたことは皆様御承知の通りです。‘Small Latin and Less Greek’ だけでも我々にはなかなかむずかしいことです。古典語の知識によって英語を説明した etymology の辞書もありますが、京都大学名誉教授である古典学者田中秀央(ひでひさ)博士が一般読者のために書いた本があります。その『西洋古典語源漫筆』(1955)は小さなポケット本ですからバスの中でも何時間かのうちにひととおりは読めるでしょう。

英語の style を心得ることは英語が母語でない者にとっては実にむずかしいですね。私のような者には英文の文体を批判することをうっかりやれば物笑いになりそうです。だからりっぱな style で書いたものをその国の人人が朗読するように早くから教えられて、その文章を touch-stone にすることが大事です。文体鑑賞の第一歩としては、intonation とか rhythm とかに耳が鋭敏であるように訓練されることが必要であります。すぐれた文体とは、適切な言葉を適当な場所に配置して、意味が明快であるのみならず、内容が豊富であり、そして耳に快適な感じを与えるものであります。

そしてその点に多少関係のあることですが、英語だけではなくすべて外国語の上級教科書は、表現がはっきりしており、そして言いまわしがうまいのでおもしろいということだけで、適當だとは言い切れないことがあります。それはちょっとした役には立つでしょうが、ながい一生涯の役に立つかどうかを考えてみると、すこしむずかしくてもやはり大文学と呼ばれ、あるいはそれに値する著作を選ぶべきであろうと思います。これはもちろん初步の生徒に対しては無理でありますけれども、高校上級生などの教科書については可能なことであります。

それで私はその一例をお知らせするつもりでここに *Education and the Spirit of the Age* (1952) という小さ

な本を持ってまいりました。著者は英國の Sir Richard Livingstone という classical scholar です。この本の終わりのほうに大いに注意すべきことがあります。この学者が、おそらく高等学校程度のところでフランス語やドイツ語を習った頃の経験を述べているのです。フランス語は普通の教科書で、Daudet とか Dumas とか、おもしろいにきまっており、従って楽に読めた。けれどもドイツ語のほうはそうではなかった。ドイツ語の先生は、1年間ぐらい過ぎたか過ぎないかのうちにむずかしいもの、Heine の詩を教えた。そして続けざまに Goethe の *Faust* を教えた。ハイネはそれほどではなかったけれども『ファウスト』は一生涯ためになった。むずかしいけれども、何べんか読んでいるうちに自然に暗誦した。そしてこの古典学者はドーデーやデューマの作品の題は覚えているけれども、中身はみんな忘れてしまったのに反して、『ファウスト』に書いてあることは、一生涯よく覚えていると書いております。ゲーテは偉大であるけれども、欠点も目立つので、人間としても創作家としても不満な点があるので、彼を無条件に礼賛することのできない人もあります。それにしても、『ファウスト』はゲーテがいろいろな経験をもとに書いて書いた大作です。だからリヴィングストン教授は『ファウスト』を原文で習って、その中に出てくる名句を時々思いおこしては人生についていろいろ考えさせられ、そして学び知ることが多かったと言って、外国語の教科書はすぐれた文学の作品であるべきだと主張しております。

すべて偉大な文学は読者の想像力を豊富にするものであります。そして想像力の貧弱な人は大規模の創造を企てるには適しません。従って教科書にはできるだけ偉大な名著に親しむ機会となるものを選ぶことには、大いに賛成です。そういう心掛けがあれば、我々は決して teaching machine となることはありますまい。この講演の初めにお話ししました中学時代の英語の先生が、西洋史の年代の数字を読まないで、B.C. コレコレとは言ったのは、決してまねるべきことではありませんが、その教師の背後には思想があり、真剣さがあったということに生徒が気がつけば、その生徒は外国文化に興味をもち、従って外国文化を学び取る方法である外国語学習を努力することになります。それほどではなくとも、外国語を勉強する気になりましょう。

その教科書の文体は、高校上級のためのものでも、装飾的な表現の少ない（できれば絶無な）明快な文章であることが望ましいと思います。Authorized Version がいかに崇高であっても、またシェイクスピアがいかに壯麗であっても、今日通用しない古風な文体では高等学校ま

での教科書としては甚だ不適当であります。教養ある現代英米人の喜ぶ英文であることが必要条件であります。俗語、流行語、新造語を高校生（中学生にはもちろん）は、また英語教師でも、beatnik, hippie, woman's lib などの出所や、residence と office-building とを一つに縮めた日本製英語 residen-buil などを知らなくとも、一向恥ずかしくないことでしょう。

それから vocabulary については、殆んど同じ意味を表わすのにいろいろな言葉があるので、我々はその間の微妙な使いわけがあろうかと思って大きな辞書を見なければなりません。英文学にはどこの国でも同様であるように、古語 (archaic expression) や詩語 (poetic diction) が韻文には特別に多くあります。たとえば行末に fair と書けば押韻の必要上 horse ではなく mare としたり、wind としては韻が合わないので air とする場合もあります。あるいは metre の関係上 2 音節の ocean の代りに main を、また同様に always ではなく still を用いるようなこともあります。

それとはすこし別のことですが、Authorized Version には 'young' がつかない pigeon がなく、鳩はたいがい dove となっているようですが、現代英語では使い分けをしているようです。たとえば New English Bible では Matthew xxi. 13 に Jesus upset the tables of the moneychangers and the seats of the dealers in pigeons' とあり、John, ii. 14, 16 における同一場面にも、pigeons と訳されていますが、Matthew iii. 16 には Jesus 'saw the Spirit of God descending like a dove' とあります。すなわち、ただの動物としては pigeon であるが、宗教との連想が伴なうばかりには dove となっています。かのように環境によって鳩は鳩でも英語では使い分けがしてあります。

語について、もうすこし例をあげます。Baby と infant とは共に赤ん坊のことですが、両語の etymology がちがい、従って含蓄もちがいます。その差を明らかにしている例が Tennyson の傑作 *In Memoriam* の中にあります。テニソンは親友 Hallam が若いのに長逝したので、人生がまっ暗になったような気がし、そして自殺をしかねないようになりました。けれどもなお、希望だけは失いませんでした。そして彼はその時の心境をつぎの 4 行に言い表わしました。

So runs my dream: but what am I?

An infant crying in the night:

An infant crying for the light:

And with no language but a cry. (LIV. v)

そしてここに 2 度くり返されている infant の代わりに

なぜ同じ強弱調の 2 音節語 baby を用いなかったのでしょうか。それには相当の理由があります。Infant はラテン語から来た外国语で、日本文中の漢語に当るもので、少し威厳がありますが、そのことよりももっと大事な点は暗示の有無です。Infant の語源 infans は speechless とか dumb という意味のラテン語ですから、infant と言えば、当然口がきけないことが連想されるのですが、baby にはそういう連想がなく、ただ幼少の意を示すだけあります。そして infant を 2 度もくり返して暗示したことが、最後の行によって端的明確に表現されますので、読者は詩人の胸中を察しないわけには行かなくなっています。（ここの night は絶望の夜であり、light は希望の朝であります。）

ここに韻文を引用したついでに、stress の強弱または弱強の形を正しく守っている詩の朗読は、intonation をおぼえるにも大いに役に立つことを一言つけ加えておきます。

また vocabulary の問題にもどります。同じ言葉ではあるが、イギリスとアメリカとをそれぞれ別の意味で使っていることも注意すべき点であります。それはアメリカ人のいう first floor は日本語の一階と同じですが、イギリス人には二階であるというようなことです。また万事ひかえめなイギリス人が、'like' に stress を置いて 'It's something like a day' と言えば、それは「好い天気ですね」のことであり、彼らの 'Not half bad' は 我の「結構ですね」にあたり、また彼らの 'common-sense' は我々が「常識」として半ば軽んじるものよりも遙かに重要な判断力であることなどは、ご承知でしょう。同じように Authorized Version に用いられている 'conversation' は会話ではなく、国籍 (Philippians, iii. 20), 行為 (idem, i. 27) などの意味の言葉であります。

かように同じ言葉が国によって、あるいは時代によってちがう意味で用いられる例は、我々のいわゆる漢語のばあいにもあります。一つ二つその例をあげるにとどめますが、まず李白の詩から取って見ましょう。その中に「宣州謝朓樓にて校書叔雲に餞別す」という私の好きな詩があります。そしてその終わりの 2 行

人生在世不稱意，明朝散髮弄扁舟

の「散髪」が問題となります。この詩は李白が第 5 世紀後半の詩人謝宣城を記念する高棲に登って杯を重ねながら親友との別れを惜しむ切切たる友情を歌った名作です。

「人生，世に在って意にかなわずんば，

明朝，散髪，扁舟を弄せん。」

つまり男子たる者が狭い世の中に出ても思うようにな

らなければ、あすは頭髪をかき乱したまま、小舟に乗ってどこもなく広い世界に出て行こうと、李白らしい奔放な気持を歌っているのですが、この「散髪」は我々が使う理髪の意ではありません。その逆です。李白は官吏でしたが、唐代の官吏は毎朝頭髪をくしけずってゆい、帽子をかぶり、それにかんざしを通して出かけることになっていたのです。従って散髪は役人をやめることを暗示する言葉です。同様に我々は「遠慮します」、「ご遠慮なく」、「あいつは無遠慮な男だ」などと申しますが、元来漢文では「遠慮」は遠き慮(遠き)で、「近憂」(近きうれい)に対して用います。

もう一つの例を、李白の友人であった孟浩然の非常に有名な五言絶句「春曉」から取ります。これは皆様ご記憶の詩と思いますが、まだ起きあがらない時の感想でしょう。

春眠不覺曉，處處聞啼鳥。

夜來風雨聲，花落知多少。

春になると夜明けが早いので、暁になったことをさとらずに寝込んでしまったが、目がさめると、方々で鳥が啼いているのが聞える。夜中から雨風の音がしたから、折角咲いた花も落ちたろう。どれほど落ちたかしら。と解釈してよからう。結句にはさまざまの解釈が可能です。「花落つこと知んぬ多少ぞ」が昔から伝統的な読み方のようです。そう読んでも多少の疑問が残ります。ことに「知多少」の意味が判然しません。今私が「多少の疑問」と言ったような意味ではないことは考えられます。吉川幸次郎教授は「多少(能)なるを知らんや」、従って実は「不知多少」の意であると言いい、小川環樹教授は「多少」を「いくばくぞ」と解釈しています。そして私が中学生の時から手許に置いている、王相晋選註『新鐫五言千家詩會義直解』(光緒年間版)には、巻頭にあるこの詩の註に「想庭前花吹落，不知多少」(庭の花が風に吹かれて落ちたと想うが、どれほどかはわからない)と記しております。少しでもなく多くでもなく、多いか少ないかの意です。つぎに、「知」の tense がはっきりしません。「知んぬ」は「知りぬ」と同じく過去であるから、「いくばくぞ」とはそぐわないようです。「知らん」

(知りたいものだ) としてはどうしょう。とにかくこの詩の「多少」は我々が今日用いている意味とはちがいます。ちなみに、孟浩然よりも百年以上もの間に生れた晚唐の詩人杜牧の名作「江南春」には「多少樓臺煙雨中」とあるが、その場合「多少」は「多くの」と解釈されています。もしそれが正しい解釈ならば、我々の「多少」とは反対に近い意味となります。

もうひとつの例をあげておきましょう。それはここ

に持ってきた小さな古い、文化8年ですからちょうど160年前に出た本にあることです。この本は市河寛斎(ELECの理事でもあった英語学の大家市河三喜博士の曾祖父)の『談唐詩選』であります。そしてこれは徳川時代から盛んに漢詩の教科書として用いられた『唐詩選』を非難した本です。しかし漢字の使い方などについて私は教えられることができました。たとえば「衡盃」(盃をふくむ)という漢字の使い方です。杯または盃を衡むとは、盃を口にくわえることです。しかし口が盃をふくむとは言いません。「ふくむ」に当る漢字はもうひとつあります。含です。この字を日本では衡の代りに盛んに使うようになったのは大間違いだと寛斎は非難したのです。たとえば羞を含む(顔色がぼうと赤くなる)とか、英を含む(きれいな花を口の中に入れる)という使い方はそれでよい。けれども「一盃含未盡」という一句を中国人が見れば、日本人は酒を飲む時、盃をもロの中に入れるので、盃がどの通りかねることがあると思うだろう。「笑フニモ餘リアル訛謬ナラズヤ」と書いてあります。どこの国のことばを覚えるにせよ、これも、いろいろ注意深くことば本来の意味を考えおかなければならない一例となります。かような例は少なくありませんが、もうこれ以上必要はありませんまい。

私は中学3年から数学を全然勉強しなかったので、高

校入学後哲学者大西祝の Spinoza 伝を読んで、その人となりに敬服し、かつその名著 *Ethica* が幾何学的形式によって論理を進めている本であることを知って、数学の埋め合わせとも思いながら、一度半ぐらい英訳で(当時邦訳はなかったので)通読しました。哲学の予備知識がなかったので、わからないことは少なくなかつたが、最後のセンテンス 'all noble things are as difficult as they are rare.' にある通り、立派な事は何をやってもむずかしいのです。むずかしいけれども、そのための努力は大きな楽しみです。急がずにまた休まずにやりましょう。ゲーテのような大天才でもそう言いました。また古典学者田中秀央博士の殆んどすべての著書にはどこかに 'Festina lente' (ゆっくり急げ) という格言が引用してあります。その田中氏は Raphael von Koeber という哲学の先生から古典を習ったのですが、東大の講師になった時 'Semper idem' (今まで通りそしていつまでも研究を続けよの意) と言われたそうです。またその次ぎの年に、同じく東大の教授で、日本の英語学開拓者である John Lawrence 先生から、さりげなく 'Be always a student' と或る若い講師が戒められました。そして彼はその訓誡を今も守ろうとしています。(1971年11月6日 第7回ELEC英語教育研究大会における講演)

(東京大学名誉教授)

(p. 23 よりつづき)

う。ですからいろいろなことで西洋の社会と似てきたことが多いので、われわれの世代のようなずれが減ったんです。だから比較的前の世代よりも楽に向こうのことを吸収できた。それが大きいのです。それから外国に留学する機会が多いということもあります。

小川 もう少し言えば、日本人の climate ね、climate ということはなかなかむずかしいことです。だから外国でやっているのを日本人はすぐまねするけれども、日本の climate ということを考えながらいろいろなことをやらなければならないと思うのです。又、特にことばをやるということはいや応なしにその back-ground というものを知っているということになる。そういうことと不可分だと思うのです。また逆に言えばそういうことを頭に入れながら教師が学生に対する場合に対処しなければならない。

金山 きょうはたいへん実りのある有意義なお話をあって非常に啓発されるところが多く、希望の光がほのみえてまいりました。ありがとうございました。

(速記: 林節子)

EUN WITH SPELLING

When you buy something new it soon begins to become old. Sometimes it takes a long time. See how quickly you can solve this word puzzle starting with *new* and ending with *old*. Remember you can change only one letter on each successive line to form a new word. There are several solutions to this puzzle. Perhaps, you can find more than one.

new

—

—

—

—

—

—

—

—

old

Solutions to this puzzle will be found on page 40.



中東とインドネシアの英教語育見聞

IMAMURA

SHIGEO

今村茂男

Libya, Saudi Arabia, Qatar 3国政府の招待でこれらの国の英語教育事情を視察する機会を得た。ついでに大学の用事でインドネシアも訪問した。目的はいずれもアメリカに留学するこれらの国からの学生の英語運用力向上対策の研究であったが、アラブ3国に2週間、インドネシアに1週間という短い期間で、わずかに表面を眺めた程度に終わった。それでも各国の文部省英語教育担当者から現場教員に至るまでの人と意見を交換し、中・高・大の英語教室を参観して、強く感じることがいくつかあった。その感想をひと口にまとめると、「日本は恵まれている」ということになる。具体例をあげて比較して見よう。

1. 教材 アラブ3国、とくに新興国カタールでは、適切な教材を求めるのに苦労している。日本のように多数の教科書が書かれてその中から一定基準により検定・採用されるというのではなく、アラブ語を母国語とする学生に適当な教科書がほんのわずかしかないのである。現在使用されているものの大部分は英国人の著作で、かなり時代おくれの感がした。

インドネシアでは文部省が中心になって教科書の作成をしているが、ここでの問題は配本が間に合わなかったり、配本されてもいつの間にかヤミルートに流れて、なかなか生徒の手に入らないことにあったようだ。

アラブもインドネシアも、日本のように参考書や英字新聞・雑誌が豊富にあるわけではなく、テレビの英語講座などもまだない。学生は教科書と教師のみから英語を吸収している。

2. 教室構造 高温乾燥地域のアラブでは、教室の中を涼しくするために、厚いコンクリート壁と高い天井という構造になっている。そのために音の反響がひどく、一斉ドリルなどをしようものなら、誰が何を言っているのか聞きわけることができない。

一方、高温多湿のインドネシアでは、地方の学校へ行くと、教室間のしきりは竹か何かの植物を編んだものがあり、教室どうしの音は丸ごこえ。

3. 教員養成 リビアではさほどでもないようであったが、サウジアラビアとカタールでは、英語教員を志望する学生が皆無かそれに近い状態だった。教員の給料が

安いことはどこの国でも似たようなものだが、アラブ社会では教員の社会的身分が低いのだそうな。役人はえらいが教員はくだらん、ということらしい。その上、英語教師になれるくらいの語学力があれば、もっと楽で金になる仕事がいくらでもあると来ては、英語教師になり手がないのも無理はない。では誰が英語を教えているかと言えば、自分の国では職が得にくいエジプト人・レバノン人・ヨルダン人・パキスタン人・インド人など。英語と言わず他教科の教員も圧倒的に「外国人」が多い。中には帰化して誠心誠意教べんを取っている人もあるが、概して「庸兵」の感を受けざるを得なかった。中・高校の社会意識・国家意識を形成する大事な年齢時期に、大部分外国人教師に教えられている学生はかわいそうだと思った。

油田からあがる富を、おしげもなく教育に投入して、学校施設が飛躍的に拡充されているこれらアラブ諸国では、ただでさえ教員養成が間に合わないので、志願者が少ないのでますます外国人に頼らねばならない現状である。とくにカタールでは、文部省の視学官から教員に至るまで、英語教育界にはカタール人が皆無である。

インドネシアでは事情が非常に違う。教師はまず皆インドネシア人であり、日本よりは養成年数が少し短いようではあるが、学生時代に英語の集中コースを受け、卒業後の現職教育も相当組織的に行なわれている。文部省官吏や大学教授の中には米国や英國の大学で言語学や外國語としての英語の修士号や博士号をとった人も多い。しかし上記の教室構造や教材不足のため、どう教えるべきかを知りながらその通りのことが実施できないので困っている教師が多い。

教員養成機関も大学によって質的な差が大きく、私の参観したジャカルタやボゴールはよくやっていたが、かなり質の低いところもあると聞いた。

4. 英米人教師への依存 アラブ諸国は伝統的に米国よりは欧洲に眼を向けて来たから、英語を母国語とする教師と言えばほとんど英国人である。それはよいのだが英國人教師であればアラブ人教師より教育効果があげられると盲信する傾向がある。だから前項の自国人教師の
(p. 40 へつづく)

BE 動詞について

NAKAJIMA FUMIO

中島文雄

BE という動詞は、統語法上も意味論上も特異な性質をもっている。代表的な用例として、次のようなものが考えられる。

- (1) God is.
- (2) John is in the garden.
- (3) The book is in print.
- (4) Jane is asleep.
- (5) She is intelligent.
- (6) Her father is a lawyer.
- (7) The dog is barking.

まず(1)の God is. であるが、この is は exists という意味であるから、これは本動詞であって <existential> という意味特性を認めることができる。次の(2) John is in the garden. の is も、存在を意味する点では(1)と同じであるが、(1)の is が絶対的な存在を表わしているのに対し、(2)の is は in the garden という場所の相対的規定を伴っている。同じく <existential> ではあるが、(1) は <+absolute>, (2) は <-absolute> という特性をもつとして区別される。

(3) The book is in print. はその本が出版されているという状態をいっているので、外見上は be + 前置詞句であって、(2)と同じであるが、(2)の前置詞句が <+locative> の特性をもつてゐる。これと(3)のそれは <-locative> である。従って(3)の is は <statal> として、(2)の <existential> と区別することができる。<-locative> の前置詞句は、<+locative> の前置詞句が存在の相対的規定であったように、状態の相対的規定である。(3)の in print は out of print (絶版) と相対的である。

(4) Jane is asleep. の asleep は、副詞と見れば(3)と同じ解釈ができるが、形容詞として解釈すると、これは眠りの状態を意味しているので、is は単に繫辞的なはたらきをしているにすぎない。この is は <copulative> であると考えられる。(5) She is intelligent. の is も <copulative> であるが、intelligent は asleep とことなり、一時的の状態でなく、その人にそなわる性質と考えられている。そこで(4)と(5)の形容詞を、

それぞれ <+temporary>, <-temporary> という特性で区別することにする。

(6) Her father is a lawyer. の is も <copulative> であるが、これにつづく構成素が名詞である点で(4)

(5) とことなる。(7) The dog is barking. の is は ing と一緒にになって、動詞の進行形をつくるはたらきをしているので、これを補助詞 <auxiliary> と見るのが妥当である。

以上述べてきた be の特性を表にすると次のようになる。

- I. be <existential> <+absolute>
- II. be <existential> <-absolute> + PrepP <+locative>
- III. be <statal> + PrepP <-locative>
- IV. be <copulative> + Adj <+temporary>
- V. be <copulative> + Adj <-temporary>
- VI. be <copulative> + NP
- VII. be <auxiliary>

説明を補足すると、I は特殊な場合で、be (=exist) は単独で Predicate をなす。

- (1) God is.
- (8) Whatever is, is right.

この is right の is は V の be である。

II は存在に場所の相対的規定が加わる場合で、場所規定は PrepP で表わされるのが普通であり、その機能は be <existential> <-absolute> の Complement ということになる。

- (2) John is in the garden.
- (9) Bill is out of town.
- (10) The station is on the right.
- (11) The park is just outside the town.
- (12) The garden is at the back of the house.

次の副詞語句は、場所の相対的規定を表わす点で、上の PrepP と同じ機能をはたしているので、II の特別な場合である。

- (13) John is over there.
- (14) Bill is not here.

(15) Mary is downstairs.

(16) They are in.

最後の例の *in* は in the house, in the room のような前置詞句に匹敵するので、単なる particle ではない。They are out [off, away] なども同様である。

IIIは PrepP が <-locative> の場合であるが、これが *be*<statal> の相対的規定をしているので、機能はやはり Complement である。

(3) The book is in print.

(17) I am on duty.

(18) She is in good health.

(19) We are on good terms.

(20) He is against [for] the war.

(21) We were barely out of danger.

(22) I'll be at liberty next week.

(23) He is under the sentence of death.

(24) She was in a confused state of mind.

Complement として副詞語句が用いられることがある。これも IIの <+locative> に対し <-locative> というちがいがある。

(25) The time is up.

(26) The good old days are over.

(27) The fruit is far from ripe.

(28) I am through with my work.

IVと Vは *be* <copulative> + Adj の場合であるが、Predicate(述語)の主要な部分は Adj にあるので、その機能を Predicative(述語的)とよぶことができる。IVの Adj<+temporary>の例からあげると、

(4) Jane is asleep.

(29) He is afraid of me.

(30) She is ready for starting.

(31) I am glad of your success.

(32) I am anxious about his health.

(33) He is aware of the fact.

(34) I am grateful for your sympathy.

(35) You should be careful about your behavior.

(36) I am not responsible to you for my actions.

これらの形容詞のうち *asleep*, *afraid*, *aware* などは Predicative にしか用いられないものであり、他の形容詞も前置詞句の Complement をとって、その <+temporary> の性格を明らかにしている。

次は Vの Adj <-temporary> の例であるが、ここでは一時的でない性質や状態を記述する形容詞が Predicative として用られる。

(5) She is intelligent [brilliant].

(37) Mary is polite [graceful].

(38) Bill is foolish [stupid].

(39) Susie is tall [short].

(40) Some stars are visible (=are perceptible by the eye).

同じ形容詞が <+temporary> にも <-temporary> にもなりうる。(40) の *visible* は <-temporary> であるが、

(41) Few stars are visible tonight (=can be seen).

といえば <+temporary> である。また

(42) Be polite!

(43) I think I'm pretty today.

といえば <+temporary> の *polite* や *pretty* が意味されている。この場合には *be*+Adj の進行形が可能である。

(44) She is being polite.

(45) You are being silly, Tom.

こうすれば *be polite* [*silly*] の <+temporary> であることがはっきりする。

VIIは Predicative が NP の場合である。

(6) Her father is a lawyer.

(46) Paris is the capital of France.

(6) においては Pred の NP が主語を包摂する概念を表わしており、(46) では主語と同じものを表わしている。前者の *is* は classification の、後者の *is* は identification の繋辞であるといえる。

VIIの *be* は <auxiliary> で、動詞の進行形のほかに、受動形を作るときも用いられる。

(7) The dog is barking.

(47) My dog was run over by a car.

以上 *be* の種々相を見てきたが、*be* を含む MV (Main Verb Phrase) の構造を示すと、次のようになる。

I. MV→be

II. MV→be Cmp<+locative>

III. MV→be Cmp<-locative>

IV. MV→be Pred<+temporary>

V. MV→be Pred<-temporary>

VI. MV→be Pred<nominial>

VII. Aux→be+ing Passivizer→be+en

機能範疇を表わす Cmp や Pred が、それぞれ

Cmp→{Prep P}

Pred→{Adj (Cmp)}

であることは、一般に認められている通りである。

IIの *be* は <existential> であり IIIの *be* は <statal> であると言ったが、発生的には IIの *be*<existential> +

PrepP<+locative>が、比喩的に転用されてIIIの *be*<*statal*>+PrepP<-locative>になったと考えられる。

(25) (26) (27) (28) の副詞 *up*, *over*, *far*, *through* も本来<+locative>であるものが<-locative>に転用されたといえる。IV, V, VIの *be* はさらに無内容になって<copulative>とすることができる。IからVIまでの *be* は動詞であるがVIIの *be* は動詞補助詞で、(7) (47) における動詞は *bark* と *run over* である。

以上が基底文における *be* の用法であるが、これから派生する文法上の問題がいくつかあるので、それを順次取りあげてみる。

まず、*there is* 構文がIIの *be*<Cmp<+locative>から派生したことが指摘される。この変形については、本誌前号の拙稿において述べたところがあったので、ここでは簡単に触れておく。要するに、

NP be Cmp⇒Cmp be NP Cmp

という変形がまず行なわれ、次に文頭に複写 (copy) された Cmp が *there* に変えられて *there is* 構文ができるとするのである。たとえば

(48) A man is at the door.⇒

At the door is a man at the door.⇒

There is a man at the door.

この *is* は<existential>であり、*at the door* は<+locative>である。

受動変形についても前号で述べたが、それはいわゆる “actional passive” についてであった。これに対し “statal passive” という受動形があるが、これはさらに III の構造に変形したものと考えられる。たとえば、

(49) The door was shut at six, but I don't know when it was shut.

において、あの *it was shut* は「しめられた」という

“actional passive” であるが、はじめの *The door was shut* は6時に「戸がしまっていた」という “statal passive” である。その深層構造は、[1図] のようなものと考えられる。

S₁ の [someone shut the door] は受動変形によって [the door was shut (by someone)] となる。これは actional passive であるから、*was* は<auxiliary>, *shut* は P.P. (Past Participle) である。これに対し *statal passive* の *be* は<statal>な動詞と考えられるので、[1図] の MV は III の型で、<-locative>の Cmp を必要とする。この Cmp が基底構造では dummy △ になっている、これが actional passive の P.P. で置換されるという変形をうけ、そこで *statal passive* ができると説明される。すなわち *The door was in a closed condition* という意味を表わす。明らかに *statal passive* と見られるものに、

(50) He is buried at Stoke Poges.

(51) His bills are paid, so he owes nothing now.などがある。この *be* が<statal>であることは、*be* の代わりに *lie* とか *remain* という<stative>な動詞が用いられることからも推察できる。

(52) He lies buried in this churchyard.

(53) The door remains shut.

これらの動詞は過去分詞ばかりではなく、形容詞や名詞とも結びつく——

(54) The weather stayed fine.

(55) She remained single all her life.

(56) He stayed president for ten years.

(57) He remained a bachelor all his life.

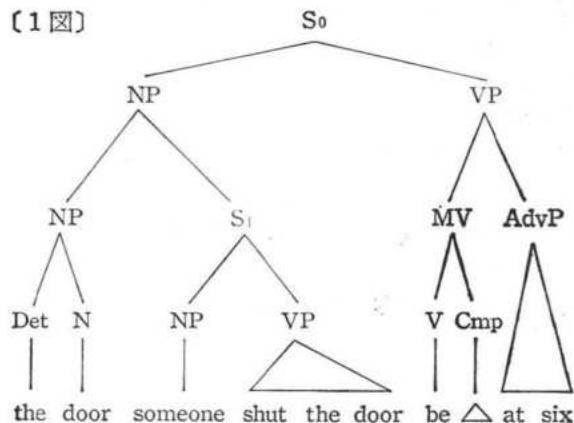
ここでは *stay*, *remain* という<stative>な動詞が<copulative>な性格をもって、Predicative の形容詞や名詞を伴っている。これと比較すると *statal passive* の *be* が<statal>から<copulative>に機能変化をおこすことは容易であると思われる。The door is *shut* now. と The door is *open* now. の類似性からも、*statal passive* の P.P. が形容詞的性格をもつのは自然である。そのような P.P. を Participial Adjective とよぶとすると、*statal passive* は III. *be*<statal>+P.P. <Cmp> から、IV. *be*<copulative>+Participial Adjective <Pred> へ推移する傾向をもっていると言うことができる。その推移は、

(58) He is known by everybody in the town.

(59) He is known to everybody in the town.

にうかがえる。(58) は本来の受動文で、*known* は過去分詞であるが、*know* の<stative>な性格のために、本

[1図]



来る P.P. が容易に Participial Adjective に推移し, *be* が <copulative> になり, (59) のように *known to* になったと説明される。次にあげる Participial Adjective は、もはや深層構造に能動文を前提することができない。IVの型の変種と見なされるほど形容詞化が進んでいる。

- (60) I am not concerned with this matter.
- (61) She was delivered of a child.
- (62) He is laid up with a bad cold.
- (63) Water is composed of hydrogen and oxygen.
- (64) The town is situated on the hill.

ある種の Participial Adjective は、さらに進んで事実上形容詞になっている。たとえば、

- (65) He was surprised by her conduct.
- (66) He was surprised at the strange sight.

を比較すると、両文とも *very much surprised* として強めることはできるが、Intensifier を一つにすれば (65) の *surprised* は過去分詞であるから *much* をとるのに、(66) は *very surprised* となる。これは形容詞化が完全であることを示す。同種の形容詞に *amused, pleased, tired, worried* などがある。

Vの<-temporary>の形容詞は、名詞の前に置かれて attributive (帰属的) にも用いられる。(5) (37)～(40)に見られる形容詞は、いずれも *an intelligent girl, a polite woman, a foolish boy, a tall girl, visible stars* のように prenominal の位置につくことができる。変形生成文法は、このような Adjective+Noun の結合を基底構造に認めず、これを関係詞節から変形によって生み出されたものと説明する。すなわち

- (67) a girl who is intelligent ⇒

*a girl intelligent ⇒

an intelligent girl

のように、まず関係詞節の *who is* の消去 (whiz-deletion) が行なわれ、それから形容詞が prenominal の位置に移されて Adjective+Noun の結合が出来たとする。この変形による説明は、形容詞が <-temporary> の特性をもつときには当てはまる。

- (68) stars which are visible ⇒

*stars visible ⇒

visible stars

は「肉眼で見える星」という、*visible* が <-temporary> の場合で、これが <+temporary> ならば、

- (69) the stars which are visible (tonight) ⇒
the stars visible (tonight)

となり、whiz-deletion の段階で止まる。すなわち形容

詞は postnominal の位置をとる。(68) *visible stars* の形容詞を Attributive Modifier とよぶとすれば、(69) *stars visible* のそれを Predicative Modifier とよぶことができよう。前者は <-temporary>, 後者は <+temporary> の特性をもつ。

この区別は現在分詞に由来する Participial Adjective にも見られる。

- (70) a stone-throwing mob

- (71) a mob throwing stones

後者の *throwing stones* は Predicative Modifier で、*throwing* は Participial Adjective である。(71) は

- (72) a mob which is throwing stones

から変形で出来たと説明されるが、ここで消去される *which is* の *is* は <copulative> の *be* と解されなければならない。換言すれば *is throwing* は進行形ではなくて、*be + Participial Adjective* であるということである。そこで (72) に whiz-deletion が行なわれ、*throwing* が、Predicative Modifier になったと説明される。(70) の *stone-throwing* は、*throwing stones* をさらに形容詞化したもので、Attributive Modifier であるから <-temporary> の特性をもつ。「石を投げている」ではなく、「石を投げる」という性格を意味している。同様に、

- (73) A rolling stone gathers no moss.

- (74) Barking dogs seldom bite.

の *rolling* も *barking* も <-temporary> であって、関係詞節で表わすとすれば、むしろ

- (75) a stone that rolls

- (76) dogs that bark

とするのが意味の上からはふさわしい。この *roll* や *bark* を形容詞化したものが *rolling/barking* で、(72) と同じような関係詞節を構成し、それから変形の結果 (73) (74) に見られる Participial Adjective の <-temporary> の用法ができたと説明される。類例として *moving staircase* (=escalator), *jumping beans* などがあげられる。

最後に VI の *be + Pred<nominale>* の用例を検討してみると、*Pred* に動名詞や不定詞が用いられることがあるが、これらを <nominale> と見ることに問題はない。たとえば、

- (77) His hobby is collecting old almanacs.

- (78) Seeing is believing.

- (79) To see her is to love her.

次に、*be* のあとに前置詞句がくるが、II や III の場合 ちがうものがある。

- (80) The food is for dogs.
 (81) The man is from Chicago.
 (82) The matter is of great importance.

これらにおける *be* は <copulative> と思われるが、そうすると前置詞句は Pred ということになる。しかしこの前置詞句は IV, V, VI の Pred とは性質をすることにする。そこでこれらは、それぞれ *the food for dogs/the man from Chicago/the matter of great importance* という名詞句から変形によって派生した分裂文 (cleft sentence) であると解釈するのが正しいと思う。Chomsky* によると

- (83) The question is whether John should leave.
 (84) The prospects are for peace.
 (85) The plan is for John to leave.
 (86) The excuse was that John had left.

は、それぞれ

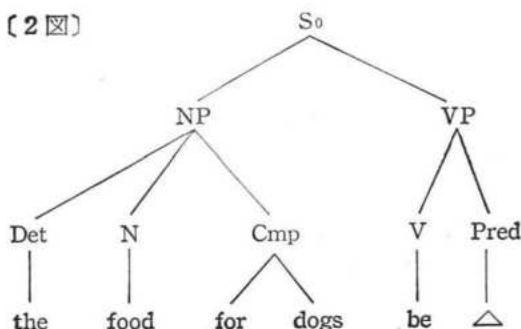
- (87) the question whether John should leave
 (88) the prospect for peace
 (89) the plan for John to leave
 (90) the excuse that John had left

という名詞句から、次の規則で導き出される。

$[Det\ N\ Cmp]_{NP}\ be\ [\Delta]_{Pred}$

すなわち “unspecified predicate Δ ” を NP 内の Cmp で置換するのである。 (80) の文を分析すれば、 [2 図] のようになる。

[2 図]



Δ を *for dogs* で置きかえると (80) の文ができる。この *be* は <copulative> である。

$NP \rightarrow Det\ N\ Cmp$

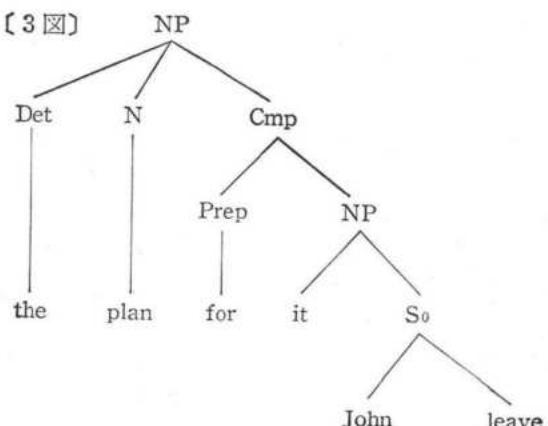
$Cmp \rightarrow \{ \dots \}_{S}$

という一般的に認められた規則により、 Cmp が S のこともあるが、そのときは (90) のように Complementizer

に *that* をとる。また (87) のように *whether* をとる場合もある。(86) の類例は、

- (91) The reason is that the train was late.
 (92) The fact is that I forgot all about it.
 (89) の構造は [3 図] のようであると考えられる。

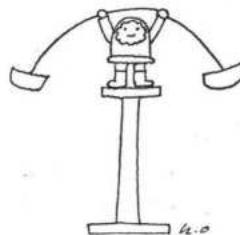
[3 図]



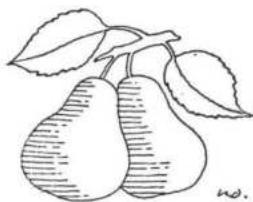
これが変形によって *the plan for [[it] [for John to leave]]NP* となり、 *it* と *for* が一つ消されて *the plan for John to leave* となり、これから (85) の文ができると説明される。これと同型の文に、

- (93) I intended was to help you.
 (94) His desire is to be a novelist like Dickens.
 などがあるが、これらは最初に、
 (95) I intended to help you.
 (96) He desires to be a novelist like Dickens.
 なる文があり、これが名詞化されて
 (97) My intention to help you
 (98) His desire to be a novelist like Dickens
 ができ、さらにこれが変形をうけて (93) (94) の分裂文になったと見られる。
 (99) The dinner was of my aunt's own cooking.
 も同類の分裂文であるが、そのもとにある名詞句は、次の文の名詞化であると解される。すなわち、
 (100) My aunt herself cooked the dinner
 the dinner which my aunt herself cooked
 the dinner of my aunt's own cooking.

(津田塾大学教授)



*“Remarks on Nominalization”, *Readings in English Transformational Grammar*, ed. Jacobs and Rosenbaum (1970).



日・英慣用表現の比較（1）

——日本文学の英訳作品を資料として——

HASEGAWA KIYOSHI
長谷川 潔

それぞれの言語に特有な慣用表現は、ある意味において、その言語を話す国民の文化の索引とも言えるのではないかろうか。いろいろな面で、その国民の生活なり文化なりの影響を受け、その国民の発想法を明瞭に物語るのが慣用表現だからである。その国の国民性なり、国民生活の特徴なりを顕著に示しているのが慣用表現であるとするならば、それらの表現は、他の国の言葉にもっとも翻訳しにくいものであると断定しても、まちがいではあるまい。そこで、日本文学の英訳作品の中から、日本語特有の慣用表現を選びだし、それがどのように英訳されているかを検討し、日本語・英語の発想上、表現上の相違点、類似点などを比較してみることにした。

比喩性に富み、陰影のこまやかな慣用表現を分類することは困難であるが、便宜上次のような項目に分けてみた。

- I. 身体の部分を使った表現
- II. 色を使った表現
- III. 動物を使った表現
- IV. 比喩・諺の入った表現

以下、項目ごとに例をあげながら、見ていくことにする。

I : 身体の部分を使った表現

『日本人とユダヤ人』の著者、イザヤ・ベンダソンは、「日本語は完璧」だと言い、その理由として、日本語の語いが実に豊富多彩で、一つ一つの意味の範囲が非常に狭いことをあげている（p. 179）。しかし、完璧とはほめすぎて、生活・風俗・習慣によって、語いの量が英語に比べて貧弱な場合もある。

金田一春彦氏も述べているように、一般に身体部位のちがいに対して、日本人はきわめて大まかである。極端なのは、hand（手）もarm（腕）も、日本人はテといい、foot（足）もleg（脚）も日本人はアシということである。（『日本語』p. 134）

たしかに、日本語の「手」ということばには、腕の部分も含まれているが、英語の場合には、hand, arm とは

っきり区別して使う。

井伏鱒二の『日本休診』の英訳、*No Consultation Today* (Translated by E. G. Seidensticker) を読んでみると、日英両語のこの違いがさらにはっきりする。

【例 1】Her **hands** hanging limply at her sides, she looked as if she were about to weep, as if she thought the whole world her enemy.

（いまにも泣き出しそうな顔をして、両手をだらんと垂れ、人を見る目が恨めしげである。）

【例 2】From before it had begun, she had been sitting with her elbows on her knees and head in her arms.

（手術の始まる前から、このおかみさんは両手で頭を抱え、その肘を膝についていた。）

【例 3】She bit me here on the **wrist**.

（私の腕に噛みついてきました。）

これは、文の前後関係から、腕が手首の部分だとわかっている。

このように、hand, arm, wrist というような簡単な区別さえ、日本語ではなされていないのにかかわらず、身体の部分を使った慣用表現は驚くほど多い。「手」を使った表現を例にとってみても、手術、手軽、手を焼く、手を借す、手伝う、手を尽くす、手がけた、手のつけられない、手おくれ、手にとるような、などがすぐに頭に浮かんでくる。

本稿では、身体の部分を使った日本語の慣用表現を、次の項目に分類して例をあげてみることにする。

A：頭（髪を含む）、B：顔（面を含む）、C：目（眉を含む）、D：耳・鼻、E：口（舌・歯を含む）、F：首、G：肩、H：手（腕・肘を含む）、I：胸、J：心臓（その他身体の内部を表わす語句）、K：腹、L：尻、M：足（膝・脚を含む）、N：身体全体（肌を含む）

I-A：頭

「頭」という語を使った英語のイディオムでは、put

one's head together (額を集めて相談する) / eat one's head off (大食する) / over one's head (むずかしすぎてわからない)など数多くあるが、「頭」を使った日本語の慣用表現を、そのまま英語の head で訳すことができる場合は少ないようである。

[例 4] When they asked if the man was Sasuke she denied it indignantly.

(…佐助かといえば何であのよな丁稚風情にと頭から否定した。『春琴抄』谷崎)

英語では「怒って否定した」と解釈して記している。これでもよいと思うが, denied it out of hand とする方が、原文に近くなるかもしれない。

[例 5] But since clumsy flattery only annoyed Shunkin it is not at all certain that she was responding to the influence of others.

(但し下手におだてるとツムジを曲げる春琴であるから、必ずしも周囲の仕向けに乗せられたのではないかも知れぬ…*Ibid.*)

「つむじを曲げる」を annoy (いらいらさせる) と訳しているが、原文の意味をよくくみとっているように見える。和英辞書には, get cranky; become perverse などが記載されているが、この文脈では使えない。Annoyの方がここでは適訳であろう。

[例 6] Thus he joined Shunkin in wholehearted denial. The matter seemed as far from a solution as ever.

(春琴に口を合わせて徹頭徹尾否認するのでいよいよ埒があかなくなった。*Ibid.*)

和英辞書には, from beginning to end; from start to finish, thoroughlyなどの訳が見られるが, wholehearted denial の方が、原作の気持をよく伝えている。

[例 7] When he happened to violate one of these rules, she upbraided him relentlessly for his rudeness, and would not easily accept his apologies, however abject.

(偶々それに悖ることがあれば平身低頭して詫まっても容易に赦さず執拗にその無礼を責めた。*Ibid.*)

「どんなに身を卑下してわびても」と、平身低頭を精神的な意味にとらえて訳している。和英辞書では, beg another's pardon on one's knees とか bow to the ground のように、肉体的な姿勢で表現しているが、head という単語は使われていない。

[例 8] I have no intention of behaving like a saint, either.

(そのまま行ないます氣は毛頭ございません。『獵

銃』井上靖)

ここは、I have not the slightest intention of …とする方が、「毛頭ない」の意味がよくなると思われる。

[例 9] About two months later, when I had forgotten about the incident, I received a sealed letter from one Misugi Jōsuké, a complete stranger to me.

(そしてこの事が私の念頭から全く忘れ去られて終った二箇月程経ったある日、三杉穂介と言う全くの未知の人物から一通の封書が送られて來たのであった。 *Ibid.*)

ここでは、「念頭から全く」という表現は完全に省略されて英訳されている。

[例 10] You come across my mind.

(あなたのことが頭に浮かんだのです。『愛と死』武者小路)

この例にも示されているように、知性・理知・記憶などを表わすのに、日本語では「頭」をよく使うが、英語ではしばしば mind と訳される。「頭の回転が早い(速い)」は He has a quick (slow) mind. となるし、「頭に入れておきなさい」なども、Keep this in mind. となる。「念頭におく」の念頭なども mind で表わすことができる。

このほか「頭」を含む日本語の慣用表現としては、『英語にならない日本語』(最所フミ、研究社)にも、次のような例が記載されている。

[例 11] Trading with China was once strong but it has reached the ceiling and has nowhere to go but down.

(対中貿易もひところは盛んだったが、もう頭打ちの状況を呈している。)

[例 12] I am so obligated to him that I shall never be able to be his social equal. (彼にはとても義理があるので、決して頭が上がりません。)

松本亨氏は「頭があがらない」を I can't hold up my head before him. と訳しているが(『これを英語で何というか』英友社), 少し、日本語のニューアンスとちがうのではなかろうか。

[例 13] What we need is to reorient ourselves psychologically to absorb new ideas.

(新しい考えを吸収するために頭の切りかえが必要だ。)

俗語的なくだけた表現では「彼には頭にきた」などがあるが、これにぴったりするのは、I blew my top because of him. (=He makes me angry.) であろう。「酒に酔って頭にくる」は、Whisky went to my head. で、Cole Porter のミュージカルにあるセリフ,

You go to my head like a sip of Burgundy Wine.
は、When I'm near you, I feel just like intoxicated.
の意味で用いられている。

以上の例で、「頭」を含んだ日本語の慣用表現を英訳する場合に、head という単語を使うことは、きわめて少ないことがおわかりになったと思う。

I-B: 顔(面)

川端康成の『千羽鶴』には、登場人物の心理的な気持を表すのに「顔」という表現がしばしば使われている。

[例 14] There was compassion in her eyes.

(いたましいという顔をしている。『千羽鶴』川端)

[例 15] The girl did not return his gaze.

(まともに顔は合わせられなかった。Ibid.)

[例 16] You can pretend that nothing is wrong.

(平気な顔でいらっしゃればいいわ。Ibid.)

[例 17] I don't know how to face you.

(合わす顔がございません。Ibid.)

前後の脈絡や内容にしたがって、例文の 14, 15 では、「顔」が「目」または「視線」の意味で訳されている。

[例 18] She studied Kikuji's expression.

(…顔色をうかがいながら… Ibid.)

[例 19] Her face was expressionless.

(何も顔色に出なかった。Ibid.)

[例 20] He struggled to control himself.

(顔色をかえようとつとめた。Ibid.)

[例 21] She looked into the girls face.

(令嬢の顔色をうかがった。Ibid.)

[例 22] With one glance at her face, he understood the situation.

(顔色でそれとさっした。『春琴抄』谷崎)

心理的な表情を示す「顔色」は、英語ではふつう expression と訳されることが多い。例文 21, 22 では face が使われているが、動詞の look into や understand を使うことによって、肉体的な「顔」よりも、心情的な意味での「顔」であることがわかる。

「面」を使った慣用表現では、『春琴抄』に次のような例があった。

[例 23] Shunkin was the sort of person whose bad temper is reserved for home.

(彼女は所謂内面の悪い方であった。Ibid.)

[例 24] Day after day, the bewildered Ritaro found himself working till the sweat ran and he had to gasp for breath.

(利太郎は面食って毎日三斗の汗を流しふうふういい出した。Ibid.)

「内面が悪い」とか「外がいい」という慣用表現は、日本人ならば誰でも知っている言い方だと思うが、筆者が調査した範囲では、この英訳は和英辞書には見当らなかった。「面喰う」は、be confused, be confounded, be at a loss などがあるが、ここでは、bewildered と形容詞表現にする方が良いようにおもえる。

日本語でよく使われる「面目」のでてくる表現を 2 つばかりあげてみよう。

[例 25] She might as well have slapped me in face.

(面目を踏みつぶされました。『千羽鶴』川端)

[例 26] My standing as an educator was gone.

(教育家としてのわしの面目はまる潰れだった。『比良のシャクナゲ』井上靖)

「顔」に関する表現で、『英語にならない日本語』に記載されているのは、次のものである。

[例 27] He does not look happy.

(彼は浮かない顔をしている。)

[例 28] His manners would scandalize the wildest libertine.

(彼の無作法ときたら、したたかな放蕩者さえも顔負けだ。)

「顔」を含む口語表現には、以上のはか「顔がたたない」→I'll lose face / 「顔を立てる」→I must save (his) face / 「親の顔に泥を塗る」→He disgraced his father などがある。

「顔に泥を塗る」と同じような「顔をつぶされた」は、You made my name mud. (『これを英語で何といふ』) でも誤りではないが、昭和女子大の J.C. Cravens 氏によれば、現実にはあまり用いられていないし、古めかしい表現とのことである。少し固苦しい訳になるが、

You (He, She) humiliated me.

You put me in a very humiliating position.
と訳すことができる。

「顔を出す」は、show one's face (head) が辞書に熟語として記載され、I must show my face there tonight.などの例文もあるが、Cravens 氏によれば、"He is obliged to put an appearance, but he really doesn't like to go there" のような意味にとれるそうだ。むしろ、I have to go (visit) there tonight. の方が一般的な言い方かも知れない。また「ちょっと顔を出しましょう」ならば、I'll be there tonight. と言うこともできる。

「何食わぬ顔で」→with an innocent air / 「大きな顔を

する」→look proud / 「知らぬ顔する」→feign ignorance / 「顔を売る」→gain popularity / 「顔にかかわる」→concern one's honor などは、日本語の意味は伝えているが、口語的なニューアンスが消えてしまうように感じられる。

「顔を貸す」は、『本日休診』に次のように意味をくみとて訳している例があった。

[例 29] There's something you might help me with.

(ちょっと顔を貸してもらいたい。)

I-C: 目(眉を含む)

日本語にも英語にも、「目」には肉体的な目、または視力の意味のほかに、「注意力」→keep an eye on ~ / 「見地」→in the eyes of ~ / 「眼識」→have an eye for ~などの意味がある。日本語には「目」を使った慣用表現が多いが、英語に訳される場合に、eyeという単語が使われることは少ない。

[例 30] The patients and their families will be placed in insufferable difficulties.

(患者と家族は目もあてられぬ苦境にさまようことになる。『天声人語』第12集)

「耐えがたい苦境」と意味をくんで訳してある。「目もあてられない」には、be too miserable to look at ~の訳もあるが、ここでは insufferableの方が適訳。

[例 31] Being slow-moving and obstacles to traffic, the "ding-a-ring streetcars" were the targets of glaring looks by drivers of other vehicles.

(のろく、交通の障害になると、ドライバーから白い眼で見られたチンチン電車だが…『天声人語』Vol. 7)

「白い眼」のところを、…were looked at with contemptと訳せなくもないが、were glared at by…の方がよいと思う。

[例 32] Shunkin's gravestone appeared to be about six feet high, and Shunkin's less than four.

(目分量で測ったところでは、春琴女の墓石は高さ約6尺、検査のは4尺に足らぬ程であろうか。『春琴抄』谷崎)

「目分量で」という副詞句が appearという判断を示す動詞によって巧みに訳出されている。和英辞書にある「目分量」→eye-measurement / 「目分量で」at a guess; by guessは、ここで使うと、英語らしくない英語になってしまふであろう。

[例 33] Now, Shunkin had been more than a little spoiled by her pampered up bringing, but as a child she was so gay and charming and vivacious. so

considerate to those who served her, that she got along very well with people.

(春琴女は甘やかされて育ったために驕慢なところはあったけれども言語動作が愛嬌に富み目下の者への思いやりが深く加うるに至って花やかな陽気な性質であったから、あたりもよく…*Ibid.*)

「目下」も和英辞書にしたがえば、considerate (kind) to her inferiors (subordinate)となるが、Seidensticker氏の訳の方がすぐれている。

[例 34] However, Ritaro began telling everyone that their stern teacher had a weakness for him; and he showed particular scorn for Sasuke, refusing to accept his instruction in Shunkin's place.

(然るに流石のお師匠さんも己には一目置いているなどといい触らし殊に佐助を軽蔑して彼の代稽古を嫌い…*Ibid.*)

[例 35] The head clerk summoned him, scolded him severely, warning him never to do such a thing again and took away his samisen.

(一番番頭の前に呼びつけられ大眼玉を喰った上に以後は断じて罷りならぬと三味線を没収された…*Ibid.*)

[例 36] But Ritaro saw through his trick, and called out to Shunkin in a thick, insinuating voice: "Madam, Sasuke won't drink unless you say it's all right.

(飲む真似をして胡麻化しているのを利太郎が眼敏く見つけ、お師匠はん、お師匠はんのお許しが出な佐助どん飲みやはれしまへん…*Ibid.*)

[例 37] She saw him immediately.

(目ざとく見つける。『千羽鶴』川端)

同じ「目ざとく」であっても、内容にしたがって、例36では「看破する」、「見通す」の意味がある see throughを用い、例37では「人を見つける」の意味にとって訳してある。

[例 38] As long as I live you shall never be short of money.

(私の目の黒いうちは、おまえには金の不自由はさせない。『伊豆の踊子』川端)

[例 39] The older woman arched her eyebrows...

(四十女が呆れ果てたという風に眉をひそめ…*Ibid.*)

英語では「呆れ果てたという風に」が省略されてしまっているが、「眉をひそめる」表情は日本人も、英米人も同じ心情を示すように思われる。

[例 40] As I started reading the letter, I recalled my half-forgotten prose poem.

(これに最初目を走らせた時、忘れていた散文詩『獵銃』の事が思い出され…『獵銃』井上靖)

【例 41】 Retiring and taciturn though she was, he loved her.

(無口で目立たない女ではあったが、素勲はその女を愛した。『洪水』井上靖)

【例 42】 Incidentally, it seems to have been just after I received the letters that you **caught sight of** me in Izu.

(なお、伊豆で私の姿がお目にとまつたのは、私がこの三本の手紙を入手した直後のことかと思われる。『獵銃』井上靖)

次の例は、日本語と英語の慣用表現がほとんど一致している数少ないものの一つである。

【例 43】 She won't **take her eyes off** me.

(あの子が目を放しません。『千羽鶴』川端)

以上のほかに、『英語にならない日本語』の中で次の例が目にとまつた。

(p. 30 よりつづき)

不足を補うのに英国人をもってしようとしている。

逆にインドネシアでは、独立後20年近くになって、やっと国家意識が浸透はじめたらしく、外国人教師をけむたがる傾向が生じたように見受けられた。前述のように充分資格をもった自国人が要所要所にいるので、理論面の指導には米英人の助けを求める余地が少ないので、やはり音声面の指導には native speaker の助力が必要と思われた。これらのかねあいが今後の問題であろう。

5. 教育効果 アラブ3国の一では小学校5年、他はすべて中学1年から高校3年を通じて英語教育が行なわれている。授業は1週間5時間から10時間までの間であった。大学でも、日本で言う一般教養英語から専攻英語まであることはもちろんである。つまり量的には日本と大体同じくらいの英語教育が行なわれている。しかし例外を除けば、学生の motivation の不足、教材の不備、教師の英語力不足など、御多聞にもれない悪条件がそろっている。従って英語教育の効果は、アラブ諸国もインドネシアも、あまりあがっていない。ここ10年余の間に25か国での外国語としての英語教育を見てしみじみ感じることは、数年前にどなたかが言われた「外国语教育に関する限り後進国でない国はない」ということである。これはもちろん日本にも適用されることであるが、教育施設・教材・教員養成機構など、日本は恵まれた条件を持っていると言わざるを得ない。

(ミシガン州立大学英語研究所長)

【例 44】 They say that firm is **on the skids**.

(あの会社は落ち目だそうだ。)

【例 45】 My work (or project) has **begun to take on a shape**.

(仕事の目鼻がついてきた。)

さらに限定して言えば、**take on a definite shape / take on distinct features** という言い方もある。

【例 46】 His is a case of **losing his moral principles from greed**.

(あの男は欲に目がくらんだ例だ。)

be overcome by greed; be dazzled というような表現でもよい。

【例 47】 It's not something we should need to **make fuss about or find faults with**, so let it go.

(目くじら立てるほどのことでもない。)

(次号へづく)

(お茶の水女子大学助教授)

Here are some solutions to the FUN WITH SPELLING puzzle on page 29.

new	new	new
hew	now	few
hem	nod	fed
him	hod	bed
aim	hid	bid
aid	aid	aid
add	add	add
odd	odd	odd
old	old	old

Solution to the CROSSWORD PUZZLE on page 54.



現代英語の慣用と辞書

—the question of whether の場合—

TOYAMA TOSHIO

外山 敏雄

はじめに

言語は人間とともに生きているのであり、英語もまた、人間の精神を映しつつ進化を続けている。そこに、現代の合理的精神が反映されてゆくのも必然的な成りゆきであろう。

筆者は、現代英語の動向に強く関心をひかれ、数年来さやかな調査を試みてきた。調査を進める中でその流れの方向を理論的に整理してゆきたい、という考えがいつも筆者の念頭を離れないのであるが、流れの根底には意味を明確化し形式を単純化しようとする要求があるようと思われる。

たしかに、英語は現代社会の動きのテンポの速さを反映して、この30~40年間にめざましい変化を見せ、大きく変貌しつつある。そのような動きの中にあって、辞書の担うべき役割は、何よりも先ず「慣用の姿を映す鏡」でなければならないということであろう。今日、はたして辞書や語法辞典は現代英語の姿をありのままに映し出し、現代英語の慣用の実態を正しく記述しているのであろうか。

本稿では、「the question」と同格関係になる whether-clause の場合について、現代英語の慣用と辞書・語法辞典等の記述を比較してみたい。

I

はじめに辞書・語法辞典の記述を見てゆくことにしたい。語法辞典では、H. W. Fowler の *MEU* は「the question as to whether」の形をとりあげて、次のように述べている。

The popular favourites: *The question as to whether*, *The doubt as to whether*, may almost be included among the ungrammatical developments, since the doubt or question demands an indirect question in simple apposition (*The question whether*, *The doubt whether*);¹⁾ また彼は、「AS TO WHETHER」の‘combination’について、

This is a form that is seldom necessary, and should be reserved for sentences in which it is really difficult to find a substitute.²⁾

と述べ、the question as to whether...の用例3つ（いずれも新聞英語）を槍玉にあげている。この語法についても Fowler はあくまでも‘grammatical moralizer’の立場に立って美的価値を説き、the question of whether...の形そのものには直接ふれていないのであるが、*MEU* の増補版を意図して *Usage and Abusage* を世に出した E. Partridge は、

‘The whole question of whether we like it is ignored’ is redundant for ‘the...question whether’ or ‘the question of our liking it’.³⁾

と前置詞‘of’は‘redundant’であり、ofをつけないのが正用法であるとするのである。また、A. S. Hornby はこの語法について

The preposition is usually omitted after the noun *question* and before a dependent question introduced by *whether*.⁴⁾ (下線筆者)

と述べ次の3つの例をあげている。

*We must consider the question whether we can afford such huge sums for armaments.

*I sometimes ask myself the question whether it was worth the effort.

*The question whether it was worth it sometimes comes to my mind.

the question of whether... という‘combination’では、question のあとと、whether-clause の前と条件が二重に重なるから Hornby の説明が正しければ、この語法で of が入ることはまれだということになるであろう。

しかし、アメリカの語法辞典では、なぜか、具体的に

1) *Modern English Usage*, 2nd ed., 1965, p. 37 なお同書の第1版も同文である (p. 32).

2) *The King's English*, 1906, p. 344.

3) *The Concise Usage and Abusage*, 1954, p. 210 なお同書は、著者によれば、前著 *Usage and Abusage* を‘abridge’, ‘simplify’し、且つ資料を‘up to date’にしたものである。

4) *A Guide to Patterns and Usage in English*, 1956, pp. 134—135.

この語法にふれているものは見られないようである。⁵⁾

次に辞書の場合はどうであろうか。辞書についても比較的最近のもので主要なものはもらさず当ってみた。イギリスの辞書では、*POD*⁵⁾, *COD*⁵⁾ともに the question whether... と記述している。そのうち *COD* は, 'as to' が不必要に挿入される ('needlessly inserted') ことがしばしばある, と述べている。また *ALD* は

A clause introduced by whether may be used in apposition to a noun. (s.v. *whether*)

としている。

アメリカの辞書では、*Webster's Third New International Dictionary* (1961) の whether の項に 1 つ, question の項に 3 つ合わせて 4 例があげられている。The question whether... 2 にたいして the question of whether..., the question as to whether... それぞれ 1 つである。

Webster 以外のアメリカの辞書にはこの語法についての記述は見あたらないようである。

以上、英米のものを見てきたが、わが国のものでは、文法辞典・語法辞典の 4 種がこの語法をとりあげている。そのうち 3 種が、前置詞(句)を用いることは 'ungrammatical' であり, the question whether... すべきである, と 'grammatical moralizer' の立場をとっており, その記述は Fowler (Partridge) をほとんどそのまま下敷にしているにすぎない。残る 1 種は, この語法で前置詞が用いられるることは少ない, としている。

最近の主要な英和辞典でこの語法の用例が見られるのは 2 種にすぎない。そのうち 1 種は the question of whether... の用例を, 他の 1 種は the question whether... の用例を, それぞれ, 1 つあげているだけである。

以上、辞書・語法辞典の記述をしらべてきたが, 要するに, 今日この語法について辞書・語法辞典の多くは the question whether... と記述している, といえるであろう。

II

では, 今日の英語におけるこの語法の慣用の現実はどうであろうか。この語法の現われる頻度は非常に低く, 筆者の調査から得られたのは英・米合わせて 19 例であった。

まずアメリカ英語から調査の結果をあげてみたい。調査の資料としたのは, *The New Yorker* と *Reader's*

5) N. Nicholson, *American English Usage*, 1957 に記述があるが Fowler をそのまま下敷にしており, 特にとりあげる必要はないと思われる。

Digest であり両誌のそれぞれ 1 カ年分 (1970 年) を用いたが, いずれも the question of whether... の形をとっている。

- 1) the question of whether...

*There is, for instance, the question of whether or not coyotes kill calves.—*The New Yorker*, Jun. 13, '70.

*Still, the question of whether the waterway has a commercial future is in doubt.—*Reader's Digest*, May, '70.

このほか同じ形が *The New Yorker*, May, 16, May 23, Sept. 12 各号にそれぞれ 1 例ずつ見られた。

- 2) a question of whether...

*It's a question of how many dishes the busboys drop and of whether or not the microphones work.—*The New Yorker*, Dec. 26, '70.

又, 語学書では A. H. Marckwardt の *Linguistics and the Teaching of English*, 1966 から 3 つの用例が得られた。

*Finally there would be the question of whether the poet remakes language by... (p. 105)

*By making this a question of whether or not the expression was permitted by authority,... (p. 84)

*This poses the question as to whether there might be substandard consultative, substandard casual, and so on,... (p. 44)

結局, アメリカ英語では 9 例が得られたが the question whether... の形は皆無であり, the question as to whether... が 1 例見られたほかはすべて the question of whether... の形をとっている。

次にイギリス英語については筆者のおかれた環境から雑誌を使用することができないので, 止むなく単行本だけによった。①出来るだけ最近のものを用いること。②語学・文学・評論等バラエティーをもたせる。この 2 つの点を資料の選択にあたって特に留意して調査をおこなってみた。以下に得られた用例を分類してあげてみよう。

- 1) the question of whether...

*Unfortunately it is not the status of *N₁* but of *N₂* that is in doubt, and the question of whether or not *N₂* is the object of the verb will depend upon transformational relations.

—F. R. Palmer, *A Linguistic Study of the English Verb*, 1965, p. 67.

- 2) a question of whether...

*This isn't just a question of whether or not you'd

rather live under the Communists than kill someone; it's a question of whether you'd rather kill someone than see the world devastated by H-bombs.

—Jeremy Brooks, *Henry's War*, 1964, p. 139.

3) the question as to whether...

*Refreshingly, he dismisses the question as to whether *Paradise Lost* is an epic or not at the outset—but go on to contradict himself by analysing it according to the rules of the epic, calling for a plot of which the action is one, entire, and great.

—George Watson, *The Literary Critics*, 1962, p. 71.

*In June 1956 the House of Lords spent much time discussing the weighty question as to whether 'a' or 'an' is the article required before this noun (hotel).

—Brian Foster, *The Changing English Language*, 1970, p. 260.

なお、B. Foster, p. 163 に同じ形の用例がもう 1 つ見られた。

4) the question whether...

*The question, therefore, whether didn't use to is substandard has now become an open one.

—Simeon Potter, *Changing English*, 1969, p. 130.

*Richardson's novels provoked a few pamphlets devoted to the question whether they were calculated to corrupt public morals.

—George Watson, *The Literary Critics*, p. 31.

なお、G. Watson に the question whether... の形がさらに 2 回 (pp. 31, 37) 使われていた。

以上 10 例のうち the question whether... は 4 例であるのにたいして前置詞(句)使用のものは the question of whether..., the question as to whether... ともに 3 例ずつ、計 6 例である。しかし、2) 3) 4) 3 つの形式について、同じ著者が同一形式を 2~3 回使っているので、この語法の使用が見られる 6 種の単行本のうち the question whether... の使用が見られるのは 2 種にすぎない。このように、イギリス英語において、慣用の現実は前置詞(句)使用に傾いていると思われる。

以上がこの語法について筆者の調査から得られた結果である。この調査では、アメリカ英語には the question whether... の用例が皆無であるのにたいしてイギリス

英語にはそのいくつかの用例が見られるから、英・米で多少の差があるようだと言わなければならないであろう。しかしいギリス英語においても前置詞(句)を使用する形の方が多いのはたしかであるから、全体として、今日では the question of (or as to) whether... の形を用いる傾向が強い、ということができるであろう。

もちろん、筆者の調査で得られた用例の数は限られているから、その意味で“1 つの”調査にとどまるといわねばならないかもしれないが、筆者が、今回の調査で得られた結果を現代英語の慣用であると判断する 1 つの理由がある。すなわち、この傾向が単に whether-clause の場合のみにとどまらず dependent question 全般に見られることであり、この語法の調査中にも、how..., who..., what... などの疑問節が the question に直接続く形よりも of (又は as to) が介在する場合の方がはるかに多く見受けられた。

*He knows that the happiness of the common man is very much bound up with the question of who has power at the top.

—John Wain, *The Living World of Shakespeare*, 1964, p. 36.

*In each of these instances there arises the question of how much of what is new should be put into the subject as it is presented in the secondary schools.

—A. H. Marckwardt, *Linguistics and the Teaching of English*, 1966, p. 4.

ここに、われわれは現代英語に現に進行している分析化傾向の 1 つの断面を見る能够である。

む　す　び

以上見てきたように、この語法についても現代英語の慣用の実態は、いまだ辞書・語法辞典の記述に反映されるにいたらず、両者間に大きなズレが見られる。この語法について、辞書・語法辞典の記述に目立つのは正邪善悪という価値判断である。言語は生きているのである。'grammatical moralizer' の立場に立っていくら声を大にして「美的価値」を説いても、言語の流れをとどめることはできないであろうし、そのような行き方が正しくないことは、いまさら改めて言う必要もないことであろう。辞書・語法辞典は慣用の現実の姿を正しく記述するものでなければならない。

もちろん、正しい言語観に立って長い年月をかけて編集されたものであっても、その記述が慣用の現実とズレ (p. 58 へつづく)

Wh-疑問文の イントネーション

WATANABE KAZUYUKI
渡辺 和 幸

I. 緒論

What, who, which, why, how 等で始まる疑問文(略して WH-Q)は一般に下降調をとると言われているが、実際には、種々様々なイントネーションの型をとる。一寸注意深く聞いてみれば、どのような種類の文であろうと、教則本に書いてあるような、ある決まったパターンだけではないということがわかる。一般疑問文であっても陳述文であっても、どんな文についても程度の差こそあれ、同じことが言われるわけである。

この小論は、英米のレコード、映画、テレビ及びラジオドラマを中心に、比較的自然な状態でしゃべっているものから、WH-Q を集め、統計的に分析し、その実態を探ろうとするものである。使用した資料は主としてドラマ、映画であるから、多少とも artificial であるという欠陥は免れないが、現在利用できる最適の材料であり、大体の傾向がつかめるものと思う。ただ同じ英國英語(BE と略す)であっても、米国英語(AE)であっても、資料によってかなり違った結果が出てくることがあり、なるべく多くの資料の収集が必要であることは言を待たない。調査の段階で得た WH-Q の総数は1,955で、それを筆者の基準によって分析したものである。

WH-Q のイントネーションが下降調であるとか上昇調であるとか言った場合、少なくとも次の2点は注意しなくてはならない。その1つは、WH-Q そのものが1つの tone group であるとは限らないということである。文全体が上昇調で終わっているからと言って、すぐ上昇調の WH-Q と決めてしまっていいのかどうか。副詞節がくっついて上昇調になっていることもある。第2

に、イントネーションだけが常にその文の意味とか含蓄の唯一の決定要素になるとは限らないということである。表情、情況に加えて、声の大きさ、強さ、速さ、声の出し方等が微妙にからみ合って作用するのであろう。従って厳密にはこれらの要素の記述も必要なわけであるが、ここでは主として、声のピッチと強勢だけに限定して論を進めるものとする。また下降調とか上昇調とか言っても、どの語(または音節)からピッチの変化が起るかということも当然考慮にいれないといけないので、単に上昇調の WH-Q といっても種々なる用法があるわけである。それにピッチの変化の中が問題になることもある。

「使用した資料」

BE のもの

The Same River Twice (ST と略す) ...BBC の推理ドラマシリーズ。

The Speech-Print Case (SP)...BBC の推理ドラマ。

The Importance of Being Earnest by O. Wilde, (IE) ...Angel Records.

The Cocktail Party by T. S. Eliot, (CP)...1950年 New York 公演レコード。

She Stoops to Conquer by O. Goldsmith, (SC)...Spoken Arts.

Saint Joan by B. Shaw, (SJ)...Argo.

AE のもの

Death of a Salesman by A. Miller, (D)...Decca.

Marjorie Morningstar (M)...映画 [大部分を利用]。

Beyond the Horizon by E. O'Neil, (B)...Act Iのみ。

Incident at Vichy by A. Miller, (I)...NHK FM English Hour 放送。

The Glass Menagerie by T. Williams, (G)...NHK TV 放送. British Rediffusion Films 制作。

The Subject Was Roses by T. Gilroy, (S)...NHK English Hour 放送。

Picnic by W. Inge, (P)...NHK English Hour 放送 [Act II の中途まで]。

純粹に BE とも、AE とも言えないもの。

Beloved Infidel...米映画 (英國系の Debora Kerr が主演)

Waiting for Godot by S. Beckett...NHK English Hour 放送 (アイルランド系?)。

以上の他、2, 3 放送劇を参考にしたが統計に加えていない。

イントネーションの記述は Tonetic Stress-Marks を修正した下記のものを使用した。

第1表 Nucleus の Tone

Tone	Fall	Down-glide	Rise-fall	Level	Rise	Fall-rise	Repetition Q.	計
Same River	261	0	0	1	38	1	5	306
Speech-print	39	0	0	1	9	0	2	51
Importance	68	0	2	2	7	0	2	81
Cocktail Party	91	0	0	1	7	1	5	105
She Stoops	58	2	1	0	4	1	1	67
Saint Joan	157	0	1	3	17	0	2	180
小計	674	2	4	8	82	3	17	790
Death of Salesman	170	10	0	4	15	0	0	199
Marjorie	133	0	0	0	6	1	2	142
Beyond Horizon	18	1	0	0	1	0	0	20
Incident	85	6	3	3	4	1	1	103
Glass Menagerie	116	2	0	2	11	0	8	139
Subject Roses	151	2	0	5	14	1	7	180
Picnic	49	2	0	2	2	0	1	56
小計	722	23	3	16	53	3	19	839
Waiting for Godot	195	12	1	5	9	4	13	239
Beloved	75	0	0	1	10	0	1	87
合計	1666	37	8	30	154	10	50	1955

(B)
(E)(A)
(E)

~m (high fall), ˘m (low fall), ˘m (downglide; Trager-Smith 式で level 3 から 2 までの部分下降), ˘m (high level), ˘m (mid level; 大体 level 2), ˘m (low level), ˘m (high rise), ˘m (low rise), ˘m (high fall-rise), ˘m (low fall-rise), ˘m (rise-fall), ˘m (上昇が続いていることを示す partial stress), ˘m のように 2 重になつたのは emphatic.

これらの記号は、ピッチと強勢を同時に 1 つの記号で表わしたもので、記入が簡単な割にかなり精密に表記できる特色を持つ。

詳論に入る前に WH-Q のイントネーションの型を概観してみよう。第 1 表によると、部分下降調と上昇下降調を加えれば 88% 近くになり、上昇調は 2~3% の繰り返し疑問(はっきり聞こえなかつとか、信じられないためもう一度繰り返して欲しい等の意味を持つ WH-Q)

を除いて 7% 弱である。下降上昇調を加えても 8.4% にすぎない。圧倒的に下降調が多いわけであるが、平坦調が 30 例 (1.6%) あり、平坦調も nucleus¹⁾ になり得る証拠とも解釈できる。

その他、中途半端な下降調といつてもよい downglide が 37 例聞かれ、それも AE に集中していることは注目に値する。下降上昇調が 1 つの部分にまとまっているのは 10 例にすぎないが、分離下降上昇調は “rise” に含まれているので相当数ある。筆者は WH-Q については、聞き手に与える印象と意味の点から、分離下降上昇調は上昇調の中に分類しておいた。

1) Tone group 中最後の full stress がきた音節で一般にピッチ変化があるとされる。Halliday の tonic に当たり、一番重要な部分。

II. 下降調

筆者の調査によれば、WH-Q の 85% 強が情報を求める下降調であり、BE でも AE でも似た比率である。しかし、この下降調の WH-Q を今少し詳細に検討すると、必ずしも同じであるとは言えない。

A. イギリス英語の場合

1. 疑問詞が平坦調の Head となるもの

BE では疑問詞が比較的高い平坦調の head (最初の full stress) となり、以後段階的に僅かずつ下降し、nucleus のある音節でそのまま一番下のピッチに急下降する型とそれに nucleus のある下降の起点が、直前の音節より少し高い所にある型が目立つ。O'Connor & Arnold は後者の尻高下降が極く普通で、前者の尻低の「冷淡さ」または敵意を除いた型で、“perfectly brisk and businesslike”²⁾ であると言っている。筆者は、どちらがより普通であるかについては、全体的な統計はとっていないが、Saint Joan では 100 対 36 で尻高下降 (high fall) が多い。他のものでは high fall の割合がもっと多いように思われる。R. Kingdon は low fall が the normal intonation であると述べているが³⁾、これは再検討を要するのではないか。しかし high fall にしろ、low fall にしろ、下降調は極めて普通のバタンであり、中性的で真面目な、そして事務的な質問に適している。

[High fall の例]

'What do you ^mean? (CP) And 'what inter'rupted this 'interesting af^fair? (CP) 'How ^old are you? (IE) 'How do you ^like it? (SJ) 'When did you 'last ^see him? (ST)

[Low fall]

'What is it that you ^want? (CP) And 'who are the 'people you a^muse? (IE) 'What do you ,mean? (SJ) 'Which is Mr ^Marlow? (SC) 'How ^much do you 'owe ,people? (ST) 'Where did your 'mother-in-low ,live (ST)

文頭の疑問詞が high level head となっていて、その上途中に downglide が来るものが、ごく少数ながら聞かれる。

[Downglide が途中有るもの]

2) J. D. O'Connor and G. F. Arnold, *Intonation of Colloquial English* (London: Longmans, 1961), pp. 43-44. V. J. Cook は「low fall は very serious and considered questions である」と言っている。cf. *Active Intonation* (London: Longmans, 1968), p. 67.

3) Harold E. Palmer and F. G. Blandford, revised and rewritten by Roger Kingdon, *A Grammar of Spoken English* (3rd ed.) (Cambridge: Heffer, 1969), p. 26.

'What had you believed were your relations with this ^man? (CP) 'What ^time did you come in? (ST)

次に平坦調がきいている疑問詞でも中位 (level 2) の高さのものもごく僅か聞かれる。

• What is the ^first? (CP) • What really happened to ^Sarah? (ST)

Low level も時に聞かれるが、この場合 head の強勢は弱い。R. Kingdon は low head がきた場合は“petulance”的響きが付加されると言う⁴⁾。

'Why, what could there be about yourself and ^Celia? (CP) But where is ^Cecily? (IE) What do you say now? (SJ)

その他下降調の印象を与えるはするものの、複数の nucleus よりなり、複雑な様相を呈するものがいくらかある。

'Why such ^reckless ex^travagance in one so ^young? (IE) But why/does she call herself ^little Cecily if she is your ,aunt and 'lives at 'Tunbridge ^Wells? (IE) [斜線は pause を示す。] 'What do you think, 'Tony, my dear,/does your 'cousin 'Con/^want any 'jewels, in your ,eyes to 'set off her ^beauty? (SC)

以上の型をすべて含めて、疑問詞が level tone をとる WH-Q の比率は、下降調の中で 82% であるが、head から nucleus まで段階的に下降する型の頻度は、この数字より遙かに低いものになる。

2. 疑問詞に Downglide があるもの

下降調 674 例の内 30 例が疑問詞に部分的下降が聞かれる。前述のように level head と大した差はないが、幾分卓立が感じられる程度である。機能的には、level の場合と同じように考えていい位である。

Now ^who would 'come so ^early? (CP) But ^where/did you de'posit the ^handbag? (IE) Eh, ^why don't you ^move? (SC) ^Which is the way to the ^bridge? (SJ)

3. 疑問詞に Fall があるもの

疑問詞のみの WH-Q は 27 例 (下降調の内 4%) あるが、繰り返し疑問を除いては殆どこの形を使用すると言って差支えない。これにも high と low の 2 種類があるが、high fall が普通のようである。O'Connor & Arnold が述べているように、high fall の方が“lively”

4) R. Kingdon, *The Groundwork of English Intonation* (London: Longmans, 1958), p. 212.

とか "interested" という印象を与える⁵⁾ことは間違いないであろう。

完全な文の形で疑問詞に nucleus がある WH-Q は 60 例 (8.8%) あるが、この形に触れている参考書は少ない。筆者の眼に触れたものとしては、Allen が "Where do you want to go?" を挙げ、「執拗に質問する型で、相手が話題から離れないようにする質問形式だ」と説明しているに過ぎない⁶⁾。しかし実際は、直前に話された語は known information として普通強勢を受けないので、当然興味・関心の的である疑問詞が nucleus になったものと考えられる型が多い。The Cocktail Party に次のようなものがある。

Reilly : ...I propose to introduce you to the other patient.

Edward : What do you mean? Who is this other patient?

一度 Reilly の言葉の中に the other patient という語句が出てきたので、内容的にも疑問詞に nucleus が置かれるようになったと考えるべきであろう。

疑問詞に nucleus が来る他の場合としては、E. T. Anderson の一例から分かるように、対照強調があり、次の例が挙げられている。

"When're you coming back? (why「何故」でなく)⁷⁾

集めたものの中から数例を挙げると、

"What do you think I am? (CP)

But why on earth did you break it off? (IE)

"How is she to know? (SJ)

疑問詞だけでなしに、他にもう 1 つまたはそれ以上の fall が来て nucleus となっている。WH-Q ごく少数あるが、nucleus 以外にもう 1 つまたはそれ以上の prominence を与えたい時に用いられる。

"Edward, who is that dreadful man? (CP)

"Oh, why are you not fighting? (SJ)

4. 疑問詞に Fall-Rise または Rise がある場合

これらはそれぞれ珍らしい例ばかりである。Fall-rise の疑問詞は 1 例だけで、しかも疑問詞だけで 1 つの tone group を形成している。

"Where's your brother Ernest? (IE)

疑問詞に rise があるのは 3 例だけである。2 例のみ挙げると、

5) O'Connor & Arnold, *op. cit.*, p. 42.

6) W. Stannard Allen, *Living English Speech* (London: Longmans, 1960), p. 83.

7) E. T. Anderson, *The Intonation of American English* 「アメリカ英語の音調」安倍勇記、研究社、昭和 33 年、p. 23.

But why/should we talk about Peter? (CP)
Why don't you go? (IE)

R. Kingdon は rise を帯びた WH-Q は petulance に加えて mystification の要素もあると言っている。⁸⁾

5. その他、各種

文尾に呼びかけの語が付加されているために上昇調と似たものがある。

"What does that mean, Johnny? (ST)

"Why, Louise? (ST)

途中に low rise が聞かれるもの。

"What brings you up to town? (IE)

B. アメリカ英語の場合

AEにおいて最も普通の型は、mid-level で始まり、nucleus のある所で高くなつて下降するといった、Trager-Smith 式のいわゆる 2-3-1 のパターンであるが、この型は確かに一番多いようである。しかし厳密には途中で BE と同様 3-2 のピッチ変化を持つ強勢が聞かれることもある。同じ level head の疑問詞でも、high level のものもある。すなわち、BE のものと大体同じ高さと感じられる場合で、high level の多い Picnic を例にとれば、中位のもの 31 例に対し 7 例の割合で存在し、また少ない The Subject Was Roses では 93 対 7 の比率である。

したがって同じ下降調と言っても、一般に典型的と思われている 2-3-1 の型はそれ程多くないのであって、数字で考えれば、AE の WH-Q の総数 839 例の内 level の疑問詞で始まる 456 例 (54%) から途中に downglide のあるもの、high level のもの、それに nucleus か low fall のものを差し引くと、おそらく 40% 以下になり、下降調の WH-Q の中でも半分に満たないであろう。

実際の場においては、情況に応じて種々なる型のイントネーションが用いられているわけである。すなわち、途中に 3-2 の glide がある場合、疑問詞が high level で始まっている場合、nucleus の下降が 2-1 となって low fall のもの、疑問詞自体に 3-2 の glide がある場合、疑問詞が fall を帯びる場合、疑問詞以外にも fall のある場合、nucleus が level 4 の高さになる場合、そしてこれらが複雑に組み合わされていくわけで、Pike の言う通り、"Questions may be found with all intonation curves."⁹⁾ ということになり、あらゆる型の下降調が見られる。

1. 疑問詞が Level Head となるもの

8) Kingdon, *op. cit.*, p. 212.

9) Kenneth L. Pike, *The Intonation of American English* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1965), p. 163.

AE の下降調 WH-Q 722 例の内 63.2% の 456 例がこの型だが、前述のように mid-level と high level に分かれる。Level 1 の level tone はほとんど聞かれない。文頭の level 2 は level 1 と区別しにくいのであろうか。

この型で一番多い典型的と考えられている例を挙げると、

- Why did you come ^back? (S)
 - Who's the •young ^man? (P)
 - How do you •like the ^change in Act Three? (M)
- 中途で 3-2 の downglide がある WH-Q も少ないが、典型的といわれるバタンの文より長いものが多い。すなわち、prominence の問題も多少あるにしても、リズムの関係で強勢が与えられて、軽いピッチ変化が伴ったという感じのことが多い。
- What ^kind of a •woman was ^she? (B) •Why should he •call you a ^silly name like ^that? (G)

Low fall も余り多くはないが、low fall の比較的目立つ *The Subject Was Roses* では疑問詞に level tone のきた 100 例中 low fall は 12 例聞かれる。

•Well •where are we ^going? (S)

Then •what're you •talking about? (D)

High level を帯びるものについては、男女を問わずある程度聞かれるが、AE においては一般に関心の強さを示すと考えていいであろう。

'How many •people become ^writers? (S) 'Who's •Jumping ^Jeeter? (P) Well, 'why ^not? (M)

2. 疑問詞に Downglide があるもの

下降調の WH-Q で BE と最も異なる点は、AE では疑問詞に downglide が来る WH-Q が BE に比べて 4 倍近くもあるということである。WH-Q に限っているわけではないが、「文の冒頭に 3-2 が多い」と指摘している。Pike¹⁰⁾ の言葉を裏書きしているとも言える。128 例

第 2 表 下降調の WH-Q の Head の Tone

Head の Tone	Rise	Level	Downglide	Fall	疑問詞のみ	Fall-rise	計
Same River	0	212	14	22	13	0	261
Speech-print	1	31	1	4	2	0	39
Importance	1	50	4	11	1	1	68
Cocktail Party	1	75	6	9	0	0	91
She Stoops	0	49	3	3	3	0	58
Saint Joan	0	136	2	11	8	0	157
小 計	3	553	30	60	27	1	674
Death of Salesman	0	68	62	32	8	0	170
Marjorie	0	78	24	19	12	0	133
Beyond Horizon	0	10	1	4	3	0	18
Incident	0	67	8	5	5	0	85
Glass Menagerie	0	95	7	5	9	0	116
Subject Rose	0	100	19	14	18	0	151
Picnic	0	38	7	1	3	0	49
小 計	0	456	128	80	58	0	722
Waiting for Godot	0	142	7	15	31	0	195
Beloved	0	65	4	3	3	0	75
合 計	3	1216	169	158	119	1	1666

(B)
E

(A)
E

で下降調の中では 16.3% を占め、AE の 1 つの特色が WH-Q にも見られる。AE では疑問詞も低く発音し勝ちなので、少しでも prominence を与えるためには、high level かこの downglide に頼らねばならないのであろうか。そして事実 downglide に大いに依存していると思われる。

「Who's telling the story? (S) ～What's the matter with you? (S) , Well, where's the enemy vessel? (M) ～How are you going to raise your children? (M)

3. 疑問詞に Fall があるもの

疑問詞が単独で使用されている例は 58 例あり、完全な文か省略文（疑問詞だけのものは除いて）で用いられているのが 80 例ある。BE の場合と同様、疑問詞が単独で使われている場合は、繰返し疑問を除いて、すべて下降調である。文または省略文については疑問詞だけが fall を帯びて nucleus になっているものと、他の語にも fall が来ているものとに分類できるが、意味、用法については BE の場合と同じと考えてよい。

「Why? (S) ～How? (S) ～Why? (M) ～What kind of trouble? (M) ～When does the airplane get off the ground? (M) ～Why did you anger like that? (B) ～What things? (S) ～Why did I ever meet you? (M) ～Who was it that said I was a salesman for Oliver? (D)

4. その他

What about ...? How about ...? のような慣用句においては疑問詞が無強勢になることもある。

What a baut it? (S) How about you? (G) また low level で部分強勢しかないこともある。

～What a bout it? (D)

BE と同じく、呼びかけ語が文尾に来て、上昇調のように聞える WH-Q がある。

～How does it feel to be out of school, Marjorie? (M)

～What do you think I am at, Mother? (G)

～What, Mother? (G)

Nucleus が level 4 からのもの

～Who cares about breakfast? (S)

III. 部分下降調

部分的下降の downglide は前項で指摘したように文中でしばしば聞かれる tone であるが、これが WH-Q

の nucleus として現わされることも少數ながらある。全体としては僅かであるが、主として AE において聞かれ、23 例あり、BE は *She Stoops to Conquer* の中で疑問詞だけの WH-Q 2 例がこれに該当すると思われる。*Waiting for Godot* には 12 例もある。AE にはどの資料にも平均して少しづつ認められる。単独の疑問詞に案外多い。

Pike は「文尾に downglide が聞かれると未完の感じを与えるので、聞き手は、相手がそのまま話を続けるかもしれないと思うだろうし、相手がやめてしまえば、この時点で自分の感情をうまくまとめることができず、むしろ聞き手に文を完結してほしいと思っているのではないかと考えるかもしれない」¹¹⁾ という趣旨のことを述べているが、WH-Q そのものについては直接触れていない。もし今までの所で Pike の意見を適用すれば、「ちゅうちょ」の気持ちということになろう。

直後に呼びかけ語があったり、1 つの答を自分で呈示している場合もかなりあり、未完の響きが感じられるのも当然というわけである。なお、こういう観点から説明できない場合も多く、相手の答えに大して興味を寄せていない質問と解せられる場合もある。特に *Waiting for Godot* で聞かれるものに多い。

IV. 上昇調

WH-Q で普通の下降調に次いで多いのが上昇調であり、興味のある問題を提供するバタンであると言ってよからう。数の上からは BE の 10% 強、AE の 6% 強を占めているに過ぎないが、BE の方が上昇調を使うことが多いというのはここで証明されている。

情報を求める WH-Q の上昇調の表わす意味についていろいろな説明がなされている。疑問詞に level tone の強勢があるものについて、O'Connor & Arnold は情報を得ることだけに興味があるのでなく、聞き手にも関心があることを示し、純粋に親しみのこもった質問であるとしている。それに low fall の与える「厳しさ」も high fall の持つ「驚き」も含まないので、そういう目的を持った WH-Q では極めて普通のバタンであると言う。¹²⁾

次に代表的な含みは「ていねいさ」であるが、M.A.K. Halliday は「こんな質問をしていいですか」という許可を伴った疑問文であると考えている。¹³⁾ これと関係の

11) *Ibid.*, p. 50.

12) O'Connor & Arnold, *op. cit.*, pp. 54-55.

13) M. A. K. Halliday, *Intonation and Grammar in British English* (The Hague: Mouton, 1967), p. 43. M. A. K. Halliday, *A Course in Spoken English: Intonation* (London: Oxford University Press, 1970), p. 22.

あるのが親しみのこもった態度で相手に安心感を与えた
り、励ましたりする場合で、A. M. Bullard は、新しく
学校へ入って来た恥しがり屋の子供に名前を尋ねたりす
るのに適しているとしている。V. J. Cook は“確信のあ
る、人を安心させる態度だとし、K. Croft は「関心」、
「同情」、「親しみ」の他に「軽い驚き」を挙げ、「うわ
の空 (preoccupation)」も追加している。その他 E. T.
Anderson は「困惑」「懇願」を付加し、Kurath は習慣的
であったり、良い育ちを意味したりすることもあると
言っている。¹⁴⁾

これらに反して Schubiger はこの形は現在非常によく用いられており、「ていねいさ」の意味も薄れている
ことがあり、cliché となるとしている。そして Ward の
The Phonetics of English に口論の中でさえこのイントネ
ーションが使用されていたと書いてあるのに対し、こう
いう傾向のいい例証だと言っている。¹⁵⁾

筆者の観察では「ていねいさ」「安心感を与える」「興
味・関心」のほか「困惑」「控え目な懇願」「ひやかし」
「皮肉」「不平」「非難」「さり気ない調子」を表わして
いると思われる例を聞いている。¹⁶⁾ もっともこれらの意
味が直接 low rising と関係があるとみていいかどうか
判断し難いことも少なくないが、少なくとも、そういう
情況においても用いられていると言えるわけである。

ノックとか電話の応答で“あなたは誰ですか”と尋ね
る調子は上昇調が多く聞かれ、正体不明の相手に対する
「ていねいさ」と考えられないでもないが、むしろ一種の cliché となっていると解釈した方がよさそうである。
'Who /is it ? (ST) [電話で] •Who /is it ? (ST) [玄
関のベル] Well, fellow: 'who are /you ? (SJ) [知ら
ない相手に対して] ^Who /is it ? (M) [ドアのノッ
ク] ^Who /is it ? (SP) [脅迫している相手に対して
電話で]

特に最後の例は cliché という考え方の方が適切である。
いずれにしても low rising tone がいかなる含蓄を持
つかを決めかねる時もあり、何も特別に意味していない

14) Audrey M. Bullard, *Improve Your Speech* (London: Anthony Blond, 1967), p. 161. V. J. Cook, *op. cit.*, xix & pp. 46-47. Kenneth Croft, *A Practice Book on English Stress and Intonation* (Washington: English Language Services, 1961), pp. 60-62. Anderson, *op. cit.*, pp. 63-64. Hans Kurath, *A Phonology and Prosody of Modern English* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1963), p. 130.

15) Maria Schubiger, *English Intonation: Its Form and Function* (Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 1958), p. 59.

16) 渡辺和幸「特殊疑問と上昇調」音声学会会報 133 号 (昭和 45 年 4 月)

こともある。一般には大して感情的色彩のない上昇調が
多くなっていると言えようが、上昇調全体は統計的に見
た限り、BE で 10.4%, AE で 6.3% という数字が示す
ように、BE について述べた “very frequent” という
Schubiger の観察は適切でないということになろう。

ここで問題にしている上昇調は主として low rise で
あるが、半ば位からの上昇調も 10 例あり、意味の点にお
いてはこの high rise に特に違った色彩があるとは思わ
れない。もう 1 つ注意すべきことは下降調の場合と同じく
head となっている疑問詞が必ずしも level でなく、
downglide, fall, rise と種々あり、AE には downglide
が多いのが特色で、これは WH-Q に限らず、AE 一般
の特徴と考えられる。¹⁷⁾面白いことには、最初上昇調で
言われた WH-Q も同じものをもう一度繰り返して言う
時には下降調になる。

^What have you been .doing since ^high school ?
I ^say, •what have you been ^doing since ^high
schod, Laura ? (G)

A. 疑問詞が Level の場合

BE について言えば上昇調の内 80% 強の 66 例がこれ
にあたるが、AE では 30% にすぎない。もっとも down
glide を加えれば 70% 近くなる。

'What's your ,name ? (ST) [ていねい] •Where
shall I ,put him ? (G) [親しみをこめて] •When are
you ,leaving ? (S) [やさしさ?] Tell me, Constance,
"how do I look this 'evening ? (SC) [興味] What
does 'that mean, e•xactly ? (ST) [関心と軽い驚き]
"Wky do all these/courtiers and 'knights and
'churchmen, ,hate me ? (SJ) [困惑] •What are you
,doing here ? (D) [遠慮] 'What's her ,name ? (SP)
[ひやかし] 'Why on earth don't you 'go 'up and
,change ? (IE) [非難] And •whose •fault is ,that ? (D)
[不平] •Where is that ,percolator ? (ST) [さり気ない
調子]

その他興味ある例としては “threateningly” という指
示があって 'What is 'this ? (SJ), “supercilious (横柄
に)” とあって 'What is the ,matter ? (SJ), “in full
horror” として "What/can/ever/"save/,us ? (I) と
なり、それぞれ上昇調となっていることである。

B. 疑問詞に Downglide のある場合

BE は 4 例 (5% 弱) のみであるが、AE には 19 例 (36
% 弱) 聞かれ、ここにも AE の特徴が出ている。

^Why do you 'think 'Tom was so ,wicked. Louise ?

17) cf. 渡辺和幸「英国英語と米国英語のイントネーション」
武庫川女子大学紀要 18 集、人文科学編 (1970)

(ST) 'What're you going to do in Washington?

(D) 'Where shall I put these candles? (G)

C. 疑問詞に Fall がある場合

BE は 11 例、AE は 17 例聞かれるが、O'Connor & Arnold は「疑問詞または助動詞に fall がくると、訴えるような、疲れきった (weary)，そして絶望的な調子さえ帯びることがよくある」と言い、更に「非常に親しい間柄で暖かい同情や愛情があることを示すこともある」とつけ加えている。¹⁸⁾

Schubiger は「憤慨」「非難」「当惑」「懇願」の響きが強くなることがよくあると説明している。¹⁹⁾ 筆者の集めた例では、「違慮」「控え目な調子」「懇願的」「非難めいた響き」の感じられるものが目立った。しかし同時に、「上品さ」「さり気ない調子」「関心」「chiché」のようなものも聞かれる。

Willy dear, 'what has he got against you? (D)
〔遠慮〕 'How old are you now? (M) 〔控え目、遠慮〕 'How did you do it? (D) 〔懇願〕 'Why have you come back? (CP) 〔非難〕 'Where is that place in the country, by the way? (IE) 〔さり気ない〕 In what way have you changed? (CP) 〔口論中に〕 'How's your mother? (M) [cliché?] 'Why is it that at a bachelor's establishment/the servants invariably drink the champagne? (IE) 〔召使に言っている〕

D. 疑問詞に Rise があるもの

この種のものは 2 例あるだけである。どちらも単独かそれとも前置詞だけを伴う場合である。1 つは *The Glass Menagerie* の中で Jim が、Laura からガラスの一角獣を手に押し入れられて、言う、

What are you—doing that for? You want me to have him? Laura? [she nods.] , What for?

やさしさのこもった調子である。もう 1 つは *The Same River Twice* で刑事が You can be there to ease your mind. と言うと Johnny は ,When? と尋ねる。単独の場合、聞きかえしの質問とまぎらわしいことも考えられるが、low rise ということと情況の 2 つから容易に区別がつく。

V. 上昇下降調と下降上昇調

Rise-fall は極めて稀で、BE 4 例、AE 3 例、他の *Waiting for Godot* に 1 例あるのみである。一般に fall の強調形と見てよいであろうが、もっと厳密には、

O'Connor & Arnold の指摘しているように「相手の意見に挑み、反対している語調 (a note of challenge and antagonism)」を含むことが多く、気持ちとしては、「しかし、それでは何故…」という形で現われることが多い。²⁰⁾

'Why 'cucumber ^sandwiches? (IE) But •how would that be ^possible? (I)

O'Connor & Arnold が指摘しているもう 1 つの含蓄である「責任の否認」の例は見当らない。その他の例。

'Why an^nounce him? (SJ) 'What can I have 'done with my ^briar? (*Waiting for Godot*)

下降上昇調については、BE、AE 共に 3 例ずつ、*Waiting for Godot* に 4 例ある。この少ない例では文全体ではなく fall-rise を帶びた語に注意を向けさせる働きがあるのでなかろうかと思われる程度である。故に WH-Q の問題というよりは個々の語句の問題だと言った方がよいかもしれない。もちろん、ここでは分離していない下降上昇調 (undivided fall-rise) についてのみ対象としていることは言う迄もない。

'How was the ^key? (ST) 'What shall we ^talk about? (CP) 'Where's the ^ring? (M) •What do you ^mean? (S)

VI. 平 担 調

普通の会話では平担調でしゃべることは先ずないということになっているが、実際には WH-Q であろうとなかろうと日々聞かれる。BE、AE 両方で聞かれるが、AE の方がやや多い感じがする。Halliday は祈りとかスポーツ放送では完全な文の nucleus として用いられることを指摘しているわけだが、²¹⁾ それ以外では level tone が nucleus として用いられないと主張している者の 1 人である。Crystal はこの点について 6 つの理由を挙げて nucleus としての level tone を認めようと考えている。²²⁾ 筆者も先ず WH-Q に 30 例も発見していることだけから判断しても、認めてよいように思える。

Jassem も high level と low level に分けて nucleus と考えているが WH-Q については 1 例示しているにすぎない。²³⁾ Anderson は falling-rising tone の一種と見

20) O'Connor & Arnold, *op. cit.*, p. 46.

21) Halliday, *A Course in Spoken English*, p. 63.

22) David Crystal, *Prosodic Systems and Intonation in English* (Cambridge: Cambridge University Press, 1969), pp. 215-217.

23) Wiktor Jassem, *Intonation of Conversational English* (Wroclaw: Wroclawskiego Towarzystwa Naukowego, 1952), pp. 78-79.

18) O'Connor & Arnold, *op. cit.*, p. 68-69.

19) Schubiger, *op. cit.*, pp. 59-60.

第3表 上昇調の WH-Q の Head の Tone

Head の Tone	Level	Downglide	Fall	Rise	疑問詞のみ	計
Same River	35	2	0	0	1	38
Speech-print	5	1	3	0	0	9
Importance	4	1	2	0	0	7
Cocktail Party	2	0	5	0	0	7
She Stoops	4	0	0	0	0	4
Saint Joan	16	0	1	0	0	17
小計	66	4	11	0	1	82
Death of Salesman	2	6	7	0	0	15
Marjorie	0	3	3	0	0	6
Beyond Horizon	0	1	0	0	0	1
Incident	3	0	1	0	0	4
Glass Menagerie	4	5	1	1	0	11
Subject Roses	5	4	5	0	0	14
Picnic	2	0	0	0	0	2
小計	16	19	17	1	0	53
Waiting for Godot	4	3	2	0	0	9
Beloved	7	1	2	0	0	10
合計	93	27	32	1	1	154

なし、段階的に下降し、最後の強勢のある音節が上昇しないので宙ぶらりんになったものを示しているが、これも一種の level tone と見なせば、「語り手が返答になんら重要な興味を持っていない場合」として挙げている次の2例は参考になる。

'When were they •here? 'Which 'one do you •want?²⁴⁾

Level tone も head によって2種類聞かれ、疑問詞が level head になっているものと、downglide head のものがあり、BE では7対1で level が多く、AE は11対5で、downglide の比率は高くなっているものの結局 level が多い。

BE の8例中には Anderson の言う「相手の返事に余り関心を示さない態度」と思われるものとして次の例が

24) Anderson, *op. cit.*, p. 80-82. (イントネーションは筆者の用いた記号で表わしてある。)

ある。口論中に自分を無視して独り言みたいにつぶやき始めた夫 Edward に対して Lavinia は言う。'Edward, what 'are you ,talking about? 'Talking to yourself?

AE 16例の中には、無関心の気持ちが出ている •What •time will •you be •home? (D) があり、若く美しい時に立派な男性を見つけておかないとだめだと言う母親に対して娘がいや気がさしたように問う But "where do I ,come in? (P) [私の立場はどうなるの] と口笛をよく吹くことをとがめられ、だから出世しないのだと言わされた Biff の So •what? I like to whistle sometimes. (D) という言葉にも、挑戦的口調が感じられる。

相手の理解の不足を見下した調子のものには、ペルーア人ではないかと言われた時の Bayard の答え、•What's the •matter with you, •asking •questions like •that in •here? (I) があり、相手から異論が出て、何を言っているのかという調子で言う Lebeau の言葉、"What

are you talking about? (I) も同様の含蓄がある。

Level tone はまたいろいろな感情的色彩をもって、使用されている。当惑、困惑の例として、

'What on earth do you mean by a 'Bunburyist'? (IE)

その他の例としては

♪What're you talking about? (D) [憤慨] ♪What was the name of the place we stayed at? (S) [思い出] ♪What did you say this medal was for? (S) [少し離れた所から] ♪How is—Emily Meisenbach getting along? (G) [ためらい] About what? (S) [けんそん]

また呼格があるため、下降調と同じような印象を与えるものがある。

VII. 繰り返し疑問

相手の言ったことがはっきり聞きとれなかったり、信じられないような場合にもう一度明確にさせるため、上昇調の WH-Q を使うことはよく知られている。この場合の上昇調は、疑問詞に high rise が来るのが普通である。実際集めた50例の内、繰り返し疑問の大部分(40例)はこの種の典型的なものであるが、その他、種々様々なものがある。

相手の言ったことがよく聞きとれなかったり、信じることができなかったりで、もう一度繰り返すことを要求する型は、疑問詞のみ言う場合が圧倒的に多い。

Oh, 'what? (SP) 'Who? (IE) 'What? (G)
'Where? (Waiting for Godot)

完全か又は不完全な文の形になっている場合は比較的小ない。

'What did you say? (ST) 'What is 'that? (ST)
'How many brothers? (CP) 'Who's going away? (CP)
Saved from 'what? (Godot)

疑問詞の最初の部分に僅かな下降があり、すぐ上昇する例が1つあるが、これは典型的なものの強調形と見なしていいであろう。同じく強調形と思われるものに明らかな low fall-rise を使用しているものがある。

♪Who, /my honest George Hastings? (SC)

また一寸前に言ったことを忘れたのでもう一度教えてくれという意味での WH-Q が2例あるが、これは「何だったっけ」と思い出そうとする気持ちが感じられ、普通の情報を求める WH-Q と繰り返し WH-Q の中間的な形と言ってよいであろう。

Pike は最後の重要な語で上昇する繰り返し疑問を認めているが、²⁵⁾ Kingdon は、(1) 相手の言うことを正し

く聞きとれたが、確認する時、元の文の強勢を変えずに繰り返し、(2) 相手の言ったことの大部分は聞こえたが、一部分だけ確信がない時、その怪しい語に nucleus を置いて繰り返し、(3) はっきりと自分の意見を言う前に、時間かせぎをする時、強勢の場所は変わらないが、全体としてピッチが低くなるとしている。²⁶⁾ これに相当する例は次の1例だけである。

{ Edward: 'What 'future had you ever thought there could be?
Celia: 'What had I thought that the future could be? (CP)

同じように相手の言ったことを繰り返しているのに相手の言ったのと同じ下降調になっている例が2つあるが、極めて特殊な例である。

{ Celia: Well, 'how did he per'suade you?
Edward: 'How did he per'suade me? Did he persuade me? (CP)

{ Sheilah: Well, of course it is, but 'what on earth for?

Scott: 'What on earth 'for? (Beloved Infidel)

最後に、やはり珍らしい例として、相手の言ったことがはっきり聞きとれなかつたのを聞きかえす WH-Q で、平坦調が使われている例を示そう。

'What did you say—about glass? (G)

VIII. まとめ

筆者の利用し得た資料から、次のようなことが言えると思う。

1. WH-Q は非常に高い率で英米共に下降調が多い。(BE...85.3%, AE...86.3%)

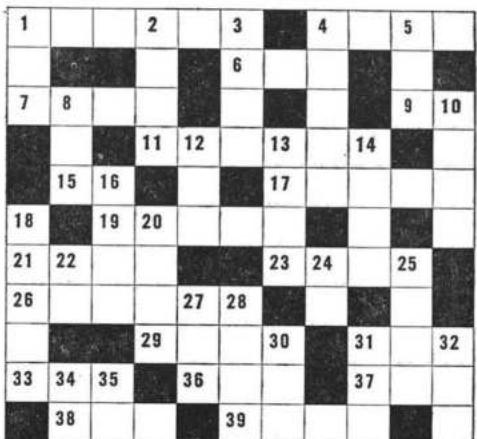
2. 下降調の場合、BE, AE 共に典型的と思われるイントネーション・タイプは相対的には一番多いが、一般に言われている程多く使われていない。(a) BE については level head は下降調の 82% あるにしても、low head, 途中の downglide, fall, nucleus の high fall のため、はるかに低い割合となり、high fall を normal type と考えても 50% を割るであろう。(b) AE についても level head で始まるものは下降調全体の 63% 強しかないのに、level 3 で始まるもの、途中の downglide, low fall を差し引くと 50% ないであろう。

3. AE では、下降調、上昇調を問わず疑問詞に部分下降 (downglide) が来るのが多く、BE との違いを見せている。

25) Pike, op. cit., p. 46.

26) Kingdon, op. cit., pp. 215-216.

CROSSWORD PUZZLE



ACROSS

1. A desk usually has one of these
4. Past tense of TEAR
6. You breathe this.
7. It has 365 days.
9. Abbreviation for MOUNTAIN
11. Mid-western state in the U.S.
15. Possessive form of I
17. Name of Popeye's girl friend
19. Synonym for OLDER
21. Synonym for STORY
23. Repetition of sound
26. Land surrounded by water
29. Cost of going on a train
31. Nickname for BENJAMIN
33. Synonym for CHILD
36. Present tense of PAID
37. Plural form of IS

38. Antonym of WET

39. Antonym of EAST

DOWN

1. Antonym of NIGHT
2. Antonym of PLAY
3. Water falling from the sky
4. When a criminal goes into court he is given this
5. Male sheep
8. Kind of tree
10. You have these on your feet.
12. Antonym of SUBTRACT
13. Synonym for PAINFUL
14. To exhale audibly in sorrow or pain
16. Synonym for SHOUT
18. A long piece of WOOD
20. One of many on a tree
22. Conjunction
24. Abbreviation for CENTIMETER
25. Synonym of ABOVE
27. Short sleep
28. To sketch
30. You can see with either one.
31. You hit a baseball with this.
32. Antonym of OLD
34. Abbreviation for IDENTIFICATION
35. Abbreviation for DOCTOR

The solution to this puzzle may be found on page 40.

4. AE では nucleus に downglide を取るものが BE より遙かに多い。もっとも BE では 2 例しかなく, nucleus としては例外的である。

5. 上昇調は BE が 10% 強, AE が 6% 強で, 想像通り BE が多いが, BE の上昇調が "very frequent" と言える程かどうか疑わしい。

6. 上昇調は「ていねいさ」「上品さ」「安心させたり, 勇気づけたりする態度」「関心」以外に口論などで、「非難」「不平」とか「怒り」「脅迫」の含みのある時さえ用いられ、結局どんな情況でも用いられる傾向も見せていく。別段含蓄のなさそうな時でも用いられている。

7. 以上の用法の上昇調は low rise ということになっているが必ずしも事実はそうではなく, high rise と感じられるタイプも時々使用されている。

8. 上昇下降調と下降上昇調 (undivided) は WH-Q にはほとんど使われない。

9. ごく少数ではあるが, 平坦調も WH-Q に使われている。全部で 30 例あり, 1.5% 強にあたる。

10. 繰り返し疑問は疑問詞に high rise のある型が普通であるが, 疑問詞だけのものが多く, fall-rise, fall, level のものも 1, 2 例ずつあり, nucleus が疑問詞以外の所にあるものもある。 (武庫川女子大学助教授)



HŌJŌKI

方丈記

KUSAJIMA TOKISUKE

草 島 時 介

Again, on the 29th of April in the fourth year of Jishō (1180)¹⁾, a mighty whirlwind arose at Nakanomikado, Kyōgoku²⁾, and it travelled as far as Rokujō. Wandering a few cho in one gust, it broke all the houses in its path, crushing some entirely flat to the ground. In some only the beams and pillars were left, and in some the roofs of the gates blown off and carried violently over a distance of four or five cho. Fences were blown, and boundaries vanished, making two residences one. Many rare treasures were whirled up into the sky. Thatches from roofs were whipped up and scattered as if they were leaves in the winter wind. Dust, blown up like smoke, blinded the people. The howling of the wind made hearing impossible, and made people think of the evil wind of Hell. Many houses were destroyed and numberless people killed and maimed while trying to mend their houses. The wind travelled toward the south-west, to the great grief of those who lived there. Of course, a storm wind is to be expected, but people have never seen such a powerful one. I thought that it was surely a cursed symptom of something serious.

These examples will serve to show how difficult and unstable is human life and how uncertain are we and our houses. Then think upon the cares and troubles we experience according to our social situations. Those of low situation who receive the favor of those in high place may indeed be steeped in pleasure for the moment, but cannot be happy long. They are forced to restrain their grief, and

又治承四年卯月のころ、中御門京極のほどよりおほきなるつじ風おこりて六条わたりまでふける事はべりき。三四町をふきまくるあひだにこもれる家ども、大きなるもちひさきもひとつとしてやぶれざるはなし。さらながらひらにたふれたるものあり、けたはしらばかりのこれるもあり、かどをふきはなちて四五町がほかにおき、又かきをふきはらひて、となりとひとつになせり。いはむや、いへのうちの資財かずをつくしてそらにあがり、ひはた、ふきいのたぐひ、冬のこのはの風に亂るが如し。ちりを煙の如く吹たてたれば、すべて目もみえず。おびただしくなりとよむほどに、ものいふこゑもきこえず。彼の地獄の業の風なりとも、かばかりにこそはとぞおぼゆる。家の損亡せるのみにあらず、是をとりつくろふあひだに身をそこなひ片輪づける人かずもしらず。この風ひつじさるの方にうつりゆきて、おほくの人のなげきをなせり。つじ風はつねにふく物なれど、かかる事やある。ただ事にあらず。

1) The period of the dynasty of the Emperor Antoku.

2) Proper names of streets of the ancient Kyōto.

すべて世の中のありにくく、わがみとすみかとのはかなくあだなるさま、又かくのごとし。いはむや、所により、身のほどにしたがひつつ、心をなやます事はあげて計ふべからず。若おのれが身かずならずして、權門のかたはらにをるものはふかくよろこぶ事あれど、おほきにたのしむにあたはず。なげきせちなるときもこゑをあげてなくことなし。進退やすからず。たちあにつけて、おそれをののくさま、たとへば、すずめのたかのすにちか

choke back their tears. In every aspect of their behaviour they are filled with fear, as if they were sparrows close by the nest of a hawk.

The poor living next door to a rich house are always ashamed of their wretched condition. They cannot be easy in mind even for a little while, seeing the envy of their wives and children and viewing the disdainful attitude of the rich neighbors.

If he lives in a small place jammed up close with houses, he cannot be free from fires; if in an unfrequented one, he is subject to inconvenience in coming and going, and may be in danger of burglars.

Those men who hold influence are often avaricious, and single men are contemptuous of others. Wealth gives birth to care, while poverty is always the parent of grief. Dependence makes one another's slave, while charity obliges one to be affection's servant. If one acts according to the ways of the world, he will be troubled; if he acts as he likes, he may seem insane. Where and how shall we enjoy a moment's peace of existence?

I inherited my paternal grandmother's estate and lived there for a long time. Afterward, however, I was bereft of influence and enfeebled by frequent misfortunes, till at last, when thirty years of age, I made up my mind to give up the estate and build a hut to live in just as I liked.

When compared with the residence in which I had lived, this one was scarcely larger than one-tenth. It was nothing but a living-room of my own, scarcely deserving the name of a house. I built a mud-wall, but could not afford a gate. A storage-place for a vehicle was constructed, with bamboo pillars supporting the roof. When it was windy and snowing, the hut was exposed to considerable danger. And close by the river-bank as it was, it was in danger of being flooded; moreover, of being attacked by burglars.

So even here I have been troubled with disagreeable earthly cares for these thirty years. The occasional accidents that came to me against my will, were a constant reminder of bad luck. So when I became fifty, I left the house and the world

づけるがごとし。若まづしくして、とめる家のとなりにをるものは、あさゆふすほきすがたをはぢて、へつらひつついでいる。妻子僮僕のうらやめるさまをみるにも、福家の人のないがしろなるけしきをきくにも、心念々にうごきて、時としてやすからず。若せばき地にをれば、ちかく炎上ある時其災をのがる事なし。若邊地にあれば往反わづらひおほく、盜賊の難はなはだし。又いきほひある物は貧欲ふかく、トシヨク 獨身なる物は人にからめらる。トクシン 財あれば、おそれおほく、貧ければ、うらみ切なり。人をたのめば、身他の有なり。人をはぐくめば、心恩愛につかはる。世にしたがへば、身くるし。したがはねば、狂せるににたり。いづれの所をしめて、いかなるわざをしてか、しばしも此の身をやどし、たまゆらも、こころをやすむべき。

わがみ父かたの祖母の家をつたへて、ひさしく彼の所にすむ。其後縁かけて、身おとろへ、しのぶかたがたしげかりしかど、つひに跡とむる事をえず、みそぢあまりにして、更にわが心と一の菴をむすぶ。これをありしすまひにならぶるに十分が一なり。居屋ばかりをかまへて、はかはかしく屋をつくるにおよばず。わづかに築地をつけりといへども、かどをたつたづきなし。たけをはしらとして、車をやどせり。雪ふり、風ふくごとに、あやふからずしもあらず。所かはらちかければ、水難もふかく、白浪のおそれもさわがし。すべてあられぬよをねんじすぐしつつ、心をなやませる事三十餘年なり。其間をりをりのたがひめにおのづからみじかき運をさとりぬ。すなはちいそちの春をむかへて家を出で、世をそむけり。もとより妻子なれば、すてがたきよすがもなし。身に官碌あらず。なにに付けてか執をとどめん。むなしく、大原山の雲にふして、又五かへりの春秋をなん經にける。

altogether. Since I had no wife and children, there was nothing I found hard to give up. Did I, who was not a pensioner, long for my former position? I spent in vain many springs and summers among the clouds of the Hill of Ōhara.

Then, when the dew of sixty years was vanishing, I built a hut where I intended to pass my older days. It could be compared to a hunter's shelter for the night or the cocoon of an old silkworm. As small as the other was, this hut is scarcely a hundredth of its size. My life was declining, and my abode was reduced whenever I moved. Its structure was like that of no ordinary house. The room was ten feet by ten; its height less than seven feet. Since I had no mind to settle in a definite place, I did not decide on a fixed one. My hut consisted of clay-floor, thatched roof, and planks linked together with hooks in such a way that they could easily be disassembled if I found anything against my will. How little the expense to change my home! Two carts were enough to carry the house; I had only to pay their small hire.

Since I secluded myself in the innermost recess of Hino, I have made a temporary blind on the south side of the hut. Under the blind I laid a bamboo-mat, along the west wall a watershelf, and in the house I hung an image of Buddha, that his brow might shine in the evening sun. Also I hung a picture of Fugen³⁾ and of Fudō⁴⁾ on each of the door leaves. On a little shelf above the sliding door you might find three or four trunks of black leather, containing some extracts of Japanese songs, musics, Ojōyōshū⁵⁾ and so forth. By their side against the wall I placed a Koto and a Biwa, which I called Origoto⁶⁾ and Tsugibiwa⁷⁾ respectively. This, then, was my temporary dwelling.

Now I will describe for you the conditions around. Water is stored in a stone-reservoir and comes in through a pipe on the south side of the hut. Since the woods are close by, I can easily get

こに六そぢの露きえがたにおよびて、更にすゑはのやどりをむすべる事あり。いはば旅人の一夜の宿をつくり、老たるかひこのまゆをいとなむがごとし。是をなかごろのすみかにならぶれば、又百分が一におよばず。とかくいふほどに齡は歳々にたかく、すみかはをりをりにせばし。その家のありさま、よのつねにもにず。ひろさはわづかに方丈、たかさは七尺がうちなり。所をおもひさだめざるがゆゑに地をしめてつくらず。つちゐをくみ、うちおほひをふきて、つぎめごとにかけがねをかけたり。若心にかなはぬ事あらば、やすくほかへうつさむがためなり。そのあらためつくる事いくばくのわづらひかある。つむところわづかに二両。くるまのちからをむくゆるほかには、さらに他のようとういらず。いま日野山のおくにあとをかくしてのち、東に三尺餘のひさしをさして、しばをりくぶるよがとす。南にたけのすのこをしき、その西にあかたなをつくり、北によせて、障子をへだてて阿彌陀の繪像を安置し、そばに普賢をかけ、まへに法花經をおけり。東のきはにわらびのほどろをしきて、よるのゆかとす。西南に竹のつりたなをかまへて、くろきかはご三合をおけり。すなはち和歌、管絃、往生要集ごときの抄物をいれたり。かたはらに、琴琵琶おのの一張をたつ。いはゆるをり琴つぎびはこれなり。かりのいほりのありやうかぐの如し。

3) The 8th son of Amidabutsu Incarnation of charity and intelligence, constancy and wisdom, and act and evidence.

4) Body which destroys demons and devils in the evil world.

5) Volumes written by priest Genshin in the 3rd year of the Eikan. In these prayers for salvation are collected and belief in Buddha is told.

6) A folding instrument.

7) A portable instrument which can be divided to sections.

その所のさまをいはば、南にかけひあり。いはをたてて水をためたり。林の木ちかければ、つま木をひろふにともしからず。名を外山といふ。まさきのかつらあとうつめり。谷しげけれど西はれたり。觀念のたよりなきに

logs and firewood. The place is called Toyama. Ist paths are too overgrown with vines for people to walk along. The valley is covered with thickets, but it opens up toward the west, and is convenient for me to sink in the meditation of the Paradise in the West.

In spring I see wistarias in full bloom to the west, purple clouds on the hills. In summer, I can hear the cuckoo singing his mournful note and I talk with the bird, asking that I shall be guided when I leave this world for the mountain of death. As for the autumn, the shrill chirp of the cicada can be heard everywhere. To me, they sound as if they were lamenting over this unstable world. In winter snow is interesting to me—snow which accumulates in depth and then melts away may be compared to human sins.

(p. 43 よりつづき)

る可能性は大いにあるであろう。慣用は変化するからがある。慣用の変化が辞書・語法辞典の記述に具現されるのに時間を要するのは当然のことであろう。したがって、慣用の現実と辞書・語法辞典の記述との間にある程度の time lag (時間的ズレ) が生ずるのは、必然のなりゆきであるともいえよう。

ここでひとつ考えてみなければならないことがあるように思われる。それは、ことばの中で変化のテンポの速い部分と、そうでない部分がある。ということである。語いの面ではことばの変化は非常に大きく、3年・5年という比較的短い時間も無視することはできないであろう。他方主として統語論の対象となるであろう面については、語いの面におけるような急速な変化は見られないが、少なくとも20~30年の期間を区切ってみれば、そこにかなり大きな変化がみとめられるであろう。その面でも、今日では過去の時代よりも変化のテンポはたしかに速まっているであろう。それゆえ、もし辞書が改訂される際単に語いの面のみを修正してゆくとしたら、当然慣用との間に大きなズレを生むことになるであろう。

これまでに筆者のおこなった調査はいくつかの語法にとどまるが、そのいずれにおいても、辞書・語法辞典の記述は慣用の現実から大きくズれていた。今後さらに調査を進めてゆきたいと思うが、この語法の場合のように過去のものをただ踏襲し今日の時代に対処し得ない面が少くないのでなかろうか。辞書の果す役割から考え

しもある。春はふぢなみをみる。紫雲のごとくして西方にほふ。夏は郭公ホトトギスをきく。かたらふごとに、しでの山ヤマをちぎる。あきはひぐらしのこゑみみに満てり。うつせみのよをかなしむかときこゆ。冬は雪をあはれぶ。つもりきゆるさま罪障ザインヤウにたとへつべし。

て、その記述が慣用の現実からあまり大きくズれていることは許されないのである。そのことはまた、本来辞書に負わされた宿命であるとでも言うべきであろうか。辞書は、あくまでも、慣用を映すかがみでなければならないのである。

(酪農学園短期大学助教授)

(p. 66 よりつづき)

かく耳(目?)ざわりになりがちな/phoneme/や{morpheme}又はdeep-surface structures等の‘Theory’と言うabstract的表現法を控え、地についた‘practice’側の責任者である言語教師一般の即時即用の参考書として、あるいは日本で英語を外国語として教えておられる先生方や、将来の語学の先生、そして又研究者を教育している教育学部のTeaching Methodology担当の教師にもこの最新の専門書を御紹介する次第である。(The Center for Curriculum Development, Inc. 刊, xiii + 416 pp., \$ 10.00 (U.S.), © 1971) (ハワイ大学助教授)

(p. 67 よりつづき)

の専門家ではないので、「林語堂の表現の立場からの文法」が果して厳密な意味で学問的・科学的に成り立つかどうか知らないが、常識的・実用的に成り立っている」といっている。1972年の現在、私は長谷川氏の本書は比類ない英作文の良書であると断言したい。

(E L E C, 生徒用テキスト 76ページ 350円, 教授用資料 31ページ 100円) (茨城大学教授 黒沢 博)

『文法論 I』

(英語学大系 第3巻)

太田 朗・池谷 彰・村田勇三郎著
大修館書店, XX+678 pp., 約2,200

YAMAGUCHI HIDEO

山口 秀夫

上記「英語学大系」は、「音韻論」の部をすでに世に送って、本書により文法論に入るのであるが、この第1部は、「大系」の性質上、従来の学説、とくに英米・オランダ・デンマークのいわゆる伝統的文法学説の比較検討を主とした論述である。伝統文法は第19世紀の歴史的・比較研究と、そこから発達した一般的・記述研究を受け継いで発展したものであるが、その研究方法については、基本的な点で必ずしも統一されてはいない。ことにその用語問題に関していえば、他の分野と同様、不統一な点が多い。それゆえ本書のような試みは、きわめて労苦の多いものであるが、もしそこから従来の研究の結果の共通財産のようなものが浮び上ってくれば、一般研究者のために利するところが大きいであろうし、将来の文法論の参考にもなることと思う。

本書は2部に分れていて、前半は「伝統文法の組織」を論ずるもので、池谷彰氏が担当し、後半は「現代英語の諸相」を主題として村田勇三郎氏が執筆している。後半が現代英語の語法 (usage) を問題にしているのは、後にも触れることであるが、文法家がその対象とするところも、文法形式の類型ばかりでなく、日常実際に用いられることばの慣用の文法もあるからであり、またその研究法には最近新しい傾向が見られるからである。

太田朗氏は全篇を監修して、原稿に「若干の加除訂正」を行なった旨記されている。

A

1. 伝統文法の組織を論ずるに先立って、著者は諸文法の比較の據点を Halliday の文法模型に求めている。伝統的諸文法がその異なる観点と方法のゆえに、ただちに共通な文法体系へ集約できないとすれば、別に比較のための枠組を設けることは適切な方法であろうと思う。M. A. K. Halliday の文法模型は、早くは Word 誌 17, 1961, 241-92, に発表され、そのほか、A. McIntosh お

よび P. Strevens との共著 *The Linguistic Sciences and Language Teaching* (London, 1964) などにも見えるもので、その構成には H. Sweet 以来の伝統がなお生きているが、F. de Saussure 以後の言語構造觀、とりわけ同時論と共時論、統合構造と系合構造の觀点も重要な部分を占めているし、また英國言語学派の主流となった J. R. Firth の諸学説、ことに言語分析の段階、文脈・場面の意味についての見解は、生き生きとそこに伝えられている。このような枠組の中に従来の伝統文法の諸説がどこまで体系的に収まるものか、いろいろの問題が残るであろう。この枠組に収まらない部分も出てくると考えられるのであって、著者もそのような剩余的な部分については別に述べて、注意を払っているようである。

著者はまず、Halliday の「尺度」と「範疇」による文法を略説している。初めに言語に内在する主要段階として、音声を内容とする実質、その形式、その生ずる文脈の3段階をあげている。言語活動にはこのような面があるので、言語研究でもそれに従って分析すべきであると考えるのである。このほかに、形式と実質との関係、言語の外にある非言語的な場面という現象も別の段階と考える。

このうち形式に対応する研究分野は、文法と語彙論である。古く H. Schuchardt は、文法を体系的な研究として、語彙をその索引であると見たが、ここではともに体系的と見ている。両者の体系には類似するものがある。統合関係と系合関係がそれである。ただ異なるのは、文法が鎖ざされた(限定的)系合関係をつくるのに反して、語彙は開かれた(制限なし)組をつくることである。そのいずれにも項目があり、その属する範疇がある。しかしそれ以上は両者の類似は平行しない。

言語形式のうち、文法形式のつくる類型は文法的項目とその範疇によって説明される。Halliday の設ける文法範疇は、単位・構造(構造要素の組み合わせ)・類(異

なる段階に属するが同じ働きを示す単位の集合)・体系(対立のある系合関係)の4範疇である。英國学派は統合・系合を連鎖・選択とも呼ぶ。なお構造と類とは分析の深さによって第1次、第2次などと段階を設けることがある。この範疇は具体的な言語資料としての形式項目によって最終的に示される。それが指標(exponent)である。

言語の意味については、Hallidayは、形式項目間に存在する関係としての形式意味と、文法項目と実際の場面との関連としての文脈的意味を分けている。

2. ここで著者は各文法家の比較検討に入るのであるが、その主な問題は、それぞれの文法の(1)目的、(2)分野、(3)形式、機能、意味、(4)記述の態度、(5)材料、(6)文法の特徴などである。取り上げられる文法家は、Sweet, Jespersen, Onions, Zandvoort, Poutsma, Kruisinga, Palmer, Curme, Longなど。

各文法の特徴を説くに当って著者が問題としているのは、形式と意味のことである。それに加えて、機能ということがしばしば論ぜられる。困難なのは、各文法家がそのどれに重点を置いているかということだけではなくて、この3用語の用法が思い思いであって、統一がないということである。これは同じ文法問題についての見解の相違ということだけではなくて、時には単に同じことについての用語法の相違に過ぎないこともある。

形式の定義も多様である。著者の概観したところによれば、(a)多くの文法家は形式を形態素の音声形式として用いている。(b) Kruisinga, Poutsma, Palmer, Curme, Longなどのように連語を含むこともある。(c)またSweet, Jespersenのように語順にもいうことがある。H. Paulのような古い時代の言語学者にも統辞手段としての語順は見えている。(d) Onionsでは多義的で、音声形式、体系の項目、類、構造の意味に用いられている。文の形式というとき、文の構造のことである。

「機能」はとりわけ多義的で、(a) Onions, Curmeでは、文法項目の文中での位置、分布的関係のことである。(b) Sweet, Jespersen, Kruisinga, Curmeでは、意味内容のことであるが、Sweet, Jespersen, Kruisingaでは体系の項目のことでもある。(c)体系の項目のことだけ用いているのはZandvoortである。(d) Kruisinga, Poutsma, Palmer, Curme, Longでは構造要素のことにも用い、Kruisingaの用法が最も多義的である。

のことから共通の事実を引き出すとすれば、これらの文法家が機能と呼んでいるものは、外部的な言語形式に対する内部的な意味ということであろう。それは形式

的意味としての機能と文脈的意味とに分けられよう。形式的意味は文法的項目の第一義的な意味である。文脈的意味は2次的にしか文法的項目の分類原理にはならない。伝統的文法家は、例外を除いて多くはその両面を文法分析に援用しているのである。

著者の挙げている各文法家の特徴はそのことをよく示している。文法機能を主として文法形式の生ずる位置に見ているOnionsも、下位類、体系の項目(属格・与格など)、指標相当語句などの設定には文脈的意味を用いている。

言語科学の基礎を記述文法に置いたSweetは、文法を一般的規則であるとして音韻論、形態論、統辞論を含め、語彙論は孤立的事実であるとしてこれを区別した。統辞論は、形式統辞論と論理的統辞論とに分けて、前者では文法形式とその機能(動詞→叙述、など)を論じて形式中心であり、後者では文法的範疇とそれをあらわす形式を論じている。この形式中心主義はJespersenにも伝えられている。ここでは意味は文法体系と論理的範疇との関係と考えられていて、関係概念となっている。

Jespersenは、その文法論の細部について見ると、その諸著の間に、また時期を隔てて多少の変化があるが、大綱においては形式と機能(形式的意味)を中心としている。意味(文脈的)を文法記述に援用しているのは、例えば代名詞のような類の2次分類においてである。Jespersenは、形態論をO→I(形式から機能へ)の方向、統辞論をI→O(機能から形式へ)の方向の研究と考え、「時」のような普遍的概念範疇を「時制」のような文法的機能範疇から区別しようとした。Leopoldとの論争の的となった3Ranksの区別も著者の説くように、文の構造要素の区別をいうのであるから、機能上の分類である。異なる形式も同一の機能を文中で果すことがある。これは類(class)の考え方であるが、Jespersenはthe son'sとof the sonとを同じ範疇とは認めなかった。ここで形式の基準を固守したのは、属格のような範疇が語の2次的な性質に属するからであろう。しかしどもに付属的な文法機能をとりうることは認めなければならない。Curmeのように上記の句を属格と呼ぶ立場は、後のFillmoreなどでは深層文法の問題としてあらわれてくる。

ネクサスと連接(Junctionの著者の訳語)との関係については、Jespersenはその両方に共通にランク(I-II-III)を認めているが、それは深層的には、JII-IはN I-IIから抽出できるという考え方から出ているようである。これはFunkeの批評するように、語(群)を文の連語関係の中で扱っていない。Jespersenがラン

クを関連した発話の中で見た概念であると見ているとすれば、ネクサスと連接とは別の構造であって、異なる構造要素から成るものと考えるのが順序であろう。目的語も連語関係の中で見れば、主語とは異なるランクを認むべきである。Jespersen がこれを第1次語としたのに対して、Funke が異を立て Subnex としたのは理由がある。ランクは純粹に論理的であるよりは機能的、言語形式の荷う文法的機能である。

著者はなお比較を進めているが、Zandvoort の記述は形式中心で、その形式は形態素の音声形式である点がとくに目立っている。第1次的には、形式によって形態素の区別をし、さらに機能によって同一形式を再区別している。文脈的意味は2次類（副詞の下位区分など）の分類基準に用いられている。Poutsma の形式、機能、意味の概念は必ずしも厳密ではないが、形式を主軸としてその意味を記述する。そのいわゆる機能が文の構造要素を示している場合を除いて、進行形の2次機能などという場合は文脈的意味のこと、これは類の下位分類の基準とすべきであろう。ほかの所では意味をそのような手段に用いている。

Kruisinga は共時的な科学的記述を目差しているが、文法に音声面も含め、文法記述の基準を段階的に形式（形態素の音声形式・連語）、機能、意味に求めている。しかしここでも機能は構造要素のほかに文脈的意味を指していることがあるから分離しなければならない。この3つの異なる基準を段階的に用いた理由は、形式を音声形式だけにとると、名詞、動詞のように屈折形をもつものと、その他の品詞のようにそれをもたないものとに分れるからで、Kruisinga は前者を音声形式を軸としてその機能を記述し、後者を機能中心に論じている。それゆえ同じ品詞が異なる機能のもとに重複して説かれる煩わしさを避けねばならない。*-ing* 形のような同音語は形式上の区別を立てようと思えば、機能上の対立を証とするほかない。品詞の場合は、それ自体分類原理に統一がないのである。

Kruisinga が語勢をも形式基準に用いているのは Sweet の伝統である。

Palmer は英語学習のための文法を目差しているから、いろいろの特徴をもっている。文構成に働く類推過程を重視しているから、代置類を設定している。これは形式としての形態素の音声形式を基準として、連語も含んでいるようである。その文法は口語を対象とし、Sweet の影響を受けて、慣用法の文法であり、音声面を重視し、構造語と内容語を区別し、先驗的に論理的範疇を仮定している。Sweet に従って、形式文法（形式とそれに対

応する用法・意味）と論理的文法（強調・肯定など）の両分野を区別している。ここでは、文法形式の意味は統辞的意味（文法機能）と論理的関係（言語に内在する）とに分析される。副詞などの下位区分もその内在的意味によって行なわれているのである。構造語と内容語とは必ずしもその区別が明らかでないから、それに基づく文法領域と語彙領域も分け難いものがある。

Curme も実際の用法に基づいた文法を目差しているが、その形態論と統辞論との境界が明確でないのは、基準としての形式、機能、意味の区別が時として失われるためであろう。文中の位置は形式とも機能とも呼ばれていることがある。文脈的意味は機能とも意味とも受けとられていることがある。一般に文脈的意味中心の記述であって、相とか法のような類の下位区別にはとくにそれが見られる。記述的であると同時に歴史的で、目的論的である。

Long の文法は学校文法の伝統を構造主義の分布論や生成文法の変換論などで強化したものであるが、文法機能を中心として記述し、2次類の記述に意味を援用している。文法構造の意味は文構造全体に関連して定まるものである。Long は文法機能に、文または節段階の主要構成要素と主要統辞機能を構成している構造要素としての内包統辞機能とを区別している。文法構造を語の文法として始めているのもその特徴である。また書きことばの類型を文法の問題としていることが注意される。

3. 以上のような比較の後に、著者は各文法の組織に移っている。ここにも統一はないので、Halliday の示した単位・構造・類・体系の4範疇をもとにして、各文法の異同を明らかにしようとしている。これは有益な概観である。

単位、文を越えて文群を単位として認めているのは Zandvoort である。文を2肢的なものに限定する Sweet の立場は Jespersen では採られていない。節の場合も同様に、一般には主語と述語（動詞）の結合と考えられているが、Long や Poutsma などは、含意された構成素も考えに入れているから、準動詞から成る節、不完全節も認めている。Halliday の漸次の推移（cline の著者の訳語）の考え方からいっても、このような形式は節として認められる理由がある。主要節と従属節の区別については、名称の差はあるが、Onions, Long などに認められ（Zandvoort も）、Jespersen では従属節のみである。また Sweet では、A+B と A・(B) の場合を区別している。句は Sweet でも Onions でも品詞相当句として分類され、Jespersen ではランクの一つに相当する語群

で、その成分の意味の結合とは異なる意味単位であるとされている。語群 (group) は Sweet の用語。

構造・構造の理解も一様ではない。文の 1 次的構造要素を主部と述部とする伝統的立場は、Onions, Zandvoort, Kruisinga, Palmer, Curme などに見られるが、目的語を入れているのは Jespersen, Sweet, Poutsma などである。Jespersen は第 3 次語まで入れている。それゆえ 2 次的構造要素の定め方も各文法家によってさまざまである。Onions では述部動詞、述部形容詞、述部代名詞、目的語、付加部であって、学校文法の 5 文型に伝えられている。これは述部要素の品詞によって文型を決定するものであるが、Jespersen は動詞の独立性の度合によってそれに伴う要素を擬似述部または純粹述部と見ている。Long の主要統辞機能 (文段階) と内包統辞機能 (句段階) も第 1 次構造と第 2 次構造の別であるが、Onions とも Jespersen とも異なっている。節の段階で、対格付不定詞の解釈がそれぞれ異なっているのは目的語の理解の相違によるのであろう。句の構造要素は Long が内包統辞機能と呼んでいるものであるが、その中心部をもつ構造には名詞的、形容詞的、副詞的なものが区別されている。そのうち名詞的な句について、その前位付加語の位置を、著者は Hill と Chatman を引用して解説している。2つ以上の前位付加語の中心語に対する修飾関係は Jespersen, *Analytic Syntax* に詳しい。前置詞句という名は Long のいうように、句の品詞的機能をあらわしていない。

類・類設定の基準は一般に一定していない。文の段階では、Sweet は文脈的意味を用いているが、Jespersen は形式によっている：定形文と無定形文・節の類別も、構造要素に基づくもの (名詞的、連体、副詞的)、文中的位置や独立・従属の別によるもの、主要平叙節とその変形としての分類などである。句は多くその中心部によって分類される。ここでは統辞構造による分類が可能であろう。語の段階では品詞設定の問題である。その基準は多くの文法家では明示されていない。後期の Jespersen では、形態論的基準よりも統辞論的基準が重視されている。Long では、統辞論的かつ形態論的である。著者は Robins の純粹形式的基準をあげ、Crystal の批判を引用して問題を概観しているが、中間的存在もあるから、やはり伝統的品詞論は恣意的なもので、形式と意味とを階層的に用いるほかはない。機能語も語形と機能と意味による分類である。冠詞論 (221—232) は詳細であるが、問題を残している。一定の説はない。

体系。ここには 2 次的文法範疇があげられている。「法」は文の段階でも、句の段階でも説かれる。動詞の

屈折形だけに基づく説と迂言形式をも扱う場合とある。Long のように、命令法を除き、不定法、動名詞法、分詞法を設けることもある。時制については、Sweet の不定時制と定時制とが普通の基準である。厳密に屈折形をもとにするとときは、Kruisinga のように現在形と過去形のみ、Jespersen のように現在形、過去形、完了形、過去完了形の 4 形になるが、Sweet では 7×2 形式である。丁はほかに延語時制と想像時制を置いている。態では、受動態は形式を基準とするが、受動動詞では意味が基準である。相も形式的に Sweet はその存在を否定し、意味上 Curme は分類を試みている。しかし単純形と延語形の対立は相表現の機能をあらわすであろう。格の決定にも屈折形式による立場と語形、語順、文脈的意味、音調などを考え合わせる立場がある。ここには歴史的伝統がなお生きている。著者はさらに、制限、限定特殊性などの用法について述べているが、これは文法的意味であって文法範疇ではない。

B

第 2 部は現代英語を、言語による伝達行為としての諸觀点から、その異なる諸相について研究し、またいかなる領域に用いられるかを考え、この方面の主要研究者の調査方法にまで説き及んだ詳論 (283—603) で、具体的な個々の言語事実を多く挙げている。伝達行為の基本的事実として示しているのは R. Jakobson の図式で、その挙げる 6 要素はそれぞれ言語の意味機能に対応している (情的・指向的・言語交際的・メタリング・詩的・文脈的)。言語の異なる諸相として取上げられるのは主として、個人的差異、時代的差異、地理的差異、社会的差異で、それはさらに使用域の別によって、言語使用の場、媒体、スタイルの 3 に区分されている。個人的差異では、個人言語の多様性、方言内の個人差など、時代的差異では古語、廃語などの定義、古語復活、新語の誕生など、地理的差異では英米語の相違、米国語方言など、社会的差異では標準英語、慣用の流れ、ことに R. Quirk の大規模の慣用法の Survey, Kučera-Francis の統計的研究、慣用論争、過剰矯正、年令差、性別差、人種差、2 方言使用の問題など、が实例とともに論じられている。言語使用域 (register) の問題としては、文脈・文体の別について述べている。ことに Kenyon の社会的差異と機能的差違の区別、Joos の文体論などが紹介されている。慣用論の歴史にも触れている。調査方法はそれぞれの文献を取り上げて特徴を示しているので有益である。

(甲南女子大学教授)

Marina K. Burt,

***From Deep to Surface Structure:
An Introduction to Transformational Syntax***

KUKI HIROSHI

九鬼博

本書は表題の示す通り、初心者に Nida (1947) 式の対話形式を探り、変形文法の基礎的概念、特に Chomsky (1965) 及びそれ以降の変形文法に関する著作、例えば Rosenbaum (1967 a, b) 等に含まれている新理論を平易なアメリカ英語で説明している。本書中に順次上手に説明されている句構造規則、変形規則は本書巻末の 243—244 頁と 247—252 頁に各々、Chomsky (1957) 式に要約されている。

第 1 章 (11—66 頁) では單文、第 2 章 (67—93 頁) では関係節、及び関係節変形文、第 3 章 (94—135 頁)、第 4 章 (136—238 頁) では補文子変形文が取り扱われているが等位構文は含まれていない。変形諸規則の順序付け (ordering) に終中主眼が置かれ、順序付けられた (ordered) 変形規則、順序付けの要らない (unordered) 変形規則、半分順序付けられた (half-ordered) 変形規則を詳しく説明し、その結果が 255—256 頁の索引 ("Index") にまとめられており、253 頁にはその一覧表がある。その他に言及されている規則以外の概念には：

- 規則の内在的順序づけ (54 頁, Intrinsic Ordering of Rules)
 - 規則の外在的順序づけ (55—57 頁他, Extrinsic Ordering of Rules)
 - 選択制限 (70 頁, Selectional Restriction)
 - 代名詞化 (119—121 頁, Pronominalization)
 - 最短距離の原則 (129—135 頁, (The) Principle of Minimal Distance)
 - 中間干渉的規則 (136—157 頁, Intervening Rules)
 - 娘付加変形 (154 頁他, Daughter Adjunction)
 - 変形循環の原則 (157—165 頁他, (The) Cycle Principle)
 - It-交替変形 (代名詞交替変形) (169 頁他, It-Replacement or Pronoun Replacement)
 - 姉妹付加操作 (172 頁他, Daughter Adjunction)
 - 文の主語 (235—238 頁, Sentential Subject)
- 等がある。

初期の変形文法の諸著作〔例えば Chomsky (1957) や Postal (1964)〕には変形文法の利点のみを一般的に強調し、他の言語記述の種々のモデル (例えば構造言語学やタグミーミックス) の欠点を突くものが多かったが、本書は M.I.T. における比較的最近の変形文法の立場を明確に提示している。本書の序文にある通り、本書は 1967 年から 1970 年の間に於ける M.I.T. での Ross と Halle の講義の著者自身の講義ノートに依る。

我々未知言語の実地調査 (field work) に時間の大半を過している者共には、この種の手軽な手引書 (field manual) の方が、哲學的・数学的理論の詳細な診断・検討を行なう分厚い変形文法の専門書より、どれ程有難いかは測り知れない。南海の孤島での長期間の実地調査 (fieldwork), その後のデータ整理、更に論文形式での発表に日々追われているうちに、つい数年がすぎていくからだ。世界中で英語その他の実際の外国語教育に全身全霊をかたむけておられ、いつしか年老いていく多くの人々も同じ感じを抱くであろう。

アメリカ人、日本人の言語学者による英語・日本語の変形文法研究も今年で 16 年目になる。変形文法の研究はもともと自分の母国語の無意識の知識体系 ('native tuition') を定式化 ('formalize') するものとされてきた。米国・濠洲・ニュー・ジーランドにおいて、言語学者の未知言語、いわゆる「蛮地語」の記述や博士論文もつい数年前迄の構造言語学的記述、又はタグミーミックス (Pike's tagmemics) が多かった。これも近年変形文法による記述が逐日増加しつつあるのも変形文法の年輪と相当程度の世界的定着を物語るものか。

16 年間増加の一途を辿ってきた変形文法に関する単行本と論文は、チョムスキーの初期からの暗黙の目標、即ち変形文法とは「(ある)言語の全ての文法のみを生成する装置である」〔Chomsky (1957)〕というスローガンが人類のとうていし得えない夢である事を残念ながら暗示し続けているに過ぎない様に思われる。これは Chomsky (1965) に発表された「理想的状態における人間の言語能

力'('competence') という概念があく迄フィクションに過ぎないのに酷似している。

本書でも統語諸規則はその入門的性格にもかかわらずかなり正確に定義され公式化されているが、まずミス・プリントの多い事、又幾つかの理論的に怪しい点が目だつ。

ミス・プリントは印刷屋と発行者に任せることにして、怪しい点を以下、2-3指摘する。

283頁の句構造規則、第8は次の様に成っている。

NP→Det+N

71-73頁、その他に出されている関係節文を生成するには、この規則は

NP→Det+N(S)

と多分すべきであろう。

Lakoff(1966)に初めて出された「It-入れ替え変形」('It-Replacement')は本書では「抽象的 it」として導入してある。補文子変形文を扱っている本書の中核とも云うべき第3章(94-135頁)、第4章(136-238頁)でこの「抽象的 it」は頻繁に使われているが243-244頁に一覧表式に載っている句構造規則にもこれが漏れている。

第3章、第4章の諸変形の説明、枝分れ図、その結果としての派生文等を全て正当化する為には、前出の句構造規則、第8を更に次の様にでも書き直す他あるまい。

NP→ $\left\{ \begin{array}{c} \text{Det}+\text{N} \\ \text{it} \end{array} \right\}$ (S)

変形文法論者の間で代名詞化の問題が一世を風靡した時期があった [Lees(1960)等を参照]。代名詞化の問題検討の雲行きが怪しくなってきた現状を反映してか、本書でも代名詞化の問題は119-121頁に妙な形で「さわり」程度にのみ述べている。

代名詞化、等位構文、その他かなりの数の変形が「談話分析」にまでの言及を要する変形であることには間違いない。例えば、ニュー・ジーランドのポリネシア語のマオリ語(話者10万人程)では Aux(動詞補助語句)は〔例えれば完了('perfective')を表わす *kuh* は〕パラグラフの最初の文で1度だけ使われ、2番目の文章からは義務的に消去される。マオリ語においては Aux(動詞補助語句)がつまりパラグラフ指標辞('paragraph marker')の役割を兼任する。(英國の言語学者風に言えば'double valence'('二重値')つまり「一人二役」)を持っている。)本書では難しい等位構文の分析にふれていないほか、他の変形文法学者が最近敬遠気味の代名詞化の問題、久しく忘れ去られている「談話分析」('discourse analysis')にもふれていない。

本書37頁及び248頁の「受動化変形規則」(Passivization Rule)も怪しい。著者の受動規則により、147-152頁にかけて例えば、

1a) 'Tiny Tim was persuaded to be bribed to be searched.'

という文章は

2a) 'Tiny Tim was persuaded to be bribed to be searched by someone (3) by someone (2) by someone (1).'

という文章から派生すると説明されている。上の(1a)の文の3つの by someone は本書の54頁、248頁の著者の動作主消去変形規則(Agent Deletion Transformation)により消去されるが、その消去の順序が怪しいのだ。

(1a) 中の 'by someone (1)' は 'was persuaded' にかかり、'by someone (2)' は 'to be bribed' にかかり、各々 'by + X' 部分に繰り返し可能な('recursive')規則、つまり循環規則('cyclic rule')として〔任意的('optional')〕動作主消去変形(Agent Deletion Transformation)が2度適用され、終端発生文(final derived sentence)

'Tiny Tim was persuaded to be bribed to be searched.'

が出てくるというのだ。これは我々の英語に関する知識・洞察(Chomskyの'intuition')に反する。本書の限られたページ数(256頁)の範囲内でも著作の受動変形規則(37頁、248頁)は恐らく次の様にでも書き直さるべきであろう。

s I(PreS)-NP-Aux [X Pass] Aux V(PreP)-NP-X] s-Y
S.D. 1 2 3 4 5 6
→Oblig
S.C. 1 4 3 5 by 2 6

原著者の受動形規則は同様の怪しき枝分れ図を152-157頁、201-205頁にものせている。もっとも147-152頁におけると同様、2つの受動規則から出てくる枝分れ図と違う「勝手な」文法的、終末派生文(final derived sentence)を出しあ茶を濁している。

Chomsky(1957)の受動変形は既に過去に属する。Chomsky(1965)に改訂された、代役要素('dummy element')による受動変形も少し怪しく、他の問題を共起させる。

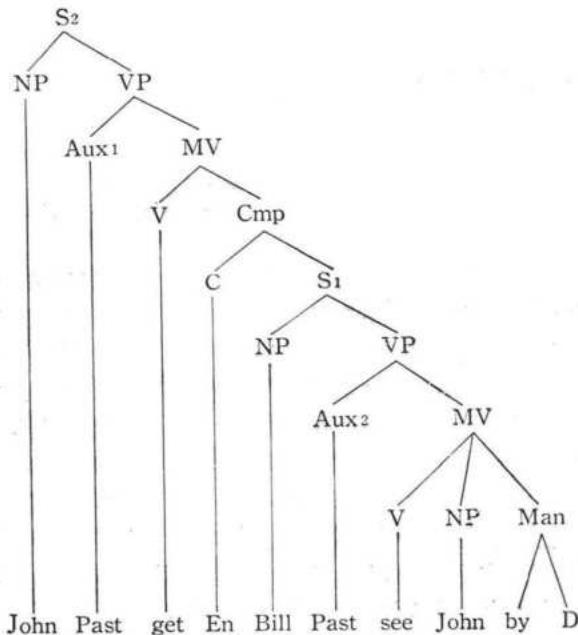
Manner→*by* ~ *passive*

本稿筆者の知る限りでは Hasegawa(1968)が英語の受動態の派生を一番精巧に説明している。

(7) MV→ $\left\{ \begin{array}{c} \text{be} + \text{C}\#\text{S}\# \\ \text{MV}_1(\text{Loc}) (\text{Time}) \end{array} \right\}$

(8) MV₁ → {be + Pred
[V(Prt) (NP) (Cmp) (Man)]}

[例]



終端派生文は D を Bill で、Aux₂ を C(En) で置き替え、S₁ 中の John を消去し、「John got seen by Bill.」がめでたく誕生する。

ただし、これは変形文法の諸規則を自分で書いてみた事のある誰もが知る所であるが、変形文法で困るのは、ひとつ規則を修正すると他の諸規則迄、一部、時として全部書き替えたり、他の規則との順序付け ('cordering') を再編成しなければいけない事である。ひとつやふたつの（変形）規則を改良してもそれが全体的にみて、より満足のできる本書の如き「総合的変形文法」に終わるとも又限らない。

本書、188—189頁には受動変形 (Passivization) と再帰代名詞化変形 (Reflexivization) が同一の単文 (simplex sentence) に共起し得ないと主張されている。この議論はこれでよろしかろう。189頁の例文

1) *Mary was understood by herself.'

2) *John was kissed by himself.'

が共に非文法的な文 (ungrammatical sentence) であるからである。

同様に205—207頁では本書に収められている句構造諸規則 (Phrase Structure Rules) 及び変形諸規則 (Transformation Rules) では以下の文法的文 (Grammatical Sentences) は派生 ('generate') できないとされている。

3) 'Henry tried to duck out.'

具体的には「等価名詞句消去規則」(Equip-NP Deletion) と「It-入れ替え変形規則」(It-Replacement) が同一単文中に共起し得ないからと言う。これは困る。上記の例、「John tried to duck out.」

が文法的文だからである。入門書とはいえ著者は本書中の補文子変形諸規則を更にもう一段と精巧化すべきであろう。

本書は色々の意味で Pike (1947) を想い出させる。両著共に、サイズ・重量・値段の点で似ているばかりか、活字の小さい事、印刷技術の貧弱さ、ミス・プリントの多さ等の点で驚く程似ている。Pike (1947) の巻頭(末)にある程度の「正誤表」(corrigenda and addenda) が本書にもいざれ必要であろう。

Pike (1947) は近年特に過小評価されてきた。本書も特に少なくとも我々実地の未知言語調査、実地の語学教育、等に忙しく、仲々変形文法の理論上の変化に日々、追いついていく暇のない者の間でだけは、過小評価されることなく、せいぜい長寿を楽しんでもらいたいものである。(New York, Evanston, San Francisco & London, Harper & Row, Publishers, 1971, 256 pp.)

参考文献

- Chomsky, Noam. 1957. *Syntactic Structures*. The Hague, Netherlands, Mouton.
- _____. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Massachusetts, U.S.A., M.I.T. Press.
- Hasegawa, Kinsuke. 1968. "The Passive Construction in English", *Language*, 44: 230—43.
- Lakoff, G. 1966. "Deep and Surface Grammar", Unpublished, Indiana University, U.S.A.
- Lees, R. B. 1960. *The Grammar of English Nominalization*. Indiana University Research Center in Anthropology, Folklore, and Linguistics, Publication 12. Bloomington, Indiana, Indiana University.
- Nida, Eugene A. 1947. *Linguistic Interludes*. Glendale, California, U.S.A., Summer Institute of Linguistics.
- Pike, Kenneth L. 1947. *Phonemics*. Ann Arbor, Michigan, U.S.A., University of Michigan Press.
- Postal, P. M. 1964. *Constituent Structure: A Study of Contemporary Models of Syntactic Description*. The Hague, the Netherlands, Mouton.
- Rosenbaum, P. S. 1967 a. *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*. Cambridge, Massachusetts, U.S.A., M.I.T. Press.
- _____. 1967 b. "Phrase Structure Principles of English Complex Sentence Formation", *Journal of Linguistics*, 3: 103—18.

(滋賀国立大学高等研究所・太平洋研究所言語学科・研究員)

Kenneth D. Chastain,

**The Development of Modern Language Skills;
Theory to Practice**

Y. S. Jolly

The Development of Modern Language Skills: Theory to Practice は Center for Curriculum Development (CCD)¹⁾ が出版している Language and the Teacher: A Series in Applied Linguistics シリーズの内の一つで著者 Kenneth D. Chastain 教授は Purdue 大学の Dept. of Modern Languages 所属で過去にも F. L. Methodology に関する論文等²⁾を発表している外国語教育界の第一線の人である。

本書は上記のタイトルが示す通り「理論」と「応用」の2部から成っており著者の主旨は不可解な教授法公式や単に推薦された方式を受け入れる事ではなく "... toward a general orientation which will promote flexibility and growth and will make judicious and rational decisions for change and improvement possible"³⁾と明示され外国語教授法は時、場所に応じての各の教師による、独自の適応性と判断の彈力性を養うことであることを強調している。又外国語を教える過程は3段階に分かれ、先ず教師は外国語教育の目的 (objective) を確認すること、次にその目的を達する為の教授過程 (又はアプローチ) を定め、第3番目にその結果を評価することにある。

前半の第1章 'Theory' では現在言語教育界でその是非を議論されている Audio-Lingual Habit(以下 A-LH) 論対 Cognitive Code-Learning (C C-L) 論とを現代外国語教育の需要と目的にあてはめて客観的に比較し、又相違点に注目する事に重点を置いている。又この第1章では歴史的な背景から見た現在の外国語教育の状態、A-L

H 論と C C-L 論との各々に用いられている教材とその用い方、双方の理論的裏付けの説明と探究、母国語習得に関する種々の理論、そして上記の分野と密接な関連のある（他の関係学者による）諸々の研究等と言語教育の実地に当る語学教師への教え方(教授法)の詳細、判断、取り扱い等を Descriptive Linguistics と Behavioral Psychology とに根拠を有し機械的な学習法に傾きがちな A-L H 論と 'mind Process' を主体とし学習者の頭中に既在する概念にとって 'meaningful' として受け入れられるということを「習う」ということの根本条件であると観る C C-L 論を心理言語学的見地から分析している。

後半の第2章では 'Practice' を取り上げ教師は 'Theory' を認識することのみでは完璧な言語教育は出来ない事、教える技術を特技として学習者により正確に、しかも早く目的のレベルまで指導して行く事が出来なければならないと述べている。4種の language skills を教えることとそれらをテストして評価することを中心としたこの章では Chastain 教授は Listening Comprehension, Reading, Speaking そして Writing の4種 skills の詳細について、又特に教師が注意すべきである事柄、そして最初に掲げた目的達成の為の lesson planning, 例を挙げての1時間分のクラスの進め方、最後に総ざらえとしての助言や忠告を与えてしみくっている。

本書はもちろん英語で書かれているが著者は広範囲に亘る専門的な応用言語学上の「教授法」を明解に「理論」と「応用」とに区別して著述している所がこの本の第1の長所で、第2番目には多忙なスケジュールに追われる教師が授業の間に参考事項を探す時、本書は見出しがくっきりと鮮明に大きく、又内容は簡潔で必要に応じては重要事項がまとめの欄に箇条書きしてある為に便利である。第3の特徴は説論さまざまな現代言語の一部 (Applied Linguistics) を客観的に講じながらも出来るだけ語学教育者にとって直接そのままでは使用できず、と

(p. 58 へつづく)

1) The Center for Curriculum Development, Inc. 401 Walnut Street, Philadelphia, Penna., U.S.A.

2) Chastain, Kenneth D., "The Audio-Lingual Habit Theory Versus the Cognitive Code-Learning Theory: Some Theoretical Considerations," *JRAL* 7(1967):97-106, 又一方これに関連したものでは "A Methodological Study Comparing the Audio-Lingual Habit Theory and the Cognitive Code-Learning Theory: A Continuation," *MLJ* 54: 257-56 等がある。

3) 同書 pp. 1-2.

新刊紹介



■『英語の発想と表現演習』

長谷川 潔共著
木 塚 晴夫

思えば本書の著者一人、長谷川教授の面識を得、氏の日本の英語教育界に於ける独自の存在に多くの先輩同僚ともどもに筆者が気づいたのは、1960年の日本時事英語学会の関西大会の折であったと思う。時に氏は現職のお茶の水女子大学に就職される前後の時で、NHKの国際局にまだ奉職されていた頃であった。大学の英語教師の大半がほとんど日本国内の大学で同様の教育を受け、研究者としても大体似た様な研究とその発表をしている中にあって、氏は早くも当時からNHKの国際局で英語アナウンサーとしての経験を生かし、同僚の米人アナウンサーの英語の読み方の速度等を統計的に処理したリストを学会に提出して、一躍学会での立て役者になった。氏は時事英語学会にあって放送英語に造詣深いユニークな学者、英語教師でもあり、お茶の水女子大学に移られてからは1953年から4年間に及ぶアメリカ留学と、その時のcreative writingの勉強等の経験を生かされて、日本人学生に英作文指導を受け持されたのは半ば当然の宿命であったと思う。この間10年の経験から生まれたのが『英作文の指導法』大修館発行、1969であり、又本書『英語の発想と表現演習』ELEC発行、1972なのである。

ここで更にこの間に長谷川氏と筆者とが一層お互いを知り合う時期があった。國弘正雄氏の『国際英語のすすめ』実業之日本社、1972の中の一節に「ある語学研修計画での経験」なる文章があり、あの中の日本人教師3名とは長谷川氏、國弘氏、そしてこの筆者なのである。この語学研修計画は1969年の夏であったが、長谷川氏と國弘氏とはここで「英語の表現の集大成」という仕事に共に意慾を示され、『開明英文文法』一表現の科学—林語堂著、山田和男訳を良書としてあげられ大いに意気投合されていた。その後、國弘氏は『英語の話し方』と前記の『国際英語のすすめ』にその活動の一端を示され、長谷川教授は『英語ニュースの聞き方と発音練習』やNHKテレビ英語会話初級テキストに「英語の発想と表現」の寄稿をされると同時に、自らも同講座に出演されている。

さてここで本書『英語の発想と表現演習』の批評に入る。

本書成立の根本思想を長谷川氏自らの言葉を借りると次の様になる。

「成人した日本人が英語を学ぶ場合、原点を英語に置かずむしろ母国語において、それをさらに発想別に整理して、それぞれのカテゴリーに相当する英語の表現を暗記して使う方がよさそうだ。」(長谷川)

しかしこの点になると國弘氏も長谷川氏もすでに thinking in English を完全 master された方々であり、今生きた英語修得にはげんでいる学習者の学習心理は間接にしか

付度できない境地にあるわけである。又、

「英語で話をするときに、自分の頭の中の考え、つまり発想を本書のpart Iに見られるような項目にしたがって整理し、それに該当する英語表現を口に出す練習をする。頭の中で分類されている英語表現が、発想にともなって反射的な早さで口から出るまで訓練するのが(本書)の発想別による学習法である。」(長谷川)

筆者は本書を自らの英作文のひとクラス(1年生60名)で本年4月から使用している。本書のBasic Sentences, Dialogue, Model Paragraphsの録音テープも併用し、前記『英作文の指導法』と、本書の教授用資料も参考にして教授している。しかし残念ながらまだ満足できる授業の境地にはいたっていない。問題は学習者の側にもあるので、お茶の水女子大学の学生の様な比較的小グループのエリート群と、50人以上の、英語をあまり得意としていない学生群に本書を教授する場合の差もあるのである。しかし本書が全くユニークで新鮮な教材であることは、同じELECのListen and Learnの教材も同様であって、普通の英作文の教材を使用した授業が教授者も学生も死ぬ程退屈であるのと比較すると、雲泥の差である。

本書の「現代英語の表現形式」の分析は変形文法的観点からすれば、あまりにも皮相であるが、又それ丈実際的でもあるわけだ。実は『開明英文文法』の著者林語堂は序文の中で「文法自体も表現の科学と考え、外形から内部の意味へ入って行くのとは逆に、意味から外形へ、即ち概念の表現に向う方法を究明」している。この点は長谷川氏と全く同じである。又この林語堂の書の訳者、山田和男氏は1959年当時、「私は文法

(p. 58 へづく)

■『ことばの世界』

ジョン・コンドン著
斎藤美津子 共訳
横山絵子

朝日新聞の学芸欄が数週間前に書いていたように、言語に関する考察がさいきんとみに盛んになってきた。『言語』と題した専門誌が大修館から発刊されたことはご存じのとおりだし、言語関係の新刊や再版も次々に出されている。電波媒体による擬似体験が即時性とやらの名のもとにわれわれの茶の間に侵入、現実との乖離が進行しているだけにいわば認識の原点に立ち戻って現実をみなおそうという傾向が出てきた、ということでもあろうか。一つの新しい文化現象としてこれは広く一般知識人の注目を惹くが、言語教育に携わっている者にとっては、とくにみすごせない動きであるといえよう。

このときにあたり、コミュニケーション学者として令名があり、日本にも長く、アフリカやメキシコなどにおいても実地調査の豊かな体験を有するコンドン博士による書きおろしが、秀れた共訳者の手によっていち早く訳出され、容易に入手できるようになったことは、喜びにたえないところである。

一言にしていえば本書は一般意味論の入門書である。一般意味論の追随者ではないことをほのめかしながらも、著者がアメリカにおけるG.S.の名門として知られるノースウェスタン大学で学位を得たことが、本書の性格づけをしているといえよう。日本では日系米人のS.I.ハヤカワの『思考と行動における言語』(岩波書店)がこの分野におけるほとんど唯一の入門書とみなされてきたが、ここに同書と並ぶ有力な冊が加わったことを喜びたい。

ただ評者のみるところ、本書には以下の3つの際立った特色があるようと思われる。その第1は、哲学、ないしは認識論としての意味論と、行動科学の一環としての一般意味論との橋渡し作業が、かなり意識的にみられる点である。

戦後、大久保忠利氏らの努力によりアメリカ版の一般意味論が初めて紹介されたときに、われわれの多くはある種の違和感を覚えたものであった。中島文雄教授の名著『意味論』(研究社)などを通じて、哲学としての意味論に親しんできた人文系の人間にとっては、むしろ社会学に近い(と考えられた)一般意味論はいかにも異質に思われたからである。そこにはある種の外向性の騒々しさのごときものが感ぜられ、言語の本質に関する内向性の深まりが欠落しているかにみえた。R・ベネディクトの『菊と刀』の評価をめぐって、津田左右吉、和辻哲郎らの人文系学者と、南博氏らを中心とするアメリカ系行動科学者との間に激しい論戦が闘わされたのと、それは同工異曲であった。日本の伝統的スコラ的学問風土にとっては、アメリカ的なプラグマティズムに支えられた学際的アプローチは、何といっても異質なものでしかなかったのである。言語とは個人の内奥に潜むものであり、それを人間関係や社会の広場にひき出すことは、言語の本質に迫る上に少なからぬ夾雜物を加えるだけ、という感じすら存在したといえよう。

ところが本書において著者は伝統的な意味論、さらにはそれと近い関係にある哲学、記号論理学の考え方や成果を十分にとり入れ、ときに応じて援用することを怠ってはいない。たとえばE・カッシラーやチャールズ・モリス、B・ラッセルやF・C・ノースロップなどの引用が自家薬籠中のものとして縦横に使われ

ていることからも、これは明らかである。ここに評者はコンドン博士の深い学殖に加うるに、その周到な用意をみる。本書はもともと日本人の読者を対象に書かれたというが、それが単なるうたい文句でないことを、このことは裏書きしている。行動科学的な言語論に必ずしも馴れ親しんでいない日本の読者にとって、これはまことに親切な配慮であり、著者の温厚にして懇切な性格を示すものといえよう。一般意味論、もしくは先端的なコミュニケーション論への仲立ちとして、広くお奨めしたいゆえんはこの点にある。

第2の特色は、本書が異文化間コミュニケーションの研究者としての立場に貫かれている点であろう。著者は、「4つか5つの異なる文化圏で、それぞれ1年以上生活し、さまざまな価値に触れ、ぶつかった」ことを「幸運」に数えているが、その幸運をしっかりと受けとめ、「それぞれの文化を自己の生存をかけて愛そうと努めた」という体験を有している。それ自体著者のリベラルで捉われない人間性を示すものであり、評者が彼を敬愛する最大の理由もこの点にこそ存するのだが、異文化に属する人間どおしの意思疎通がどこに陥りをもち、どこに困難を潜めているかを多くの具体例をあげて懇切に説いている。しかも彼の挙げた、單に言語コミュニケーションにとどまらず、非言語的な手段にも及んでいる。本書のメタコミュニケーションの解説は、簡潔ではあるがすこぶる示唆に富む好文字である。

それはとにかく、異文化間のコミュニケーションは、われわれ日本人にとっては殊に重大である。人種的民族的言語的な高度の单一性という国内的な条件の故に、われわれには極めて不馴れた分野であるにもかかわらず、日本をとりまく国際環境、

さらには地球的状況はそのひよわさを克服することをわれわれに強要しているからである。その点、外国語教育にかかわりのあるお互いにとって、本書の具体的な記述はどこにポイントがあるかを教えてくれる意味で非常に有益である。国際的意思疎通の手だてとしての英語、という視点が強調されつつある今日このごろだけに、われわれにも無縁ではありえない。英語教育を単なる技術論におわらせずに、人類の他の仲間との理解増進に資せしむるためには、上記の視点は絶対的な重みをもつ。それなくして日本人の幸福も繁栄もなく、地球人類の存立すら危機に瀕するからである。著者は「国際関係における重大問題の一つは、ある文化にとって意味のある分類を、その分類が意味をもたない他の文化へ押しつけることだ」と述べ、「外国語を技術的に習得することは、その文化にあった意味論的反応を自分のものにすることにくらべれば、はるかに簡単なことだ」としているが、同じことを説きつづけてきた評者としては双手賛成せざるをえない。日本の英語教育がはたしてそこまで野心的であるかどうか若干こころもとなくもないが、それを目指すべき秋はようやく到来したといえるのではないか。

本書の第3の特色としてぜひ挙げられるべきは、日本人を対象に、日本にかなり固有な言語観、ないしはコミュニケーション・パターンを踏まえ、それとのかかわりにおいて物がいわれている、という点であろう。日本や日本文化についての言及は文字どおり枚挙にいとまがない程である。これは外国書の翻訳にはふつう求めえないユニークな特長といえよう。日本では話や議論はふつう内輪でするものとされているので、意味論ということばや概念がアメリ

カなど浸透していないかもしれないが、アメリカではしばしば semantic(s) ということばが用いられる、という指摘は、日米間の意思疎通のあり方のちがいを一言にいいえて妙だが、これまた「生存をかけて愛そうと努めた」著者の好もしい姿勢の具体的なあらわれであろう。

とはいえさすが冷徹な科学者として、決してあはたもえくぼには陥っていない。「将来日本人が、世界に対して偉大な貢献ができるとすれば……それは、日本においてさまざまな形で表現されている禪の思想、あるいは禪的な思想から出てくる」であろうとしながらも、そこにさまざまなアイロニーや矛盾もあり問題もあることを見逃してはいない。沈黙と直感的なコミュニケーションを重んじながら、他方では「なぜ途方もなく良質なトランジスター・ラジオ」を作れるのだろう、という問いかも、われわれの微笑を誘うのみならず、すこぶる本質的な問題提起でもある。このあたりを読んで、評者は唐木順三氏にぜひ著者と会って論議をかわしてもらえたと思ったことであった。『無常』『中世の文学』など数々の名著を通じ、唐木氏が追求しつづけてこられた一つの問題点は、日本のコミュニケーションの特異性の解明にあった、と少なくとも評者には考えられるからである。たとえば道元禪師の言語論 (!!) を著者はどう受けとめるであろうか。

日本の英語教育についても各所に言及がみられる。176頁から7頁にかけて、日本の英語教育が「報告的側面」に力点がおかれて、「指令的側面」がおろそかにされているために、英語を母国語とする人たちの意思疎通にこと欠く人が多い、という指摘があるが、コミュニケーション論の立場から、日本の英語教育に関連をもってきた著者の言だけに説得

力に富む。現に著者は夫人とともに数々の成人向けセミナーに講師として招かれ、その篤実な性格と手まね足まねを混じえての熱演の故に、主催者はもとより受講者の人気も多い。非言語意思疎通手段を実演してみせてくれるのは心楽しい経験である。評者のテレビ番組にも出演してもらったが、すこぶる好評で、ある雑誌がわれわれの対談を解説入りで再録した程であった。アフリカ滞在時代に現地人の男の子を養子にした、という私事も、常識的には書評の域を逸脱していようが、著者の多様性尊重への熱意と人間性の豊かさを示す挿話としてあえてご披露する。本書の説くところも、しょせんは人間のもつ多様性を認めあうことしか真の相互理解はありえない、という一点に帰着するからである。

なお、訳者に触れることなしに本書の紹介は不十分のそしりを免れがたいであろう。共訳者の一人、斎藤美津子女史は一般意味論の数少ない専門家として令名が高く、『話しことばの科学』、『きき方の理論』などの著作で知られるのみならず、国際会議の同時通訳者養成にあたっても、バイオニヤーとして主导的な役割を演じてこられた。(横山絃子さんはその俊英の一人である。) そしてその過程において、国際関係に占めることばの重要性を痛感するとともに、その「環境整備」の必要をたえず訴えてみえた。

同女史は原著者とは同学のよしみもあり極めて親しい間柄だが、この適訳者をえて本書はすこぶるリーダブルなよみものになっている。翻訳も異言語・異文化の間に橋をかけるコミュニケーション作業の重要な一環だが、斎藤博士らが practice what they preach をみごとに実践されたことに対し、心からの祝意と

(p. 70 へづく)

■『ラダー英和基本語辞典』

ジョン・ロバート・ショー著
福田 陸太郎 訳編

どのような辞典でも、それを使用する対象者に応じたそれぞれの特色を備えているものである。辞典の編者にとっては、それらの特色をどこに置くかが大きな悩みであろう。見出し語となる語いの選択と数、語義、適切な文例、発音表記、使用者のために使いやすくするためのさまざまな工夫など、無視出来ない重要な要素であることはいうまでもあるまい。

この『ラダー英和基本語辞典』にも、この辞典ならではの特色がいくつかみられる。この辞典は、John Robert Shaw 著 *The New Horizon Ladder Dictionary of the English Language* (Popular Library, New York; 1969) が母体となって作られたものである。この辞典の名前の通り、基本語を扱った辞典として他にない大きな特色を見いだすことが出来る。現在数多く見られる初学者向きの辞典でも、ほとんどが基本語を扱っていることはたしかであるが、それらはどのような基準のもとに選択したものであるか、どの程度の基本語としての裏づけがあるのかは問題があろう。

この『ラダー英和基本語辞典』のアメリカ版は、United States Information Agency が広範囲の調査に基いて語いの選択にあたり、日常使用語の頻度数、外国語としての英語を教える教師の意見などを参考にして単語 5,000 が収められている。さらに信頼出来るのは、このように選ばれた語いについて、12年間にもわたって実際に使用されたり、テストされたりしたということである。

この *The New Horizon Ladder Dictionary of the English Language* を土台として、日本版の『ラダー英和基本語辞典』では、中学校学習指導要領で示されている必修語 610 語さらに語学教育研究所選定の語い、その他の重要語を補足し、800 語が網羅されている。ちょっと気になることは、日本の中学校の英語では、必ずといって見られる固有名詞 (New York, London などの地名, Tom, Jane などの人名) が見当らない。これも、アメリカの辞典が母体となっていることに起因しているのであろうか。また、sick を見れば ill と比較し、elevator が出れば lift のちがいを気にし、fall と autumn のちがいはどうなのかななどつい欲ばった見方をしがちであるがこれも基本語辞典という建前からすれば、ぐっとこらえて目をつぶることもやむを得ないのであろうか。

さて、これらの見出し語の表わし方であるが、この辞典では、前述の基本語 5000 語を、頻度によって 1000 語ずつの 5 段階に分けている。もっとも頻度の高い 1000 語を 1 とし、次の 1000 語を 2 というぐあいに 5 段階を作り、それらの見出し語に数字が示されている。さらに、中学校指導要領にある 610 語には ▷、語学教育研究所選定の 1000 語には *、その他のもれていますの重要語には × などの印がついている。これらの数字、記号などは一見、わざらわしい印象をあたえないとも限らないが、簡単な約束事であり、やがては、かえって使用者に便利なものとなるかも知れない。

この辞典のもう一つの特色は、文例とその訳語、さらに語義である。文例は、どれをとっても、単語の正確な意味を伝えているものであり、説明も簡にして要を得ている。とくに訳語だけでは、との文意が判断

できない場合、逐語訳を付加し、初学者に納得できるようにしてある。1~2 の例をあげれば、You are welcome. という表現は、Thank you. に対して「どういたしまして」という意味のこととは、どの辞典にも見られるが、どうしてそのような意味になるのか、判断に苦しむものである。この辞典では、その場合の welcome 意味は、「恩義のない」ということで、「あなたは恩義に思わなくてよい」という表現をつけ加えている。また、have を用いた慣用的な表現として、中学校では、We had a good time at the party. などの表現によくぶつかる。Had a good time を「楽しかった」だけでは中学生には抵抗がある。そこで、この辞典であたえている have の語義「経験する」は、きわめて適切なものといえよう。

語義、文例の訳語が適切であるか否かは、意外と学習者にあたえる影響が大きいものである。訳語と英文との大きなへだたりは、しばしば学習意欲をそそることさえある。その意味でも、この辞典に示されているそれぞれの文例、訳語は、少なからぬ魅力となるにちがいない。(白水社 598 ページ 800 円)

(東京学芸大学附属竹早中学校
下村勇三郎)

(p. 69 よりつづき)
感謝とをささげるものであり、多くの人がこの秀れた訳書を味読されることを一人の日本人として切に願うものである。本書のメッセージはとくにわれわれ今日の日本人にとって、緊急かつ不可欠なものと信ずるからである。(サイマル出版会 242 頁 580 円)

(NHK 中級英語会話講師
國弘正雄)

展望通信

◆'72年度E L E C 夏期研修会

E L E C では今夏の「E L E C 夏期研修会」を下記の要領で実施する。

1. 会期 前期（中学校英語科教員対象）
7月31日（月）～8月26日（土）
- 後期（高等学校英語科教員対象）
8月14日（月）～8月26日（土）
2. 研修内容
 - (1) 外国人講師による口頭英語の練習
 - (2) 音声学、言語学、英語教育法、英語の社会的文化的背景等の講義
 - (3) 英語学習指導の実習
3. 会場 E L E C 英語研修所
(千代田区神田神保町3の8)
4. 会費 8,000円
5. 募集定員 前期、後期とも各150名
6. 研修資格
 - (1) 英語科担当教員であること
 - (2) 所属校長の推薦を受けていること
 - (3) 全期間研修できること
 - (4) 健康であること
7. 受付
前期 6月1日（木）～7月17日（月）
後期 6月15日（木）～8月5日（土）
定員になり次第締切
8. 願書
20円切手同封のうえ、東京都千代田区神田神保町3の8 E L E C 英語研修所「夏期研修係」宛請求されたい。

◆E L E C 夏期講習会

E L E C では一般成人を対象に「夏期講習会」を下記の要領で実施する。

1. 会期 前期 7月31日（月）～8月11日（金）
後期 8月14日（月）～8月25日（金）
2. コース
 - (1) 午前の部（9時～11時50分）
 - (2) 午後の部（1時10分～4時）
 - (3) 夜の部（6時～8時45分）
3. 研修内容

外国人講師による口頭英語（英会話）、発音の訓練

4. 会場 E L E C 英語研修所
5. 会費 9,000円
6. 受付
前期 6月1日（木）～7月28日（金）
後期 6月15日（木）～8月11日（金）
7. 願書
20円切手同封のうえ、東京都千代田区神田神保町3の8 E L E C 英語研修所「夏期講習会係」宛請求されたい。

◆E L E C 研究協力校

今年度のE L E C 研究協力校につきの4校が決定した。

- 北海道上川高等学校
北海道上川郡上川町東町 148
- 旭川市立永山中学校
旭川市永山町10丁目
- 仙台市立高砂中学校
仙台市蒲生字土手前16の1
- 岡崎市立甲山中学校
岡崎市中町北野東20

◆E L E C 月例研究会

毎月行なっている月例研究会（会場 E L E C 会館）は7月、8月は休会となり、9月以降はつきの通り開催される。

- 第58回 9月16日（土） 2:30～4:30
講演「転機に立つ大学入試と英語教育」
慶應大学助教授 小池生夫氏
- 第59回 10月14日（土） 2:30～4:30
講演「小笠原における英語教育」
都立上野高等学校長 大飼基義氏

◆E L E C 海外留学英語試験

E L E C では、海外留学希望者、T O E F L 受験者、海外出張者等を対象に、英語能力検定・診断・指導を行なっているが、次回は10月6日（金）に実施する予定である。希望者はE L E C 宛に願書を請求されたい。

◆第11回 I C U 夏期言語学研究会

来る9月2日（土）、3日（日）にI C U 夏期言語学研究会がI C U ディフェンドルファー記念館（東京都三鷹市大沢3）で開催される。

◆ English Teaching Forum の配布

U.S.I.A発行の英語教育専門誌 *English Teaching Forum* (隔月刊) の配布をE L E C が行なっております。講読料は年額1,000円(含送料)。

最新刊号(5月—6月)号の内容はつぎのとおりです。

“Thirty Dialogues for Classroom Use”

レコード1枚つき

“Notes on the Dialogues” by Anne C. Newton
“Dialogues: Why, When, and How to Teach Them”

by Julia Dobson

“A Trio of Crossword Puzzles”

“The Applied Linguistics of Pedagogic Dialogues”
by Carl James

なお、この号だけを希望する方には1部200円で配布しております。

◆ E L E C 選書の刊行

E L E C では、この秋からE L E C 選書(B6判)を刊行する予定である。10月に発行を予定しているものはつぎのとおりである。

齊藤 勇著『文学と語学との間』

高橋 源次著『生命の色』

高橋 源次著『文学のこころ』

村田 聖明著『現代英語60講』

福田陸太郎著『西洋の陰の中で』

國弘 正雄著『アメリカ英語の婉曲語法』

◆ E L E C P U B L I C A T I O N S の発行

E L E C 創立15周年を記念して、E L E C P U B L I C A T I O N S の第9号が研究社から7月に発行される予定になっている。主な収録論文はつぎのとおりである。

Overton, Douglas W., “Japan and the English Language—the Years Ahead”

Hill, Archibald A., “A Defense of the Audio-Lingual Method in Tesol”

Scott, Charles T., “Literature as a Type of Second Language Interference”

Strevens, Peter D., “The Teaching of English in Asia: How Can We Maximise Success and Minimise Failure?”

Tomlin, E. W. F., “English as an International Language”

Wardhaugh, Ronald, “Some Remarks on Foreign Language Instruction”

Hattori, Shiro, “Humanity, Individuality, and Society in Relation to Language and Culture”

Nakajima, Fumio, “Shakespeare and the Japanese Language”

Narita, Shigehisa, “Japanese Teacher of English, a Memoir”

Ota, Akira, “Modals and Some Semi-Auxiliaries in English”

Takahashi, Genji, “Hsün Tzu, Dogen, and St Paul on Human Communication”

◆ 『英語展望』の合本

『英語展望』の第25号から第36号までの合本第3巻(定価3,000円)ができております。ご希望の方はE L E C 出版部へ申し込んで下さい。

なお、合本の第1巻(第1号～第12号)および第2巻(第13号～第24号)の在庫が若干部あります。定価は各3,000円。

◆ E L E C 新刊図書

『英語の測定と評価』

D. P. ハリス著・大友賢二訳注 ¥ 950

本書は、D. P. Harris の *Testing English as a Second Language* を翻訳したもので、外国語としての英語テストはいかにあるべきかを論じており、英語教育現場の先生方の必読書であります。

◆ 原稿募集

『英語展望』では読者からの原稿を募集しております。内容・分量とも制限がありません。ただし未発表のものに限ります。掲載分には規定の原稿料をお贈りします。

◆ E L E C 賞研究論文・実践記録の募集

E L E C では、わが国の英語教育の水準向上、あるいは英語教授法の改善に直接役立つ実践研究を奨励する目的で、「研究論文」または「実践記録」を広く一般に募集しています。締切毎年9月末日。

◆ 誤記訂正

前号57ページで大江三郎先生の肩書を横浜国立大学教授と書きましたのは誤りで、九州大学助教授と訂正してお詫びします。

英語展望(E L E C Bulletin)

第38号

定価 300円(送料 85円)

昭和47年7月1日 発行

◎編集人 中島文雄

発行人 竹内俊一

印刷所 大日本印刷株式会社

東京都新宿区市谷加賀町1の12

電話(269)1111(大代表)

発行所 E L E C (財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の3

電話(265)8911～8916

振替・東京1179

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC